ノ爲メ如何ニ苦心焦慮シツツアルカハ、諸大臣ト雖モ必ラズ御承知ノ事ナラン、然ルニ政府部内ニ起リタル今次ノ風波ハ、如何ニ本件ニ向ツテ妨害ヲ與フルカ、京城ニ滯在スル我ガ新聞通信者ハ電報ヲ發シテ此出來事ヲ通報セリ、最早總辭職ノ噂ハ我國ノ新聞紙上ニ掲載セラレ、忽チ議論ハ嘖々タリ、我ガ政府ハ謂ラク、朝鮮ノ國事變幻常ナシト、我ガ人民ハ謂ラク、事已ニ此ノ如シ、朝鮮ノ前途察スベシト、之レヲ聞クモノ恐ラクハ朝鮮政府ハ不安心ナリ信ズベカラズトノ感情ヲ起サヾルモノナカルベシ。果シテ然ラバ余ガ貴國公債ノ爲メ折角幾十回ノ書翰電信ヲ發シタルモ空シク水泡ニ歸スベシ。余ハ固ヨリ朝鮮ノ臣民ニアラズ、又タ朝鮮ニ盡スベキ義務モ存セザルニ尚ホ且ツ然リ、然ルニ諸君ハ天ニモ地ニモ朝鮮ノ國家ヲ負ヒ、之レト興廢ヲ共ニスベキ而モ國務大臣ノ地位ニアリナガラ、偶マ國政ノ少シク緒ニ就カントスル片端カラ破壞セントスルガ如キ擧動ヲ爲ストハ如何ニモ國家ニ不親切ニ、否、却テ國家ヲシテ益々否運ニ導クモノニアラズシテ何ゾヤ。諸君徐ロニ熟考セヨ、硝烟空ヲ掩ヒ砲聲耳ニ轟キ釵花眸ヲ射ルニアラザレバ未ダ以テ國家ノ危亡ト爲サザルカ、何ゾ時局ニ通ゼザルノ甚シキヤ、世ニ禍機ノ休スル時節コソ恐ルベキモノアラズ、是レ其ノ何レノ時、何レノ處ニ發動スルヤ預期スベカラザレバナリ。貴國ノ事甚ダ之レニ類スルモノ有リ、若シ夫レ今ノ時機ニ於テ國政改新セラレズシテ猶ホ舊時ノ觀ノ如クナランカ、其亡ビザランコトヲ欲スルモ豈ニ得ンヤ。

金總理等　曰ク其レ之レヲ知ラザルニアラズト雖モ、若シ世間流傳スル如キ候補者スラ已ニ指名セラレ、善後策モ充分備ハルモノトセバ、强チ我々ガ官職ニ戀着シテ位地ヲ固持セントスルガ如キハ潔トセザル所ナレバナリ（朴泳孝總理大臣ニ、其他二、三ノ新任大臣ヲ出スベシトノ評判ヲ指スモノナランカ）

井上　折返シ候補者ナリト世間ニ傳フル者ノ姓名ハ抑モ何人ナルヤ。

金總理　閔泳達、沈相薫、李載純、閔泳喚等諸氏ハ卽チ大臣候補者中ニアリト云フ。

井上　予モ已ニ之レヲ聞カザルニアラズ、然レドモ信ヲ措カザリシ。何ントナレバ是レ坊間傳フル所ノ臆說ニシテ、其出處ノ程モ略ボ聞キ込ミタレバナリ。若シ夫レ諸大臣ニシテ是等ノ巷說ヲ信ジ、終始想像ヲ逞クシ、彼レ我ヲ害スルニ意アリ、彼レ我ヲ惡メリトノ意ヲ挾ンデ胸中每ニ疑團ノ纏綿スルアラバ、政府内部ハ殆ンド波瀾ノ絕間ナカルベシ。宜シク大臣タルモノ卓絕ノ意見ヲ持シ、容易ニ他ノ離間策ニ陷ラザル樣、又互ニ猜疑ノ念ヲ去リ公心秉彝一圖國務ニ盡瘁セラルヽ樣望マシトノ意ヲ以テ忠告ニ及ビタル末、總理始メ三大臣ニモ大ニ曉ル所アリテ、此ニ新舊大臣間風波モ一ト先ヅ調和

ニ歸シ、再ビ相提携シテ從前ノ如ク國務ヲ執ルコトハ相成リタリ。之レニ因テ一言陛下ノ御注意マデヲ奏上シ置キタキハ、過日陛下ノ御前ニ横ハル卓子ヲ指シ比喩ヲ引キタル如ク、陛下ガ諸大臣ニ對セラルヽニハ、充分公平ニ、彼是厚薄ノ區別ナキ樣、又國務上ニ關スル御諮詢ニハ、總理大臣ナリ又ハ必ラズ其主任大臣ヲ直チニ御呼出シ相成テ御下問相成度、殊ニ出來得ベクンバ過日モ奏上シタル如ク、中宮陛下ニモ大臣中誰某ノ區別ナク齊シク御引見相成ランコトヲ、是レ國務大臣タルモノハ他ノ官吏ト異リテ一國ノ政務ヲ司ドリ、國家ト休戚ヲ共ニスルモノナレバ、此丈ハ特別ニ兩陛下ノ厚遇ヲ加ヘラレザルベカラズ。

大君主　政府部内ニ於ケル始終ノ評話、朕具サニ之ヲ悉セリ、其レニ就キテモ卿ガ苦心ノ程察スルニ餘アリ。過日金總理ガ（貴館ニ往キタル翌日）進宮シタルニ付、朕ハ新舊大臣間ノ調和ハ如何ヤトノ問ヲ起シタルニ、同大臣ハ其儀ハ何ナリトモ片附クベキ見込ナレドモ、始終氣掛リナルハ清國ニ於ケル日、清ノ交渉ナリ云々、兎ニ角同大臣ガ寤寐忘ル能ハザルハ事大ノ舊夢ナランカ、諸大臣ニ對スル待遇ノ一事ハ、卿ガ屢々忠告スル所、朕深ク心ニ銘ジ忘レザルベシ。又宮中ヘ謁見ノ事ハ是レマデト雖モ金嘉鎭、趙義淵、安駉壽ハ時々許サレ、徐光範ノ如キハ李氏祖先ノ血緣アリテ是レ亦時々拜謁ヲ允サル、ナリ。

井上　今中宮陛下ニ於テ各大臣ニ齊シク謁見ヲ賜フコトヲ允サレタシト望ムモノハ、卽チ政治上ニ關シテハ勿論、中宮陛下ノ御容喙可相成筋ニアラザル儀ハ業ニ已ニ縷述シテ殘ス所ナシ、去レバ國政ニ關スル場合ニアラザルコトハ御得心ナルベシ。唯ダ儀式日、或ハ時候ノ御見舞等ニ當ツテ、大君主陛下ニ參賀ヲ爲ス折ニハ、中宮ニモ各大臣ヲ其謁見席ニ一同召見セラレンコトヲ希望スルノ意ニ外ナラズ。

大君主　然リ、左モアルベシ。

井上公使前件ニ付電報

（五月二十五日午後三時七分東京發電）

伊藤内閣總理大臣　　陸奥外務大臣

井上公使ヨリ左ノ通リ電報アリ。

昨日ノ電報承知セリ、急ニ他國ノ離間策ヲ容ル、トモ思ハレズ、又急ニ露國云々モアルマジ、併シナガラ朴泳孝ヘ忠告ノ末種々手段ヲ盡シ、二、三ケ月間ノ平和ヲ維持セシメント試ミタレドモ、遂ニ自身退職スベシト申出デタリ。然ルニ總理ハ現ニ辭表ヲ提出シタレバ、双方共辭職ト云フ結果ニ至レバ、尚ホ手段六ケシクナラン、依テ目下裏面ヨリ種々ノ手段ヲ盡シ居レバ、何トカ暫時ノ始末ヲ付ケ置ク積リナリ。實ニ不慥カナル疑心暗鬼ノ性質ナレバ、請合ハ付カズ、此出來事ノ片付キ次第一時歸朝申立ツベシ。

右ノ電報ニ依レバ井上公使ガ急速ニ歸朝スルコト六ケシカルベシ。就テハ同公使歸國ノ上、對韓政略ヲ取極ムルトスレバ尚ホ十數日ヲ要スベシ。故ニ先刻電報シタル東京各大臣ノ決議ニ付急ニ御高慮ヲ願フ。

（五月二十六日午前一時二十五分發）

京都　鍋島外務書記官　　大磯外務大臣

左ノ通リ伊藤伯ヘ傳ヘヨ。

朝鮮ノコトニ付テ露國ヨリ干渉ノコトハ種々ノ附説ノ外、別ニ何等ノ形跡アルニ非ラズ。然レドモ一昨日外國公使ニ面會ノ節、露國公使ヲ除クノ外、他ノ外國公使ハ何レモ朝鮮ノコトニ付露國ノ干渉ノコトヲ云ハザルモノナシ。殊ニ佛國公使ノ如キハ露公使ト内談シタリトマデ云ヒタリ。何レモ早晩露國政府ヨリ何事カ云ヒ來ルベシトノコトハ豫期スルモノノ如シ。又先刻電報シタル獨逸公使ガ其政府ヨリノ電訓ナリトテ、露、佛兩公使ト共ニ重大ノ事ヲ日本政府ニ

申入ルヽト云フモ或ハ朝鮮ノコトナルヤモ測ラレズ。此際再ビ露國政府ヨリ干渉サレタル後チ已ムヲ得ズ朝鮮ノ始末ヲ附クルガ如キ形跡アルハ頗ル不得策ト思フ。此際事實ヲ遷延スルコトハ坐シテ露國ノ干渉ヲ待ツニ均シ、故ニ今朝閣議ニテ申上ゲタル如キ宣言ヲ各強國ニ爲シ置カバヽ、或ハ露國ノ陰謀ヲ中止セシムル爲ニ宜シカラズヤト思フ。

以上述ブル所ノ事實御斟酌ノ上、尙ホ今日ノ對韓政略ハ御還幸ノ後ニ發表セラルヽヲ可ナリトスル事情アラバヽ、本大臣モ亦必ラズシモ前說ヲ主張セズ、一ニ貴大臣ノ御裁斷ニ任ス。

京都　鍋島外務書記官　　陸奥外務大臣

伊藤伯へ。

宣言書案ハ左ノ如シ。

日本ガ清國ニ對シ兵ヲ構ヘタルハ朝鮮國ヲ清國ノ有害ナル干與外ニ救濟シ出サントノ企望ニ出デタルモノナリ。而シテ今ヤ其ノ企望ハ下ノ關條約ノ發表ニ因テ充分ニ充タサレタリ。朝鮮國獨立ノ維持ハ其ノ關係各國ニ亘ル事ナレバヽ、帝國政府ハ特リ自ラ朝鮮國獨立保持ノ義務責任ニ當ルノ必要アルヲ見ザルガ故ニ、苟クモ該半島王國ノ國狀改良ノ目的トスルコトニハ何事ニ限ラズ進ンデ他各國ト協同センコトヲ聲言スルト同時ニヽ、將來帝國ト朝鮮國トノ關係ハ條約上得タル所ノ權利ニ止マルベキ旨ヲ玆ニ宣言ス。

（五月二十五日正午十二時東京發電）

伊藤內閣總理大臣　　陸奥外務大臣

朝鮮ノ形勢日ニ急ニシテ、露國ノ干渉何時來ルヤモ測リ難キニ付、今日在京內閣大臣一統會議シ、此際別紙英文ノ通リ帝國政府ノ意嚮ヲ各國ニ宣言スルコトヲ以テ得策ト考フト決セリ。貴大臣ニ於テ御同意ナレバ其他ノ內閣員ト御協議ノ上、勅裁ヲ得ルコトニ御取計被下タシ。

朝鮮ニ關シ各國ニ對スル宣言案

宣言書案ハ左ノ如シ。

日本ガ清國ニ對シ兵ヲ構ヘタルハ朝鮮國ヲ清國ノ有害ナル干與外ニ救濟シ出サントノ企望ニ出デタルモノナリ。而シテ今ヤ其ノ企望ハ下ノ關條約ノ發表ニ因テ充分ニ充タサレタリ。

朝鮮獨立ノ維持ハ其ノ關係各國ニ亘ルノ事ナレバ、帝國政府ハ特リ自ラ朝鮮獨立保持ノ義務責任ニ當ルノ必要アルヲ見ザルガ故ニ、苟クモ該半島王國ノ國狀改良ヲ目的トスルコトニハ、何事ニ限ラズ進ンデ他各國ト協同センコトヲ聲言スルト同時ニ、將來帝國ト朝鮮國トノ關係ハ、條約上得タル所ノ權利ニ止マルベキ旨ヲ茲ニ宣言ス。

陸奥外務大臣ノ對韓策

我ガ對韓ノ政略ハ其獨立ヲ認メ、清國ノ屬邦ヲ主張スルノ說ヲ排除シ、竟ニ其獨立ノ實ヲ擧ゲシメントスルニ在リ。

客歲、日、清交戰ノ起因モ全ク茲ニ胚胎シ、而シテ我ガ戰捷ノ結局清國ヲシテ完全ナル獨立タルヲ認識セシメ、且ツ露國ヨリモ我ニ向テ名實共ニ其獨立ヲ看認センコトヲ求メ、之レニ對シ我ガ從來ノ政略ニ基キ數回宣言シタル等ノ事由ニ依リ、將來ノ對韓政略ハ成ルベク干涉ヲ息メ、朝鮮ヲシテ自立セシムルノ方針ヲ執ルベシ。故ニ他動ノ方針ヲ執ルベキコトニ決ス。

右決議ノ結果トシテ同國鐵道、電信ノ件ニ就キ强ヒテ實行セザルコトヲ期ス。

對韓政略ニ關シテハ昨年八月十七日本大臣ヨリ閣議ニ提出スル所アリシガ、當時其政策ハ追テ日、清戰爭ノ終局ヲ待ッテ之レヲ確立スルコトトシ、夫レマデハ先ヅ乙策ノ方針ヲ以テ進行

スルコトニ決シ、爾來本大臣ハ其趣旨ニ從ヒ對韓ノ外交ヲ措施シ來レリ。然ルニ今ヤ日、清間ノ和議已ニ成リタルノミナラズ、露、獨、佛三國干渉ノ結果、形勢大ニ一變セシ所アルヲ以テ、去月二十五日在東京閣僚ニ於テ此際別紙ノ通リノ宣言ヲ各國政府ニ向テ爲シ置ク方可然ト決議シ、其ノ旨ヲ在京都伊藤總理大臣ニ電報シテ、同地ニ滯在ノ他閣僚ト審議シ　聖裁ヲ仰ガレンコトヲ求メタリシニ、　御還幸モ近キニ在レバ、其上ニテ更ニ閣議ニ付スベシトノ電答ニ接セリ。然ルニ其後佛國公使ヨリ本大臣ニ向ヒ、朝鮮ニ對シテハ總テ露國ト相提携シテ事ヲ爲シテハ如何ト陳述セシコト有之、同公使ノ此意見ハ其政府ヲ代表シテ述ベタルモノニハ無之ト雖モ、豫メ露國公使ト商量シタリトノコトハ同公使自ラ之レヲ明言シ居レリ。就テハ斯カル陳述ヲ聞キタル後ノ今日ニ至テ、右宣言ヲ爲スハ時機ヲ失ヒタルモノナリト雖モ、前記三國政府ハ先キニ遼東半島拋棄ノ件ニ付我ニ勸告スル所アリ、今又右拋棄ニ關連スル二問題ノ外、更ニ臺灣、清國間海峽自由航通ノ件ニ付提議スル所アリ、此ノ如ク一問題了レバ更ニ一問題ヲ提出シ、其底意ノ在ル所ハ、其極進ンデ我ガ對韓政策ノ如何ニ及ボサントスルナルベク、是レ蓋シ必至ノ數ナリ。就テハ斯カル新問題ノ萠出ニ先ダチ、將來朝鮮ニ向テ依然從來ノ方針ヲ執リテ變ゼザルカ、又ハ自働他働ニ拘ハラズ此際斷然干渉政略ヲ息メ、通常條約國ノ有樣ニ立戻ルカ、兎ニ角一定ノ方針ヲ講ジ置クコト刻下ノ急務ト信ズレバ、速カニ廟議ヲ確定セラレンコトヲ望ム。

對韓問題閣議案

朝鮮事件ハ當初大鳥公使ノ赴任ニ臨ミ籌畫セラレタル所ノ廟算ニ比スレバ、外交上ニ於テモ軍事上ニ於テモ荐リニ局面ノ變遷ニ遭遇シ、歩々深入、遂ニ今日ノ形勢トハナレリ。而シテ目下ニ施スベキ政略ニ至テハ隨時廟議ノ決定スル所アルヲ以テ、其成議ニ遵ヒ之レヲ遵行スベキコトハ固ヨリ論ヲ待タズト雖モ、將來朝鮮ヲ如何スベキヤトイフ問題、卽チ本件ノ最後ノ大目的ハ如何トイフ問題ニ至テハ、第一ニ帝國政府ハ朝鮮ノ內政ヲ改革スル爲メ、又其獨立ヲ永久ニ保全スル爲メ、竟ニ清國ト交戰セザルヲ得ザル場合ニ立到レリ。現ニ尙ホ交戰中ニ在レバ到底日、清間最後ノ勝敗ヲ見ルノ日ニ非ラズンバ、實際ニ起リ來ルベキコトニハ無之、然レドモ今ニ於テ此問題ニ對スル一ノ方針ヲ確定シ置クコトハ、自今帝國政府ガ執行スベキ外交上及ビ軍事上ノ措施ニ關シ頗ル緊切ノ關係ヲ有スルノミナラズ、大鳥公使ヨリモ本問題ニ付政府ノ方針ヲ伺ヒ來リ居レバ、本大臣ハ玆ニ左記ノ考案ヲ具シ、以テ豫メ廟議ノ確定スル所ヲ聽カムコト

ヲ望ム。

甲　帝國政府ハ既ニ内外ニ向テ朝鮮ヲ一ノ獨立國ト公認シ、又其内政ヲ改革セシムベシト聲明セリ。就テハ今後清國トノ最後ノ勝敗相決シ、而シテ我輩ガ冀望スル如ク我ガ帝國ノ勝利ニ歸シタル後ト雖モ、依然一個ノ獨立國トシテ全然其自主自治ニ放任シ、我ヨリモ之レニ干渉セズ、亦毫モ他ヨリノ干渉ヲモ許サズ、其運命ヲ彼ニ一任スル事。

但シ此方策ニ付テハ左ノ疑問ヲ生ズ。

一、朝鮮ノ如キ久シク紀綱廢頽、萎靡不振、官民共ニ獨立ノ意尚ニ乏シキ國柄ニ在リテハ假令一時他ノ刺戟ニ因リ其内政ニ多少ノ改革ヲ加ヘタリトモ、之レヲ永久ニ維持シ、又時ニ應ジ之レヲ改進セシムルコトハ甚ダ疑ヒナキコト能ハズ。若シ然ルトキハ、帝國政府ガ今回大兵ヲ派出シ、巨額ノ軍費ヲ使用シタル結果ハ、竟ニ水泡ニ歸スルヲ免レザルベキカ。

二、若シ此ノ如ク朝鮮ガ自カラ獨立ヲ保持シ難キコトヲ知リナガラ、其將來ノ命運ヲ全ク彼ニ一任スルトキハ、或ハ恐ル他日清國ハ再ビ其隙ヲ窺ヒ、間接ニ直接ニ朝鮮國政ニ干渉シ、或ハ現在ノ政府ヲ顚覆シ、事大黨ト稱スル閔族一派ノ徒ヲ以テ更ニ政府ヲ組織セシメ、恰モ日、清交戰以前ノ如キ清、韓ノ關係ヲ再現セシムルコトヲ、而シテ一旦此ノ如キ場合ヲ生ズルトキハ、帝國政府ハ其經歷上、袖手傍觀シテ全ク清國ノ所爲ニ一任スルコト能ハザルハ敢テ言ヲ待タザルガ故ニ、必ラズ再ビ之レニ對シ爭論セザルヲ得ザルニ至ルベク、而シテ斯カル爭論ハ到底樽俎ノ間ニ圓滑ナル妥局ヲ結ブコトハ極メテ得難キコトナレバ、其極、終ニ再ビ日、清兩國間ノ平和ヲ破ルニ至ラザルヲ得ザルベシ。是レ恰モ日、清兩國ガ朝鮮ニ關スル戰爭ノ歷史ヲ再演スルニ過ギザルベク、然ルトキハ今回ノ盛擧ヲシテ殆ンド徒勞ニ歸セシメ、兒戲ニ終ラシムルノ恐レナキカ。

乙　朝鮮ヲ名義上獨立國ト公認スルモ、帝國ヨリ間接ニ直接ニ永遠若クハ或ル長時間其獨立ヲ保翼扶持シ、他ノ侮リヲ禦グノ勞ヲ取ル事。

但シ此方策ニ付テハ左ノ疑問ヲ生ズ。

一、朝鮮ノ獨立國タルコト及ビ其疆土ヲ侵略スルノ意ナシトノコトハ、帝國政府ガ從來各國政府ニ向テ公言シタル所ナレバ、今假令間接タリトモ彼ノ半島ノ一王國ヲ以テ帝國ノ勢力ノ下ニ屈服セシムルトキハ、遂ニ他外國ノ非難ト猜忌トヲ招キ、或ハ之レガ爲ニ無數ノ葛藤ヲ生ズルノ憂ヒナキカ。

二、帝國政府ハ以上ニ述ブルガ如キ困難ヲ顧ミズ、朝鮮ヲ保護國ノ如ク取扱ヒ得ルトスル

モ、他日或事變ニ關シ、清國、露國、其他朝鮮ト利害ノ關係ヲ有スル邦國ヨリ、朝鮮ノ獨立ヲ侵害スルコトアルニ際シ、帝國ハ獨力ヲ以テ終始同國ノ外患ヲ防禦シ之レヲ保護スルコトヲ得ベキカ。

丙　朝鮮ハ其自力ヲ以テ其獨立ヲ維持スルコト能ハズ、又我ガ帝國ニ於テモ直接ト間接トヲ問ハズ、獨力ヲ以テ之レヲ保護スルノ責ニ任ズルコト能ハズトスルトキハ、嘗テ英國政府ガ日、清兩國政府ニ勸告シタルガ如ク、朝鮮領土ノ安全ハ日、清兩國ニ於テ之レヲ擔保スル事。

但シ此方策ニ付テハ左ノ疑問ヲ生ズ。

一、帝國政府ニ於テ其戰勝ノ勢ヒヲ以テ清國政府ト協議センニハ、開戰前ニ於ケルガ如ク同國政府モ頑冥固陋ノ說ヲ主張セザルベシト雖モ、彼ノ儀式的宗屬問題ハ到底之レヲ拋棄セザルベシ。而シテ我ニ於テモ開戰前ニ於テハ曾テ英國政府ヘ明言シタル如ク、彼若シ屬邦ノ論ヲ提起セザレバ、我亦必ズシモ獨立論ヲ主張セザルベシトイヒシト雖モ、戰勝ノ後ニ至テハ、清國ガ朝鮮ニ於ケル關係ニシテ實利上ト名義上トヲ論ゼズ、苟クモ帝國ガ朝鮮ニ於ケル關係ヨリモ優等ナル觀アルコトハ、到底帝國ガ姑容忍耐スルコト能ハザル所ナルベシ。故ニ或ハ斯カル無用ナル爭議ノ爲ニ遂ニ又議破ルヽカ、否ザレバ談判延引シテ長ク交戰國ノ情形ヲ繼續スルニ至ラザルカ。

二、假リニ清國政府ハ我ニ屈服シテ宗屬關係ノ問題ヲ提起セザリシトセンカ、日、清兩國ニテ朝鮮疆土ヲ保全スルニ付テハ、勢ヒ日、清兩國ヨリ朝鮮ノ政務ヲ輔助スベキ監督官若クハ委員ヲ派遣セザルベカラザルノミナラズ、或ハ互ニ多少ノ軍隊ヲ駐屯セシムルノ要アルニ至ルベシ。然ルニ日、清兩國ガ朝鮮ニ對スル利害ノ關係ハ常ニ相反對スルノミナラズ、日、清兩國政事家ノ主義モ常ニ氷炭相容レザルヲ以テ、兩國政府ガ朝鮮ニ對スル意見往々衝突シテ一致ニ歸セザルニ至ルコト必セリ。其極、竟ニ第一疑問ニ於ケルガ如キ結果ヲ生ゼザルカ。

丁　朝鮮ガ自力ニテ獨立國タルコトハ到底望ムベカラザルコトトシ、又帝國ガ獨力ヲ以テ之レヲ保護スルヲ不利ナリトシ、又日、清兩國ニテ其獨立ヲ擔保スルハ、竟ニ彼此協同一致ヲ得ベキ望ミナシトスルトキハ、朝鮮ヲ以テ世界ノ中立國ト爲サンコトヲ我國ヨリ歐米諸國及ビ清國ヲ招誘シ、朝鮮國ヲシテ恰カモ歐洲ニ於ケル白耳義、瑞西ノ如キ地位ニ立タシムル事。

但シ此方策ニ付テハ左ノ疑問ヲ生ズ。

一、朝鮮國ニ最モ利害ノ關係厚キモノハ日、清兩國ニシテ、今回ノ交戰ノ如キモ亦日、清

兩國間ノ利害ノ衝突タルニ過ギザレバ、此戰爭ノ結果ヨリ生ズル所ノ名譽ト利益トハ固ヨリ他ノ歐洲各國ヲシテ分受セシムルノ必要ナク、又之レヲ分與セントスルハ、諺ニ所謂犬骨折ツテ鷹ノ餌食トイフガ如ク、帝國ノ失フ所、得ル所ニ超過スルノ觀ヲ呈シ、頗ル帝國人民ノ滿足セザル所ナルベシ。況ンヤ帝國政府ハ大兵ヲ出シ、巨額ノ軍資ヲ費シタルノ結果、何ノ得ル所モナシトセバ、到底世論ノ攻擊ヲ免レザルベキカ。

右ノ如ク考察シ來レバ、甲、乙、丙、丁ノ四問題ハ、何レモ一利一害ヲ存スルモノニシテ、若シ一タビ其擇ブ所ヲ失スレバ、頗ル禍害ヲ後世ニ遺スノ恐レナキ能ハズ。然レドモ朝鮮ニ關スル將來ノ位地如何ヲ考フレバ、遂ニ此四方策ノ外ニ出デザルガ如シ。而シテ其何レノ方策ニ歸着スルヲ問ハズ、日、清交戰後ノ勝敗相決シタルノ後ニ非ザレバ相起ラザルノ問題ナリト雖モ、廟算ハ豫メ此内ノ一ニ付確定スル所ノモノニアラザレバ、今日外交上ノ操縱ニ於テモ、又軍事上ノ行動ニ於テモ頗ル緊要ノ關係アリ、故ニ豫メ廟謨ヲ確定シ置カレンコトヲ望ム。而シテ以上ニ列擧スル四方策ノ外、尚ホ閣僚諸公ニ於テ高明ナル考案アラバ固ヨリ其方策ヲ聽カンコトヲ冀望ニ堪ヘズ。

明治廿七年八月十七日

外務大臣　陸奥宗光

朝鮮問題ニ付聲明書按

日本國ガ清國ニ對シ干戈ヲ交ヘタルハ、朝鮮國ヲシテ彼ノ有害ナリト認メラレタル清國ノ抑壓ヲ脫セシメントノ希望ニ起因ス。而シテ該希望タルヤ已ニ下ノ關條約ノ締結ニ依リ全ク之レヲ達スルヲ得タリ。

朝鮮國ノ獨立ヲ將來ニ永續セシムルコトハ、各國一般ノ利害ニ關係スルコトナリ。因テ帝國政府ハ其獨立ヲ維持スルコトニ付單獨ニ責務ヲ負フヲ必要ト認メズ、故ニ日本國政府ハ利害ノ關係アル他ノ諸國ト協力シテ、朝鮮國ノ事態ヲ改善スルコトヲ以テ目的トナストコロノ處置ニ協同シテ差支ナキコトヲ表言スルト同時ニ、帝國政府ニ於テハ將來日本國ト朝鮮國トノ關係ハ之レヲ條約上ノ權利ニ基カシムルノ意ナルコトヲ言明ス。

朴泳孝ノ擧動其他

（明治廿八年六月二十二日京城發井上伯宛ノ杉村書記官ノ電報同廿五日到着セリ）

左ノ電信ヲ齋藤ノ求メニ依リ閣下ニ轉送ス、但シ朴泳孝ノ申スニ、王妃ト露西亞公使トノ往來頻リナリト云フコトハ充分ニ探偵スルヲ得ズ、思フニ近來王妃ト朴泳孝トノ間、隔離ノ兆アルニ依リ、朴氏ハ露公使ニカコツケ、我ガ公使ノ應援ヲ求ムル爲メナルベシト思ハル。

朴泳孝曰ク、王妃ト露西亞公使トノ往來近來益々頻リナリ。誠ニ困リタルモノナリ。井上伯再ビ來ラレヌコトナラバ誠ニ致方ナシ。何卒地位ト名望トアル新公使ノ至急來ラルヽコトヲ望ム。

朴ト王妃トノ間、近來餘リ面白クナキ模樣ニテ、義和君日本行ノコトヲシテ決行シタル如キモ、亦兩人不和ノ新ナル媒介トナルベシ。併シナガラ朴ノ話ニハ內閣ハ愈ヨ一致鞏固ナリト、又朴ト魚允仲トノ間モ爾來好都合ト見エ、朴ハ己レノ股肱トシテ魚允仲ヲ徐光範ノコウニ算ヘ

居ル程ナリ。

廿八年六月二十二日京域發ノ電報ニ曰ク、櫻間某酩酊ノ上、朴泳孝邸ニ於テ亂暴シタルハ事實ナリ、右ハ早速取調ベ領事ヨリ退韓ヲ命ゼリ。猶ホ將來ノ取締リニ關シテハ目下領事トモ協議中ナリ。

廿八年六月二十三日京城發電報ニ曰ク、義和宮ハ日本特派大使ニ任ゼラレタリ。地方制度ノ改正本日發布相成レリ、義和宮ノ任命ニ付、王妃ハ大分異議ヲ唱ヘラレタル由ナルモ、內閣論强ヒテ裁可ヲ乞ヒタルヤニ聞ケリ。

日清役戰死者遺骨合葬ノ件

昨年日清開戰以來、朝鮮國黃海道、平安道、並ニ占領地盛京省ニ於テ戰沒又ハ病死シタル者ノ遺骨合葬所ヲ同國義州及ビ平壤兩地ニ設定ノ義ニ付テハ、當時我ガ第一軍ト各該地方官トノ間ニ內議相整ヒ、平壤ノ萬壽山、義州ノ水門洞兩處ヲトシ、何レモ官有地ニ付永代借用スルコト、ナシタル趣ヲ以テ、右朝鮮政府ヘ照會方、並ニ該墓地永年監守方法等取極メ置キタル趣、別紙甲號ノ通リ本年二月二十六日附ヲ以テ第一軍兵站監鹽屋方國ヨリ在京城井上公使ヘ申出有之候處、右監守方法中、不完全ノ廉有之、旁タ別紙乙號ノ通リ同公使ヨリ鹽屋兵站監ヘ打合相成候末、本年四月十九日附ヲ以テ同兵站監ヨリ別紙丙號ノ通リ依賴致來リ、右監守節目モ兩地ノ分共相揃候ニ付、該墓地永代借定ノ件、及ビ右墓地禁護節目トモ朝鮮政府ニ於テ承知ノ上、該地方官ヘ通達相成、且ツ該墓地ニ對スル地價及ビ年租課稅等一切永年免除ノ義モ併セテ承認ノ上、地券交付セラレタシトノ趣意ヲ以テ、別紙丁號ノ通リ井上公使ヨリ同國外務大臣ヘ照會

相成有之、而シテ元來右墓地監守ノ方法ト云フハ、當時我ガ第一軍ニ於テ朝鮮官吏ト協議シ、土着ノ同國人ヲ選ンデ墓守トナシ、衣食料トシテ兩地共我ガ兵站部ヨリ各銀貨百圓宛ヲ支出シテ地所ヲ買取リ、之ヲ各該墓守ニ給與相成居候次第ニ有之候。然ルニ朝鮮政府ニ於テハ日本軍隊ノ死亡ハ、原同盟禦患ニ基キタルモノニシテ、實ニ之レガ報酬ノ道ナキヲ恨ムル次第ニ有之ヲ以テ、墓守等ガ食田ノ資ノ如キハ日本兵站ヨリ支給ヲ煩ハスベキモノニ有之ニ付、兩地所價合計貳百圓ハ兵站部ヘ轉達相成、且ツ同政府ノ趣意ヲ通知相成度旨、及ビ節目中碑直（卽チ墓守）ノ賦役ヲ永久免除スルノ一項ハ度支會計ニ關スル事柄ナルヲ以テ、六月十七日別紙戊號ノ通リ、外務大臣金允植ヨリ杉村臨時代理公使宛回答來リ、依テ同公使ヨリ右金額ハ暫ク公使館ニ預リ置キ、委細事情ヲ本國政府ヘ具申シ、一切訓令ヲ仰イデ處辨可致旨、及ビ墓地監守節目ニ於テハ碑直賦役ノ一節ヲ除クノ外ハ、悉ク承允セラレタルコトト信ズル趣、別紙巳號ノ通リ一應回答致置候次第ニ有之、右處分ノ義ハ該國外務大臣ヨリ申越ノ趣ニ從ヒ、夫々取計可然ト存候得共、猶ホ何分ノ指揮相仰ギ度旨去月二十七日附ヲ以テ在京城杉村臨時代理公使ヨリ具申有之候ニ付、此段及報告候也。

明治二十八年七月二十日

外務大臣臨時代理
文部大臣侯爵　西園寺公望

内閣總理大臣　伯爵　伊藤博文　殿

（甲號）

昨廿七年初秋以來、黃海、平安兩道並ニ占領地盛京省ニ於テ陣歿セシ戰病死者遺骨合葬處ヲ平壤及ビ義州ノ兩所ニ相設ケ度ク、夫々監司伴接使等ノ手ヲ經テ平壤ニ於テハ萬壽山ヲトシ、千二百八十七坪、義州ニ於テハ水門洞曲峴ニ定メ九十一坪、何レモ官有地ニ付永年借用ノ事ニ内議相決シ、兩所並ニ合葬セシモノ數多有之、既ニ石碑建設ニ着手シ、其一部ハ落成ノ次第ニ有之申候。依テ右兩地所永年借用ノ儀其筋ヘ御照會相成候樣致度、此段閣下ニ御依賴ニ及ビ候也。

追テ義州ニ於テハ墓所永年掃除方法ノ爲メ別冊寫ノ通リ相定メ候。猶ホ平壤ニ於テモ略ボ同樣ノ儀ニ取計御豫定ニ有之此段申添候也。

明治二十八年二月二十六日

第一軍兵站監　鹽屋方國

特命全權公使　伯爵　井上馨　殿

（甲號附屬）

伴接使權

成給節目永久遵行事照得義州府內面水門洞曲峴所建石碑卽日本軍隊之忠死者合葬碑也、看飭守護之節其在奬義褒忠之道不可歇後故別定碑直使之時看檢而亦自該兵站監部銀貨一百圓辨給故以此買土以爲一事食料之資是矣如或漫患不勤使役則自該府時々檢察斷當別般嚴懲而禁護之節玆以磨餬臚列于左成出三件節目一件送該監部一寘該府一給碑直以爲常目看之永遵勿替宜當者

後

一、碑直三身役戶役永爲勿侵事

一、碑直料賴段自日本兵站監部辨給銀買土者使之耕食恪勤守護不得犯科事

一、碑址看檢段時々往護豕突犬走牛踐馬踏各別禁斷秋而除草冬而掃雪着意董役少勿稽忽事

一、新買土段自該府月成完文以防日後碑直之私自偸賣事

大朝鮮開國五百四年二月　日

（乙　號）

黄海、平安兩道及ビ盛京省ニ於ケル我ガ戰病死者遺骨合葬所ヲ義州、平壤兩地ヘ設置相成度儀ニ付客月二十六日付ヲ以テ御申越ノ趣了承、右兩地永年借入ノ儀ハ特別約定可相結者ニ候ヘバ、一應外務大臣ヘ稟申ヲ經タル上、當國政府ヘ照會ヲ遂ゲ約條相結候樣取計可申候。然ル處御來書中義州墓地監守ノ方法ニ付伴接使ノ擬定節目ナルモノ到一覽候處、一ト通リノ要件ハ具備致居候得共、殊風異俗ノ邦人ニ對スル永久ノ約束ニ有之候ヘバ、此際慥察ノ上ニモ慥察ヲ加ヘ置キ候方可然、就テハ右節目ノ末尾ニ更ニ左ノ二項ヲ相加ヘ候事最モ妥當ナルベクト相考候。

一、將來該碑直身故則自該府分付其承繼者立爲碑直如遇承繼無人則自該府另選妥當民人命之卽將新買土段轉移子該新碑直耕種以充食料之資事

一、上列各節係朝鮮政府特所訂明卽將來該管地方官無論何等更迭或變革官制此頃節目永久恪遵罔替事

尙ホ本件節目ハ伴接使ノ名義ヲ以テ擬定致居候ヘドモ、是レハ當該地方長官ニ於テ中央政府ノ命ニ依リ擬定シタルモノト致候方穩當ニ可有之、又平壤ニ於ケル墓地監守方法モ略ボ義州ト同樣ニ御取設可相成樣御申出候處、右ハ未ダ確定不致候哉、要スルニ本件ハ墓地永借ノ儀ヲ照會スルト同時ニ貴國政府ノ承認ヲ得テ確定節目設置有之方好便宜ト相考ヘ候間、平壤ノ分モ前陳ノ趣意ヲ以テ御詮議ノ上、擬定節目可成丈速カニ御心付相成候樣致度此段申進候也。

明治二十八年三月十九日

特命全權公使　伯爵　井上　馨

第一軍兵站監　鹽屋方國　殿

（丙　號）

發第十四號ヲ以テ御來示ノ通リ平壤萬壽山ニ於ケル共葬墓地保存ノ擬定節目別紙差出候間、可然御取計被下度此段閣下ヘ及御依賴候也。

追テ義州事件ノ節目ハ同府々尹ト擬定シ御來示ノ二項ハ記入爲書候間此段申添候也。

明治二十八年四月十九日

第一軍兵站監　鹽　屋　方　國

特命全權公使　伯爵　井　上　馨　殿

（別紙寫）

平壤監司金

成定節目凜遵無違事照得平壤府大興部萬壽台東偏所樹之碑卽識日本軍隊死事者之聚骨地也、敵愾冒難萬里之魂未歸旌忠褒義一片之石不泐號定守其碑者曰碑直認眞典護勿敢怠懈、現由該兵站司令部劃辨銀貨一百元准價買由俾充該直通一年食料之資寔出勗勉之意宜盡恪勤之責亦自本府董飭檢察如其不謹斷當嚴懲其守護節目錄列于左方續作三件一件送交該兵站部一件存寘本府一件出付該碑直照此遵行永々勿替宜當者

後

一、碑直之身役戶役永爲勿侵事

一、碑直料賴段自日本兵站監部辨給銀貨土者使之耕食恪勤守護不得犯科事

一、碑址看檢段時々往護豕突犬走牛踐馬踏各別禁斷秋而除草冬而掃雪着意董役少勿稽忽事

一、新買土段自該府月成完文以防日後碑直之私自儉賣事

一、將來該碑直身故則自該府分付其承繼者立爲碑直如遇承繼無人則自該府月遴妥當民人命之卽將新買土段轉移于該新碑直耕種以充食料之資事

一、上列各節係朝鮮政府特所訂明卽將來該管地方官無論何等更迭或變革官制此項節目永久恪遵岡替事

大朝鮮國開國五百四年三月十四日

（丁　號）

以書簡致啓上候。陳者我曆昨明治二十七年初秋以來黃海平壤兩道並ニ盛京省ニ於ケル我戰病死者遺骨合葬墓地設置ニ關シ、我ガ征淸第一軍當該官ト貴國該管地方官ト協議ノ末、平壤ニ於

テハ萬壽山ノ地千二百八十七坪（一坪凡ソ二米突四方）ヲ畫シ、義州ニ於テハ水門洞曲峴ノ地九十一坪（壹坪ハ凡ソ二米突四方）ヲ畫シ、均シク官有地ニ就キ永遠租借ノ事ニ定メ、兩處共ニ許多ノ死事者ヲ合葬シ、石碑建設致シタル趣、並ニ該兩處墓地永年禁護看守ノ儀ニ付キ、平壤ニ於テハ平安監司ト、義州ニ於テハ同府々尹ト夫々協議ヲ遂ゲ、卽チ別紙甲、乙、丙號ノ通リ節目ヲ擬定シタル趣ヲ以テ、貴政府ノ承認請求方今般我ガ第一軍兵站監鹽屋方國ヨリ移牒有之候、依テ前顯兩處墓地永租ノ約定、並ニ該墓地禁護節目共貴政府ニ於テ御確認ノ上、其旨該管地方官ヘ御通達相成度、尙ホ該墓地ニ對スル地價及ビ年租課稅等一切永年蠲免ノ儀モ一併御承認ノ上、右ニ對スル地券御交付相成候樣致度此段照會得貴意候。敬具

明治二十八年五月四日

特命全權公使　伯爵　井上　馨

外務大臣　金允植　閣下

（戊號）

照會

大朝鮮外務大臣金　爲

照覆事照得我曆本年四月十二日接准

貴伯爵井上公使照會內開照得玆接我征清第一軍兵站監鹽屋來文內稱我曆昨明治二十七年初秋以來於黃海平安二道及盛京省等處陣亾並病故者遺骨聚葬義地設定一案當經第一軍當該官與朝鮮國該管地方妥行商議之後於平壤卜萬壽山畫界地基千二百八十七坪壹坪約方二米突於義州卜水門洞曲峴畫界地基九十一坪拘就官有地定爲永久租地既在該兩處聚葬許多死事者並建設廟碑至於兩處廟地永年禁護看守等節亦已均由各該官分別與平安監司及義州府尹妥協商量所有議定節目月抄甲乙兩函附呈伏懇轉請朝鮮政府認准前項各節等情據此相應備文照會貴大臣希卽將前開兩處墓地約定永租之處以及墓地禁護節目均由貴政府明確認允並通飭該管地方官以憑恪遵尙將該管地所有地價以及年租課稅等項一律永年蠲免之處一併認准並照發各該地契以胎公允等因准此查兩處碑直食料之資由

貴兵站買田以給足認厚意第念

貴軍隊之暴露死亾寔由於同盟禦患我政府爲之深感恨無酬謝之道惟此食料微疑何煩貴兵站損撥乎玆將該地價貨幣二百元送交貴館請煩轉交貴兵站並望代致我政府之意爲要至平壤義州節

目中碑直之身役戶後永爲勿侵一節查減免租稅有關於度支會計須似法律定例事涉難便不可遽
准除關飭兩處地方官遵辦外玆以備文照覆尙望
照亮可也須至照會有
右照覆
大日本臨時代理公使杉村
開國五百四年五月二十八日

（巳　號）

敬啓者所有義州平壤兩處租定墓城另置碑直禁護一案玆接貴署第十三號照會內開該兩處碑直食料
之資由貴兵站買田以給足認厚意第念貴軍隊之暴露死亡寔用於同盟禦患我政府爲此深感恨無酬謝
之道惟此食料微款何煩貴兵站損撥乎玆將該地價貨幣二百元送交貴館請轉交貴兵站並望代致我政
府之意爲要至平壤義州節目中碑直之身役戶役永爲勿侵一節查減免租稅有關於度友會計須以法律
定例事涉難便不可遽准除關飭兩處地方官遵辦外備文照覆等因准此本署使尋釋之下確信
貴政府於此案只除碑直免役一項外一概准允矣相應據情報請我外務大臣移會陸軍省一切請批遵辦
除所有接到銀貨二百元卽由本館暫時行存寘續俟批覆到日再行妥確尙定外先此布覆請煩
貴大臣核鑒可也順頌
崇祺

杉　村　濬　頓

我六月二十一日

朝鮮内閣破裂朴泳孝逃走顚末

本月七日午前十時頃本官ハ當地ノ一新聞通信員ヨリ「朝鮮内閣愈ヨ大破裂朴内務仁川ニ逃走ス」トノ報道ヲ聞キタルヲ以テ、午後二時三十分（正午當時碇泊中ナリシ明治丸ヘ午餐ニ招カレ、卽チ其歸途直チニ）監理署ニ到リ、新任東萊府觀察使池錫永ニ面會セシニ、氏ハ何等京城ノ變ヲ聞カザルヤヲ問フ、本官答フルニ前項ノコトヲ以テス、氏乃チ左ノ京城來電ヲ示ス。曰ク、

朴泳孝圖不軌事覺免官在逃嚴防乘船所在緝捕　外　部

夫レヨリ一、二談話ノ末歸館スルト同時ニ、黑岡筑波艦長ヨリ左ノ京城來電ノ寫ヲ送リ來ル。曰ク、

朴泳孝王妃ニ對シ容易ナラザル嫌疑ヲ受ケ捕縛セヨトノ命令アリ。

然ルニ京城我ガ公使館ヨリハ未ダ何等通報ナキヲ以テ、直チニ事實問合セノ電報ヲ發シ置キ、一面ハ閣下ニ宛テ左ノ電報ヲ發セリ。

東京外務大臣代理宛

朴泳孝不軌ヲ圖リ事覺ハレ免官逃走ス、嚴重ニ乘船ヲ防ギ搜索捕縛セヨト京城外部ヨリ當地其筋ヘ電信ニテ命令アリタリ。御參考ノ爲ニ御内報ニ及ブ。

加藤領事

七月七日午後五時半頃

同夜十時三十分頃ニ至リ初メテ京城公使館ヨリ左ノ電報ヲ得タリ。曰ク、

朴泳孝不軌ヲ圖リ逃走シタルニ付、我ガ船舶ニ乘船ヲ差止メ呉レト朝鮮外務大臣ヨリ依賴アリタリ。依テ右御注意マデニ申シ進ム、但シ是レハ形式上ノ事ナレバ、成ルベク朴ヲ保護スル樣アリタシ。朴ハ本日仁川ヨリ乘船シタリ。

七月七日午後　杉村臨時代理公使

翌八日午前七時頃、當地兵站司令官伊津野陸軍少佐ヨリ秘密トシテ左ノ電報ヲ示サル。

朝鮮内閣破裂、朴泳孝外二名本日午前五時貴地ヘ富士川丸ニテ行ク、内密ニ及ブ丈ケ保護セラレタシ。

七月八日午前三時　仁川　高井大佐

釜山　伊津野少佐宛

右二通ノ電報ニ依リテ本官ハ初メテ京城、仁川ニ於テハ彼等ヲ保護スルノ方針ヲ執ラル、コトヲ知リ、早速池觀察使並ニ當港警察官ニ對シ「貴政府折角ノ依賴ナレバ及ブダケ賴意ニ應ズルノ手段ヲ取ルニ躊躇セザルベシト雖モ、一旦仁川ニテ乘船セシ上ハ當地ニテ之レヲ取押ユルコトハ頗ル困難ナルベシ。卿等ニ於テモ猥リニ緝捕ヲ企テ他日ニ及ンデ事端ヲ滋クスルコト勿レ、況ンヤ其乘船ハ果シテ日本ニ向ヒ且ツ當地ヲ經過スルヤ否ヤモ未ダ詳カナラザルニ於テオヤ」トノ意ヲ能ク申含メ、其承諾ヲ得置キ、豫テ仁川領事館ニ問合セテ朴泳孝ノ外二名ハ誰ナルヤモ知リ得タルヲ以テ、同日午後一時頃又タ閣下ヘ宛テ左ノ電信ヲ差立テタリ。

西園寺外務大臣代理宛

朴泳孝、李圭完、申應熙三人今朝四時御用船富士川丸ニテ仁川發當地ヲ經テ馬關ヘ向フ筈保護ノ道十分手配ヲナシ置キタリ。

七月八日　　加藤領事

昨十日午後五時富士川丸入港ス。豫テ伊津野少佐ト同行シテ朴氏ニ面會スルノ約アリシモ、他ノ嫌疑ヲ避ケンガ爲メ故ラニ之レヲ辭シタリ。同六時頃田中賢道公使館ノ内意ヲ含ミ朴氏一行ニ附添ヒ來リタル旨ヲ以テ來館シ、今回ノ事件ノ大要ヲ談話ス。其略ニ曰ク、

一、今回ノ事件ノ近因ハ王宮ノ護衛兵ヲ訓練隊ト交替セシメントセシ一事ニアリ、近頃露公使屢々宮闕ヘ出入シ、王妃ト結托ノ事殆ンド掩フベカラザルニ至リ、朴氏ハ王宮ハ恰カモ舊衛兵ヲ以テ一方ニ割據セラルヽガ如キ姿ニテハ、自然出入等取締ノ道之レナキヲ以テ、速カニ之レヲ訓練隊ト交替セシムルニ如カズト思ヒ、卽チ

一、六月二十三日御前會議ヲ開キ、衛兵交迭ノコトヲ議ス。國王肯カズ、朴總理ハ已ニ勅令ニ因リ決定相成リタルコトニシテ、今日ハ唯ダ之レヲ實行スルノミト奏シタルニ、王曰ク、是レマデノ勅令中、予ノ命ニアラザルモノ少ナカラズト、朴總理遂ニ辭表ヲ呈スルニ至レリ。

一、二十八日、露、米兩公使杉村臨時代理ヲ訪ヒ、露公使先ヅ口ヲ開キ、國王ト朴内務トノ間近來甚ダ圓滑ナラズト說出シ、朴ハ日本ノ推薦ニ由リ大臣タリシモノナレバ、日本公使宜シク之レヲ始末スベシトノ意ヲ婉曲ニ勸告ス。（此時米公使驚愕シテ今我輩ノ來ルヿレガ爲ニアラズト云フヲ、露公使故ラニ聞カザル風ヲ裝ヒテ其談ヲ了ヘ）次ニ衛兵交迭ハ之レヲ急施スルノ必要ナカルベキ旨ヲ懇々說キ去リ、遂ニ杉村臨時代理ハ一己人ノ資格ヲ以テ朴内務ニ勸告スベキ旨ヲ答ヘ、同日ハ相別レタリ。

一、翌二十九日杉村臨時代理ハ朴内務ヲ訪ヒ之レヲ談ズ。朴内務非常ニ怒リ「豫テ王妃ガ露公使ニ結托センコトヲ恐レ、日夜焦慮セリ。今ヤ其結托ノ結果已ニ衛兵交迭ニ異議

ヲ挾ミ、剩ヘ自分ヲ斥ケントスルニ至ル、事極メテ切迫ナリ、宜シク最後ノ決心」云云ノ一言ガ卽チ今回ノ破裂ヲ來シタル直接ノ原因ニシテ、後チ佐々木留吉ナルモノ此事ヲ其筋ヘ告發シタルヲ以テ、國王、王妃並ニ反對黨ヲ非常ニ激昂セシメタルモノナリ。但シ杉村臨時代理ハ朴內務ニ決シテ過激ノ行爲ニ涉ルベカラザル旨ヲ反覆勸告シ朴內務モ勿論之レヲ愼ムベキ旨ヲ約シ別レタリ。然シ此一言ハ或ハ公使館ヨリ漏レタルニハアラザルヤノ疑ヒアリト京城ニテ風聞スト云フ。

一、本月四日杉村臨時代理國王ニ謁見シタルニ、至極平穩懇篤ニシテ何事モ別ニ認ムベキ言辭ナク、殊ニ王妃ヨリハ速カニ井上公使ノ歸任アルニアラザレバ甚ダ心細シ杯相語ラレタル由、而シテ朴內務謁見ノ時モ亦極メテ懇篤ナリシト云フ。

一、七日朝未明外務大臣金允植我ガ公使館ニ到リ、朴內務不軌ヲ圖リ、國王ヨリ捕縛ノ命アリ、就テハ日本公使館並ニ軍隊ニ於テ之レニ干涉セザラン事ヲ希望スル旨ヲ述ベ歸リタリ。公使館ニ於テハ此時マデ更ニ此ノ如キ企アルヲ知ラザリシガ、杉村臨時代理ハ之レヲ聞キテ急ニ之ヲ朴內務ニ告ゲン爲メ使ヲ出シタルニ、途上既ニ朴內務ノ騎馬ニテ公使館ヘ向ケ逃ゲ來ルニ逢フ。公使館ニ於テハ直チニ角袖巡査十名ヲ附シ、步兵一小隊ヲ行軍ノ風ニ裝ハセ、朴內務ヲ護衞セシメ、龍山ニ向ハシメタリ。南大門ニハ朝鮮巡査並ニ兵隊等充滿シ、頻リニ遮斷ヲ謀リタレドモ果サズ。內外ノ大道ニテハ右一行ニ向ヒ罵詈スルアリ、石ヲ投ズルアリ、非常ノ亡狀ヲ行ヒタリト云フ。而シテ朴內務ハ龍山ヨリ朝八時出帆ノ小蒸汽ニ乘リ仁川ニ向ヒタリシガ、田中賢道ハ此船ニ乘リ後レタルヲ以テ、陸路騎馬ニテ仁川ニ下リタルニ、途中要所ニ朝鮮兵ノ屯在スルヲ見、其準備ノ行屆キタルニハ實ニ驚キタリト云フ。

一、同日仁川ニ於テハ巡檢二十名程ニテ朴內務ノ旅宿ヲ圍ミ警戒セシ樣子ナレドモ、何等爲シ得ズ、旅宿ヲ出テヽ乘船ノ時ハ我ガ陸軍士官ノ服裝ヲ着ケ、且ツ護衞モアリタルヲ以テ無事ニ乘船スルヲ得タリト云フ。

以上ハ本官ガ田中賢道ヨリ聞キ得タル事情ノ大略筆記ナリ。實際或ハ多少ノ差異ナキヲ保シ難ク、殊ニ其筋ヨリ夫々報告アルベシト雖モ、萬一ヲ慮リ閣下ノ御參考マデニ書留メ置キ候、可然御用捨可被下候。

斯クテ富士川丸ハ昨十日午後五時入港、飲料水ト石炭ヲ積込ミ次第出帆ノ筈ナレドモ、風波荒クシテ昨夜ハ遂ニ當港ニ一泊シ、今尙ホ碇泊中ナリ。而シテ富士川丸着港ノコトニ關シ、昨午後九時頃閣下宛差立テタル電報ハ左ノ如シ。

西園寺外務大臣代理宛

本日午後五時仁川ヨリ入港ノ富士川丸ニ朴泳孝外二名乘組ミ、保護ノ爲メ田中賢道附添居レリ。同船ハ風風ギ次第馬關ヘ向ケ出帆ノ筈。

加藤領事

七月十日午後

然ルニ今十一日午前五時露國軍艦一艘水雷艇五艘突然入港セリ。此場合ニ付一驚ヲ喫セザルニアラザルモ、稅關其他ニ就キ篤ト聞糾シタレバ、全ク芝罘ヨリ浦鹽斯德ヘ航行ノ途次風波ヲ避ケンガ爲メ當港ヘ立寄リタルナリ。明後日ハ浦鹽ヘ向ケ發航スベシト云フ、依テ平常ナレバ大本營海軍參謀本部ヘ電報スルノミニテ事足ルベシト雖モ、仁川ニモ昨今同國軍艦三艘行キタルニヤニ聞キ込ミタルヲ以テ、念ノ爲メ直チニ閣下ヘモ左ノ電報ヲ差出シタリ。

西園寺外務大臣代理宛

昨日入港セシ富士川丸ハ風波ノ爲メ未ダ碇泊中○朴ハ早川誠一郎、申ハ吉田一郎、李ハ古城龍雄ト變名シ居レリ○露國軍艦「カルニロフ」及ビ水雷艇五艘今朝入港ス、右ハ芝罘ヨリ浦鹽ヘ進行ノ途次風除ケノ爲ニシテ明後日出港ノ筈ナリト云フ。

加藤領事

七月十一日午前

右電文中朴泳孝外二人ノ變名ヲ記載シ置キタルハ、少シク冗事ニ渉ルノ嫌ヒナキニアラズト雖モ、或ハ同人等本邦着後御取締向ノ御都合モ之レアランカヲ慮リ、茲ニ故ラニ附記致シ置キタルナリ。

以上ハ本件ノ初發ヨリ唯今マデノ本官關係ノ略史ニ候。顧フニ井上伯歸朝後ハ朴内務ハ殆ンド孤立ノ姿ニテ、遂ニ今回ノ破裂ヲ見ルニ至リタル儀ナレバ、此虛ニ乘ジ露公使ニ干渉ノ端緒ヲ開カシメタルハ甚ダ遺憾ニ堪ヘザル所ナリト雖モ、尙ホ挽回ニ遲カラズ、又難カラズト存候間、我ガ政府ニ於テハ速カニ井上伯ヲ歸任セシムル乎、萬一同伯ニシテ歸任ヲ肯ゼザレバ、他ニ相當ノ名望アル者ヲ撰ミ至急御派遣相成度偏ニ奉希望候。又タ朴氏ノ再ビ日本ヘ逃亡スルハ今日ノ情勢内外ニ對シ甚ダ好マシカラザル儀ニ候ヘドモ、先ヅ一旦ハ本邦ニ渡航セシムルノ外他ニ道アルベカラズト被相考候間、着ノ上不差措外國ヘ逃亡セシムル樣豫メ秘密ノ御措置相成置キ候方可然ト奉存候。先ヅハ右事情陳述旁タ併セテ卑見及具申候。敬具

明治二十八年七月十一日午後八時

在釜山　一等領事　加藤增雄

外務大臣臨時代理

文部大臣　侯爵　西園寺公望　殿

日清平和後ニ於ケル對韓方針ヲ定ムル義ニ付井上伯具申

鐵道電信條約案要項ニ付去月二十四日本官ノ意見ヲ具申シ何分ノ訓令相仰ギ置キ候。右條約ニ付テハ追々及具申候通リ、當政府部内ニ國權及ビ國利ヲ主張スルモノ多ク、議論兎角一致セザル由ニ候處、數日前外務、内務、工務三大臣ヲ以テ調査委員ト相定メ候趣キニ付、遠カラズ閣議ヲ一定シ、我ト協議ヲ開クノ運ビニ立至リ可申ト存候間、可成丈早ク回訓相成候樣致度候、將又日清兩國ノ間愈ヨ平和ニ相復シタル場合ニ於テハ、獨リ鐵道電信條約ニ限ラズ、一體我ガ朝鮮ニ對スル將來ノ政策ハ、此際其方針並ニ干渉ノ厚薄等相定メ候事必要ト存候。抑モ日清兩國ノ開戰ハ、本ト朝鮮ノ獨立問題ヨリ興リ、我ガ天皇陛下ハ既ニ之レヲ内外ニ宣言セラレ、且ツ我ガ政府ヨリ獨力朝鮮政府ヲ改良スル云々諸政府ニ對シ放言シタル上、改良ヲ忠告スルノミナラズ、改良ノ實行ニ干渉シタリ。本官ハ最初ヨリ朝鮮政府ニ對シテハ常ニ獨立ヲ鞏固ナラシムルノ實ヲ擧ゲシメント斷言シ干渉ヲナシタリ。然ルニ今日トナリテハ多少ノ變態ヲ考究セザルヲ得ザルハ先般ノ貴電ニテ「魯政府ハ名實トモ朝鮮ノ獨立ヲ毀損ス可カラズトノ一條ヲ以テ、日清平和條件ノ骨子ト爲ス旨」御内報有之、且ツ又近來各新聞ノ所報ニ據リテ判斷スルニ、日、清事件ニ對シ、英國モ魯國ト内々其意ヲ合セタルヤニ被疑候。然ルトキハ向後朝鮮獨立ノ能ク保全セラルヽト否トハ尤モ内外人ノ注視スル重要問題ト相成リ、諸强國ハ之レヲ以テ他日對韓政略ヲ拘束スル唯一ノ鎖鑰ト爲スニ立チ至ル可クト存候。從來我ガ對韓ノ方針ハ清國ノ干渉ヲ根柢ヨリ芟除シ、名義及ビ事實ノ上ニ於テ朝鮮ノ獨立權利ヲ保全スルニ在リテ、之ガ爲メ兵力ヲ以テ清國ヲ斥ケ、朝鮮ヲシテ略ボ獨立ノ姿ヲ爲サシメタルハ各國共ニ我ガ大義ヲ尊敬スルハ勿論ニ候フトモ、唯ダ同國ヲシテ内政ヲ整理シテ獨立ノ基礎ヲ鞏固ナラシメ、並ニ右鞏固ニ至ルマデ内外ノ患害ヲ被ムルコトナカラシメントスルニハ、將來朝鮮國ハ富强ニ赴キ自ラ其國ヲ守ルニ至ルマデハ、我國ノ義務トシテ之レヲ保護セザル可カラズ。左レバ鐵道モ我ヨリ之レヲ架設シ、電信モ我ニテ之レヲ管理シ、且ツ又守備兵モ舊ニ依テ之レヲ存置セザル可カラズ。加之、朝鮮目下ノ形勢、多數ノ顧問官ヲ採用セシメ、强迫的ニ之ニ干渉セザル可カラズ。然ルニ右鐵道ノ建設ト云ヒ、電信ノ管理ト云ヒ、且ツ又内政整理ノ干渉ト云ヒ、孰レモ多少朝鮮ノ獨立權ヲ損害スルニ相違ナキニ由リ、局外者ヲ

シテ我ハ表面朝鮮ノ獨立ヲ唱フレドモ、其實之レヲ屬隷トスル野心アリトノ疑心ヲ懷カシメ、卽チ我ガ宣言ト事業ト相矛盾セリトノ擬論ヲ受クルヲ免レザル可シ。左候時ハ之レガ爲メ他日諸强國ノ容喙ヲ招クニ至ルモ難計ニ付、差當リ左ノ三件ニ付我ガ政府ノ方針ヲ御確定相成度候。

一、守備兵排置ノ事。

朝鮮ヲ以テ完全ノ獨立國ト認ムルトキハ、日清兩國平和ニ復シ、日、清ノ同盟已ムノ日ヲ以テ我ガ在韓ノ兵ヲ撤去スルハ(或ハ我ガ官民保護ノ爲メ若干ヲ留メ)當然ナリト雖モ、現今ノ狀況ハ我ガ兵一旦撤去ノ曉ニハ、東學黨又ハ地方官ガ從來民產ヲ掠奪セル怨恨ハ絕エズ、名ヲ東學黨ニ借リ再燃シテ國內ノ紛亂ヲ致スハ必然ト思惟セラレタリ。尙ホ一層注意ヲ要スルハ從來ノ現在兵凡ソ一萬人計、勿論惡弊多ク且ツ用ニ立ツ可キ見込ナキニヨリ歸休兵トナスノ見込、其他在京無用ノ官吏幾百人、地方ニ於テハ監司所在地ヲ除キ府郡縣州凡ソ三百二十七ヶ所ニテ役員二萬二千三百餘アリ、改良ノ爲メ官制ヲ定メシムルニ付テハ凡ソ一萬六千有餘ノ廢官吏ヲ生ジ候。就テハ多少ノ變動ハ免カル可カラザル事ト被信候。如何ニモ急激ナル改革着手ト御驚愕モ可有之候ヘドモ財政ノ不充分ト積弊ヲ矯正セントスルヨリシテ止ムヲ得ザル次第ニ有之候。

一、鐵道電信條約ノ事。

本件ニ付第二十六號信ヲ以テ鄙見委曲申進候ニ付、熟ト御詮議相成度候。右ニ付追々申進候通リ、訂約ニ至ルマデハ非常ノ强迫手段ヲ要スルコト、推量致候處、右强迫手段ハ到底秘密ヲ保ツコト能ハズ、我ハ之レヲ秘密ニセントシテモ、彼方ニテハ困迫ノ餘リ少クトモ英、米、魯ノ三使臣ヘハ內々相談ヲ試ムルニ相違ナク、左候時ハ外見上甚ダ宜シカラズ、且ツ又當國人ハ邪推强ク猜疑心深キ方ナレバ、我國ハ野心ヲ包藏ストノ觀念ハ今ニ至ルマデ心裏ニ消滅セズ、故ニ彼我兩國ノ間ニ困難事件ノ生ズル每ニ其疑心忽チ增長シテ處辨上ニ妨害ヲ與フルハ既往ニ徵シテ明カナルコトニ有之候。依テ其邊ヲモ併セテ御再考相成度候。

一、內政改革ノ事。

右ハ改革ノ目的ヲ達セントスルニハ、今日マデノ如ク深ク之レニ干涉シ、一方ニハ大院君、王妃等ノ動モスレバ妨害ヲ爲サントスル者ヲ押ヘ置キ、他ノ一方ニハ施設ノ方針ヲ立テ、規畫ヲ授ケ、且ツ我ガ顧問官ヲ薦用セシメ、恰モ手ヲ取ラヌ計リノ世話ヲ爲サヾル可カラズ。然ルニ局外者ヨリ之ヲ觀ルトキハ、右等ノ干涉ヲ以テ朝鮮ノ獨立權利ヲ毀損スト爲スモ難計ト存候。依テ其嫌疑ヲ避ケンガ爲ニ、向後ハ改革ノ成否ニハ深ク頓着セズ、干涉ノ手ヲ縮メテ朝鮮政府ノ自行ニ任ス可キヤ否ヤ、若クハ我ガ政

府ハ朝鮮ノ内政改良ヲ以テ既ニ内外ニ宣言シタリシコトナレバ、改良ヲ成功セシメンガ爲メ、與フル所ノ干渉ヘ多少深入スルモ差支ナシトスルカ。

已上三件ニ付至急我ガ政府ノ議御確定相成候様致度此段及内申候也。

明治二十八年四月八日

特命全權公使　伯爵　井上　馨

外務大臣　子爵　陸奥宗光　殿

大院君李埈鎔隱謀暴露權設裁判所開廷顚末

大院君ノ孫宗正卿李埈鎔氏ガ去月十八日ノ夜突然法務衙門權設裁判所ニ拘引セラレタル一事ハ大ニ世間ノ耳目ヲ惹クニ至レリ。抑モ客年來大院君、李埈鎔ノ隱謀計畫アリシコトハ、多少當國人ノ間ニ風說有之シモ、充分ノ證據無之爲メ其筋ニ於テモ沈默ニ附シ來リタルニ、偶マ本年陰曆一月下旬曹龍承ナル者、内、法二大臣ヲ暗殺セント企テタリトノ嫌疑ニ坐シ、一タビ警務廳ノ手ニ囚ハレタル以來、是レニ幸運セル高宗柱、金國善、韓祈錫、田東錫等諸犯續々縛ニ就ケリ。此等ノ者ハ謀士トシテ大院君、李埈鎔ニ信用セラレ、始終其門ニ出入シ、密議ヲ凝ラシタルモノナリ。今其計畫ノ大略ヲ聽クニ左ノ如シ。

第一、密使ヲ平壤ニ派シ清兵ノ大擧南下ヲ促スコト。

第二、東學徒ヲ煽動シテ京城ニ引入ルコト。

第三、以上第一、第二ノ手段ニ據テ日兵ヲ挾擊シ、之レヲ境外ニ逐斥スルコト。

第四、開花黨ノ重ナル人物、卽チ金宏集、金鶴羽、金嘉鎭、安驅壽、趙義淵、金宗漢、兪吉濬、李允用等ヲ暗殺スルコト。

第五、事變ニ與リ功勞アル者、並ニ某々ヲ用ヒテ新政府ヲ組織スルコト。

以上第一ノ計畫ハ現ニ實行セラレタルノ形跡備ハレリ。其密使トシテ平壤ニ赴キタルハ金宗源、李容鎬、林仁沫、鄭寅九、金烱穆等是レナリ。是等ノ徒ハ客歲陰曆七月十六日龍山ヨリ船ヲ僦ヒ、水路延安ニ出テ同七月廿一日平壤ニ入リ、監司ニ密書ヲ交付シ、李容鎬ノ如キハ現ニ清將衞汝貴ニ面議スル所アリタリシト云フ。然レドモ清兵一タビ平壤ニ大敗セシヨリ、是等ノ計略ハ全ク畫餅ニ歸シ、少シク李容鎬等ノ一味ヲシテ沮喪セシメタルモノ、如シ。第二ノ計畫ハ陰曆八月下旬頃ヨリ漸次着手セラレタルモノノ如シ。當時全羅、慶尙ノ東徒稍ヤ再燃ノ色ヲ呈セリ。是ニ於テ李健永、朴東鎭、朴世綱等ニ東徒征討ノ名ヲ授ケ、表面東學徒鎭撫ヲ粧ヒ、其實密書ヲ齎シテ窃カニ其煽動ニ從事セシメタリ。其密書ナルモノハ左ノ如シ。

卽遣三南召募使○○○密示、爾等自先王朝化中遺民、不忘先王之恩德、而至今尙存、在朝者畫附彼、裏內無一人相議、茫々獨坐、仰天號哭而已、方今倭寇犯闕、禍及宗社、命在朝夕、事機到此、爾若不來、迫頭禍患、是若奈何、以此敎示。

又前投理守廷變々密書三通ヲ授ケ、忠淸道ノ土豪名族ニ圖ルニ東學黨煽動ノ事ヲ以テシ（汝川往宋大臣ノ子、判書宋秉瑞運山住故金大臣ノ孫、敎官金永吉魯城住進士尹滋臣ノ三人ニ交付ス）又李容鎬ヲ慶尙道ニ送リ、到ル處東學徒ヲ肅集セシム。右五名ノ中、朴東鎭ハ忠淸道ニ於テ巨魁任箕準徐長玉ニ朴世綱ハ全羅道ニ於テ巨魁全琫準宋喜玉ト相會シテ招集ニ從事セリ。是ニ於テ三南ノ東徒齊シク蜂起シ、全琫準、金海南（又介男ト稱ス）ハ全羅道ニ、崔法軒ハ忠淸道ニ起リ、九月上旬ニ及ンデハ其勢益猖獗ノ色ヲ顯ハシ、到處官軍ヲ破リ官廳ヲ襲フテ軍糧武器ヲ奪ヒ民家ヲ燒キ、財貨ヲ掠メ全州已ニ陷リ、公州、淸州モ次イデ亦危カラントス。各路地方官ノ急ヲ報ズルモノ陸續絕エズ、此時政府ハ日本兵ノ力ヲ借リ討剿スベシト決シ、大君主ノ裁可ヲ乞フニ及ンデ、大院君、李埈鎔等力ヲ極メテ之レヲ抗拒シテ曰ク、東徒ト雖モ固ヨリ均シク是レ本國ノ蒼生ナリ、今逆順主義ヲ誤マルコト此ノ如シ、宜シク之レヲ諭解スルニ道ヲ以テセバ彼必ラズ王化ノ良民タラザルハナシト固ク執ツテ動カズ。政府ノ議屢々其征討ヲ促スルニ及ンデ始メテ大院君ハ自身ノ名ニ於テ一編ノ說諭文ヲ三南ノ東徒ニ下シ、政府ニ向テ表面ニハ其諭解ヲ擔保シナガラ、其裏面ニハ之レニ反シテ依然敎唆シタル形跡アリタリト云フ。陰曆九月上旬頃東學徒ノ關係ヨリ警務廳ニ捕ハレタル許燁、李秉輝ノ二人ハ大院君、李埈鎔ノ隱謀ニ與リ知リタルノ廉ヲ以テ端ナクモ隱謀破綻ノ原因トハ成レリ。大院君ハ警務廳ノ此擧ニ出デタ

ルヲ深ク怨ミ、辭ヲ宮門守衛巡檢ノ禮式舊法ニ戻リタルニ借リ、巡檢ヲ嚴罰ニ處シ、次イデ警務使李允用ノ官職ヲ褫奪シ、國父ノ威權ヲ振フテ政府ヲ凌ギ、之レヲシテ緘默セシメ、飽クマデ隱謀ノ跡ヲ曖昧ニ歸セント試ミタリ。而シテ開化黨暗殺ノ事ハ高宋柱、金國善等ニ擔當セシメ、彼等ハ沈遠釆ト云フ者ガ兼ネテ集メ置キタル壯士劒客ヲ使嗾シ、其第一着手トシテ刺客崔亨植、崔亨順、張德鉉、金漢英、李永培、李汝益、高致弘、徐丙奎等ハ十月三十日ノ夜法務協辨金鶴羽ヲ磚洞ノ私邸ニ襲ヒテ之レヲ殪シ、尙ホ進ンデ他ニ及ボサントセシモ、當時警務廳ノ機密嚴密ニシテ容易ニ手ヲ下ス能ハザリシト。又一ハ本官着任後大院君、李埈鎔ガ東徒ニ貫通シテ何等密計アリトノ事ヲ確カニ聞キ込ミタル折柄、恰モ好シ我ガ第一軍ガ平壤占領ノ際發見シタル國王、大君院父子ガ平安監司ニ送リ、淸將ニ內通シタル書翰ノ手ニ入ルアリテ、此二件ハ極メテ同君ヲ詰責スルノ好材料トハナリタリ。其當時本官ノ諭旨シタル要領ハ、日、朝兩國ハ已ニ同盟定約ヲ結ビ、淸國ニ對シテハ均シク交戰國ノ地位ニ立チ居ルニモ拘ハラズ、是レト暗ニ結托シテ日本ニ敵セントスルハ不德義ナリ。定約違反ナリ。又東徒ハ自國ノ兵力ヲ以テ鎭撫スルコト能ハザルニ坐シ、政府ハ公文ヲ發シ、我ガ兵力ヲ借リテ剿討ニ從事セル際、却テ之レヲ敎唆スルガ如キハ表裏反覆不當ノ擧動ト云ハザルヲ得ズト云々。

大院君、李埈鎔ハ深ク慚愧スル所アリテ、之レガ爲メ屢々當館ニ就キ其不始末ヲ謝シタルナリ。是レヨリ以後ハ只管時機ノ到ルヲ待ツノ外唯ダ一部ノ準備ヲ爲スノミニテ、姑ク其發動ノ期ヲ緩シタルモノヽ如シ。以上一切ノ事實ハ連累者ノ供述ニ依リ次第ニ發覺セシカバ、斯カル上ハ當國政府ハ勢ヒ之レヲ不問ニ措ク能ハザルニ至レリ。

從來ノ慣例ニ據ルトキハ此等隱謀者アリテ、事一タビ發覺シタル場合ニハ、義禁府ニ罪人ヲ拘禁シ、原任大臣ハ勿論、金吾堂上一見列席ノ上審問ヲ爲シ、然ル後ハ死罪ヲ宣告スルノ例ナリシモ、義禁府ハ昨年事變後之レヲ廢シタルヲ以テ、法務衙門ニ於テ其審理ヲ爲サヾルヲ得ズ。而シテ未ダ裁判所構成法等ノ頒布前ニアツテハ、此等王族ニ對スル犯罪ヲ處斷スルノ途ナキヲ以テ、法務衙門ハ新構成法內ニ特別法院ナルモノヲ置キ、之レヲシテ專ラ王族ニ關スル犯罪ヲ裁判セシムルノ法ヲ設ケ、陰曆四月一日ヨリ其實施ヲ行ハントセリ。然ルニ大院君、李埈鎔ノ一派ハ薄々警務廳ノ獄事ヲ泄レ聞キ、事ノ已ニ干連センコトヲ恐レ、切ニ日本ニ赴任シタシトテ總理大臣、外務大臣ヘモ嚴重ニ迫リ、遽カニ行李ヲ治メ便船ヲ俟ツノ姿ナリシ。然ルニ當國政府ハ本件ノ露顯シタル以來ハ、是レニ對スルコト頗ル冷淡ニシテ船便ノ豫定シ難キ事、公使館燒失後建物並ニ器具ノ準備ナキ事等ノ辭柄ヲ設ケテ容易ニ其赴任ニ同意セズ、窃カニ之レガ處分方法ヲ熟議セリ。蓋シ當國トシテ何人ト雖モ若シ王位ヲ覬覦スルモノアリテ發覺シタルトキハ、君臣ノ分トシテ其罪狀ヲ極論シ、百官擧ツテ嚴律ニ處センコトヲ奏請シ、縱ヘ君主ニシ

テ躊躇スルニセヨ、臣僚ハ迫ツテ之レヲ決行セシムル例ナリシガ、今李埈鎔氏ノ事モ亦タ之レト同樣ノ手續ヲ履ムベキ筈ナレドモ、當國政府ハ庶政改革ノ際ノ事トテ、可成酷刑ヲ避ケシメントノ考ヘヨリ、本官ハ屢々其刑ヲ加フル事ノ不可ナルヲ勸告シ、特ニ特別法院ノ手ニ移シ、正當ノ法ニ處シ世間一般ノ批評ヲ受ケシメザランコトヲ務メタリ。

此ニ李埈鎔氏逃避策トシテ運動シタル日本行モ兎ニ角涉々シク行ハレザルノミナラズ、內々大獄ニ準備アルコトヲ探知シタルモノト相見エ、陰曆三月二十二日全權公使ヲ辭（此間朴內務大臣ヨリ內々辭職ヲ勸告シタリトノ事アリ）セシガ、程ナク同氏ハ秘密ニ外國行ヲ企テツツアル趣キ其筋ノ聞知スル所トナリテ、彌ヨ時日ヲ遷延スベカラズト認メラレ、未ダ裁判所構成法發布前ト雖モ、法務ハ之レニ着手スルノ必要ヲ感ジタレバ、陰曆三月二十五日總理大臣、法務大臣ハ左ノ如ク奏請シテ特ニ李宗正卿拘禁ノ裁可ヲ得タリ。法務衙門罪人曹龍承、高宗柱等ノ招辭ヲ見ルトキハ、則情節隱慝ニシテ關係嚴重ナリ。是レ暇刻ヲ容ルベカラズ、嚴覈ヲ加ヘ情ヲ得ントス、宗正卿李埈鎔ノ名囚供中ニ出ヅ、査質ヲ行フベキモノトス。仍テ法務衙門ニ拿來シ、特別法院ヲ設ケ審問セバ如何ノ旨ヲ奉ジテ依元。

右ニ據リ警務廳ニ於テ同二十六日ノ未明、警務官李圭完ニ巡檢ヲ帶同セシメ、李埈鎔氏ノ邸ニ就キ令狀ヲ示シ、權設裁判所ニ引渡シ拘禁セリ。之レヲ聽イテ大院君ハ大ニ驚キ、直チニ輿ヲ命ジ、尾跡シテ裁判所ニ到リ、憤懣ノ語氣ヲ發シ、李埈鎔ヲ放釋シテ歸宅セシムベシト迫リ、構內ニ闖入セントスル勢ヒナリシモ、門衛巡檢ノ拒絕スル所トナリ、止ムヲ得ズ其左側ナル果物會社內ニ入リ、同家ニ留宿シテ密カニ其動靜ヲ窺フモノヽ如シ。是ニ於テ同君ノ長男李載冕氏（宮內大臣）並ニ朴內務等ハ其輕擧事體ニ缺ク所アルヲ諭シ、强ヒテ其歸邸ヲ促ガスモ、同君ハ頑然固ク執ツテ歸邸ヲ肯ゼズト云フ。此ノ出來事ノ突然起リタルヤ、一時城內ノ民心稍ヤ疑團中ニアリシモ、漢城新報等ノ記事ヲ見ルニ及ンデ大ニ其疑念ヲ解キ、兩三日後ハ全ク平常ニ復セリ。李氏ハ目下特別法院ニ於テ裁判官、法務大臣、同協辨、同參議、中樞院議院（新官制ニ定ムル規定ニ據ル）等掛官トシテ審理中ナリ。

將又本件ニ關シ去月二十日當國駐劄外交官ノ決議ニ依リ、米國公使ハ本官ニ向ツテ別紙甲號ノ通リ、李氏拘禁事件ハ著シク人民ニ感動ヲ與ヘタルヲ以テ、或ハ何等暴動ノ懸念ナシトセザレバ、豫メ居留人保護ノ策ヲ講ジ置クノ必要アレバ、使臣會議ヲ開イテ協議シタシトノ事ヲ申越セシニ付、本官ハ去ル掛念無之筋トハ萬々信用致候ヘドモ、爲念當國政府ノ意向ヲ確メ置ク方可然ト存ジ、別紙乙號ノ通リ照會ニ及ビ候處、果シテ當國政府ノ意見モ本官ノ意見ト一致シ、丙號ノ通リ回答有リ候間、不取敢其趣意ニテ米公使ヘ回答書差出置候。然ルニ本月一日大院君ハ突然本官ノ許ニ別紙丁號ノ如キ書翰ヲ贈レリ。是レト同時ニ各國使臣ニモ同樣書翰ヲ送リタ

ル由、右ハ全ク筋違ノ儀ニ有之、本官ヨリ回答スベキ限ニ無之儀トハ存候ヘドモ、又一己人ノ交誼上ヨリ察スレバ自ラ氣ノ毒ナル感情ヲ生ジ默止シ難ク、依テ戊號ノ通リ苛酷ノ處置無之樣忠告シ、一面ニハ已號ノ如ク其趣旨ヲ以テ短簡ニ大院君ニ回答致シ置キ候。

明治二十八年五月十日

特命全權公使　伯爵　井上　馨

外務大臣　子爵　陸奥宗光　殿

前件落着

大院君、李埈鎔隱謀ノ顚末ハ前回已ニ及報申置候、李埈鎔以下諸犯ハ其後特別法院ニ於テ審理ノ末、本月十三日ヲ以テ裁判宣告濟ト相成候。抑モ本件ニ關シテハ本官ハ當初ヨリ兩國政府ガ舊規ニ泥ンデ極刑ヲ用フル事ハ全ク復讐ニ類似シ、獨リ國民ノ感情ヲ害スルノミナラズ、今日外國人ノ環視シ居ル處ニ其外見甚ダ宜シカラザレバ、右ハ極メテ不可ナルヲ說キ、出來得ル丈寬大ニ且ツ公正ナラザルベカラザル趣ヲ以テ、曾テ大君主ニモ奏上シ、又金總理始メ當局大官ニモ屢々勸告スル所アリタルニ、總理始メ法部モ大ニ曉リテ本官ノ忠告ヲ容レ、右樣可致トノ事ニ略ボ內定致居候。然ルニ當國ノ現行法ナルモノハ明律ニシテ、此法律ノ範圍ニ於テ李埈鎔ヲ處分スルトセバ死刑ニ相當シ、何等酌量減刑ノ途ナキガ如シ。因テ宣告前、卽チ本月十日ニ於テ閣議ハ流刑處分等加減例及ビ特別法院ノ裁判ニ於テハ本刑ニ一等若クハ二等ヲ酌量減刑スルコトヲ得ル旨ノ特例ヲ設ケテ勅裁ヲ乞ヒ、卽日ヨリ之レガ施行ヲ命ゼリ（其勅令譯文ハ別

紙ノ通リ）右ノ如ク李埈鎔以下ノ處分ヲシテ從來ノ嚴刑ヲ避クルノ準備ヲ了シ、本月十一日內閣會議ヲ開キタルニ、諸大臣ノ間ニハ（朴內部ニ數回出席ヲ求メタルモ殊更ニ病氣ト稱シ終ニ出席セザリシト云フ）先ヅ特別法院ノ判決ニ於テ一等ヲ減ジ流終身ニ處シ、尙ホ陛下特赦ニ出テ一等若クハ二等ヲ減ジタシトノ議論多數ナルニモ拘ハラズ、徐法務ハ突然異論ヲ提出シテ不同意ヲ唱ヘ、李埈鎔ヲ處スルニハ舊慣ニ據リ極刑ヲ用フベシト主張スルニ至レリ（徐法部ハ會議ノ前日マデハ減等論ニ同意シ、現ニ減等ノ判決案マデモ整ヘ置キタルニ、同日午前朴內部ト會合セシ結果ハ忽チ前說ヲ飜シ、此提議ヲ爲スニ至レルナリ）總理始メ各大臣ハ今ヤ庶政改良ノ時ニ當ツテ舊慣株守シテ苛酷ノ處置ヲ爲スガ如キハ世間ノ感情ヲ害ヒ、國家ノ爲メ不利益ナリト抗論シ、結局諸大臣ノ議論其當ヲ得、法部ハ辭屈シ語窮スルニ及ンデ屢々辯論ヲ內部ニ讓リ、內部出席ノ上辯論スル所アルベシト云フニアリ、畢竟當日ノ會議ハ法部獨リ極刑ヲ固執シ、其職權上此判決ヲ斷行スベシト主唱スルノ外、他ノ減等說ヲ容ルヽノ風色之レ無キヨリ、相方不快ノ感情ヲ起シ、閣議ハ大波瀾ノ中ニ終了セラレタリ。本官ハ今日閣議ニ於テ又何等ノ異議ヲ生ズルナキヤヲ豫期シ難キヲ察シ、杉村書記官ヲ派シテ金總理ニ向ヒ其極刑ニ出ヅルコト不可ナルヲ勸告シ、重ネテ同官ヲ宮內府ニ遣シ（本官ハ此頃病氣ノ爲メ引籠中ナレバ）大略左ノ事ヲ代奏セシメタリ。

今回ノ獄事ニ關シテハ本使ガ屢々奏上シタル如ク、貴國從來ノ慣例ニ據リ極刑ニ處スルガ如キハ極メテ不可ナリ。何トナレバ日本ハ朝鮮ノ開明ヲ望ミ內政改良ノ事ヲ勸告シ、今ヤ貴政府ハ其勸告ヲ容レ庶政改良ノ緒ニ就キツヽアリ。去レバ極メテ從前ノ陋規ヲ矯メザルベカラズ。然ルニ此ノ不幸ナル出來事ニ處スルニ、復讐的ノ思想ヲ以テスルガ如キハ一般ノ惡感情ヲ來シ、王室ノ爲メ策ノ宜シキモノニアラザルナリ。故ニ充分公平ニ且ツ寬大ノ處置ニ出デザル可カラズ、特ニ駐在外交官等ハ此出來事以來耳目ヲ聳テテ事ノ成行ニ注目シツヽアリ、現ニ兩三日前ニ於テ俄、米公使ハ外部大臣ニ面會シテ勸告スル所アリシヲ聞ケリ。且ツ過般本使ニ對シテ使臣會議ヲ開クベシトノ相談有之タルモ、本使ハ時機尙ホ早シト思ヒシヲ以テ其不必用ナル所以ヲ述べ之レヲ拒ミ置ケリ。就テハ此獄事ヲ適當ニ處分スルト否トハ世間ノ感情ニ關シ、頗ル貴國ノ爲メ利害アル問題ナレバ、本使微衷ノ存スル所、强ヒテ採納ヲ望マントスルハ、先ヅ特別法院ニ於テ一等ヲ減ジ流終身ノ宣告ヲ爲サバ、陛下ハ大權ニ據リ二等ヲ特赦シ流十年ニ處セラレタシ、又タ此特赦權ハ陛下ニアルベキハ普通一般ノ慣例ニシテ、而カモ明律中ニスラ此明文ヲ揭ゲアレバ、敢テ違例ノ典ニ有之間ジク云々、之ニ就テハ大君主ハ殊ノ外御喜悅被爲在、實ハ我國ノ慣例トシテ此種ノ獄事ハ君權ト雖モ如何トモスル能ハズシテ、朕モ深ク煩悶中ニアリシガ、公使ノ勸告ニ據リ一條ノ血路ヲ得タル心地セリ、何トナレバ此獄事以來大院君、府大夫

人（國王ノ生父母）憂悶悲嘆ノ境遇ハ眞ニ默止シ難ク、朕モ之ガ爲メ寢食安カラザリシ折柄、公使ノ勸告ニ出デ減等ノ方法ヲ聞ク以上ハ大ニ愁眉ヲ開ケリ云々トノ御言葉アリシ由、以上ノ奏聞及ビ勅答ハ當日國王ニハ先王ノ忌辰日ニ相當シ、齋戒ノ典ヲ擧ゲサセラル、御日柄ナレバ、引見ヲ許サル、ノ御都合ニ至ラズ、宮內大臣ヲ經テ奏上スベキ旨ノ御沙汰ニ依リ、同書記官ハ金署理大臣ノ執奏ニ據リタル趣歸報致候。又同書記官ハ歸路金總理ヲ內閣ニ訪ヒタルニ、前顯ノ如ク徐法務ノ異議アリテ當日ノ會議ハ不調和ト成リタル事ヲ承知セシ趣、是レ亦逐一報告有之候。之レニ依テ本官以爲ラク、右法部大臣ガ極刑ノ提議ハ其實內部ノ使嘱ニ出デタルモノニシテ（內部ハ又王妃ノ爲メ動カサレタルカ）先ヅ內部ノ極刑論ヲ打破セザレバ、到底法部ノ說ヲ變ゼシムル事能ハズト信ジ、翌朝杉村書記官ヲ朴內部ノ許ニ遣ハシ、隨分手强ク忠告ヲ試ミタリ。最初ノ程ハ內部モ頗ル頑固ニ極刑說ヲ主張シ、容易ニ折合フ色毫モ見エザリシガ、最後ニ及ンデ李埈鎔丈ケハ減刑說ニ同意スルコトニ相成、其他朴準陽、李泰鎔ノ連類ニ至ツテハ減刑スベキノ限ニアラザル旨ヲ主張セシ由ナレドモ、同書記官ハ單ニ李埈鎔ノ一身ニ就イテノ問題ナレバ他犯ノ減刑ト否トハ姑ク問フ處ニアラズトテ相別レタル趣歸館報告致候。サテ右李埈鎔事件ニ關シテ內、法兩大臣ニ於テ何故斯ク極刑ヲ主張スルカト申スニ、若シ此等謀反者ヲシテ生存セシムルトキハ、終ヒニ又死灰再燃、何時復讐ヲ受クルヤモ知ルベカラズ。果シテ然ラバ寧ロ此徒ヲシテ遺類ナカラシムル方後顧ノ患ヒナクシテ終始安全ナルベシトノ臆病心ニ外ナラザルベシ。故ニ當方ヨリ强ヒテ他犯ノ（朴準陽外）處分ヲモ酌減スベシト主張シ、深ク立入ラントスルトキハ、却テ不快ヲ感ジ事容易ニ終着スベキニモアラズ。加之、當初ノ目的タル唯一ニ李埈鎔ノ減等ニアル事ナレバ、今李埈鎔ノ減等說ニシテ實行セラル、以上ハ、他ハ先方望ミ通リ處置スルモ强ヒテ無差支儀ニ付、其儘放任致候。是レヨリ先キ大院君ハ特別法院ノ左側果物會社ニ宿泊シテ暗ニ獄事動靜ヲ窺ヒツツアリタルニ、本月十一日午前十時頃俄カニ會社ヲ飛出シ、忽チニ乘轎ヲ命ジ王宮ニ入レリ。道路說ヲ爲スモノ洶々タリ。故ニ本館ヨリ人ヲ派シ密カニ入闕後ノ景況ヲ探ラシメタルニ、大院君ハ本日李埈鎔ハ死刑ノ宣告ヲ受クベシトノ風說ヲ聞キ、疑懼ヲ抱クノ際、大院君宿所ノ周圍ハ巡檢ノ警戒ヲ增シ、朝來ノ光景何トナク物騷ニシテ、以爲ラク或ハ禍身ニ及ブモ知ルベカラズト恐慌ノ餘リ、身ヲ大君主ノ傍ラニ置クノ安全ナルヲ察シ、王宮ニ入リタルモノナルコト判然致候。大院君入宮後引續キ府大夫人、宮內大臣モ入宮シ、初更頃マデ宮中ニアリシモ、恰モ好シ杉村書記官ヲ王宮ニ遣ハシ、減刑ノ勸告ヲ入奏スル所アリシカバ、一同ハ李埈鎔ノ助命ト刑期十年ニアル事ヲ親シク國王ヨリ聞キ取ラレ、大ニ安堵ノ思ヲ爲シ、三人相携ヘテ歸邸セラレタリト云フ。斯クテ本月十三日ニ及ンデハ特別法院ニ於テ李埈鎔始メ諸犯ノ裁判ヲ宣告セリ。其要領ハ左ノ如シ。

被告朴準陽、李泰容ハ謀反罪トシテ高宗柱、田東錫、崔享植ハ謀殺罪トシテ各絞罪ニ、同李埈鎔、韓祈錫、金國善ハ謀反罪ノ處、情狀ヲ酌量シ本刑ニ一等ヲ減ジ流終身ニ、同林璡洙、許燁、金明鎬ハ謀反罪ノ處、本刑ニ二等ヲ減ジ各流十五年ニ、高館弘、李汝益、徐丙奎、李永培金漢英、張德鉉、崔享順ハ謀反罪トシテ各流終身ニ、同金九五、李乃春、曹龍承ハ謀殺者トシテ各流十五年ニ、同尹震求、鄭祖源ハ情狀ヲ酌量シテ謀殺不加切ノ本刑ニ一等ヲ減ジ各流十年ニ處セラレタリ。

右宣告後翌日、卽チ本月十四日ニ於テ李埈鎔ハ特赦ニ逢フテ尙ホ二等ヲ減刑セラレ流十年ニ處セラレタリ。而シテ適所ハ喬相島ト定メラル。斯クテ先ヅ此獄事モ一段落ヲ告ゲタリ。

一般ノ感情ハ至極此處分ヲ以テ公明正大ナリトセリ。大院君ハ深ク慙愧ノ色アリテ近日其祖先ノ墓所忠淸道德山（或ハ始興トモ云フ）ニ下向シ、閑ニ殘年ヲ送ルベシトノ希望ヲ有シ居ル由ニ有之候。

明治二十八年五月二十三日

特命全權公使　伯爵　井上　馨

外務大臣　子爵　陸奥　宗光　殿

追テ本月廿日夜大院君俄カニ邸ヲ出デラレタルニ付、警視廳ヨリ警部、巡査ヲ派シ、南大門外ニ於テ追付キタル處、同君ハ配所ニ在ル李埈鎔ヲ深ク案ゼラレ、喬相島ニ赴カレントシタル趣ナルモ、警官ニ引止メラレ暫ク同門外ナル自己ノ別莊ニ居ラル、由。

軍部大臣趙義淵進退ニ關シ内閣破裂ノ傾向ヲ生ジタル報告二通

本年二月頃訓練大隊長申泰休ノ身分ニ關シ、朴内務大臣ハ之ヲ却ケント主張シ、趙軍務大臣ハ内務大臣トシテ武官ノ進退ニ容喙スルハ越權ナリト論爭シ、結局本官ノ仲裁ニ依テ申泰休ハ其儘在職スルコトニ相成候處、原來趙軍務ハ新黨（卽チ朴氏派）ヲ難ジテ舊黨（卽チ金總理派）ニ傾キタルガ爲メ、常ニ新黨ノ惡ム所ト相成リ、其後同大臣ハ我軍慰問使トシテ占領地ヘ派遣ヲ命ゼラレ、不在中適々新官制ノ發布ニ遇ヒ、軍部内主要ノ位置ハ盡ク朴内部ノ一派ヲ以テ充タサレ、隨テ協辨、在衡モ亦同派ニ傾キタレバ、同大臣ハ恰モ孤立ノ姿ニテ部内ノ事務意ノ如クナラズ、加之、同大臣不在中ニ調査シタル會計上ノ結果ニテ、同大臣ハ昨年來官金若干（凡ソ五千餘圓）ヲ遣ヒ込ミタリト揚言シ、劇シク之レヲ攻擊シタリシガ、同氏歸京後右金高ハ客年事變以來自身ノ擔當セル東學黨探偵、日本軍隊案内ノ爲メ官員ヲ出張セシメ、若クハ其應接等種々ノ雜費ニ支出シタル旨申出デ、略ボ信用ヲ措ク可キ理由有之、加之、本年陰四月一日以前、卽チ會計法實施前ニ係ハルモノハ各衙門トモ一應ノ取調ヲ爲スマデニテ、深ク査究セザルベシトノ議ニテ、同事件ハ姑ク泣寐入リノ姿ニ歸セシ處、本月十一日ニ至リ又趙軍部ノ身分ニ關シ新事件ヲ生ジ、再ビ内閣ノ議ニ上レリ。事ノ發端ハ本月上旬京畿道揚州牧使赴任ニ付、護衞兵一分隊派遣ノ必要アリ、同月十一日之レヲ閣議ニ提出シタルニ、議件多ク其日ハ裁可ヲ請フノ暇無之、依テ其官房長鄭蘭敎ニ裁可濟次第派兵ノ準備ヲ爲ス可シト命ジ置キタルニ、鄭官房長ハ如何ニ承知シタリケン、其夜直チニ命ヲ下シテ出兵セシメタル趣、翌十二日朝ニ至リ始メテ軍部大臣ノ耳ニ入リタレバ、同大臣ハ大ニ驚キ急ニ勅裁ヲ乞ハンガ爲メ參内シタル所、豈ニ料ランヤ大君主ヨリ勅裁ヲ請ハズシテ兵ヲ動カシ、並ニ勅定前新制ノ軍服ヲ着用シタリトノ二件ハ不都合ナルニ付、進白ヲ許サズトノ御沙汰ヲ蒙リ、尋ネテ總理大臣ヲ召シ、右二事件ヲ内閣ニ於テ詮議ス可シト嚴達シタル處、總理大臣ハ軍服ノ義ハ陛下既ニ勅裁アリシト承知セリ。且ツ又出兵一件ニ付若シ軍部大臣ヲ過失アリトセラル、時ハ、本大臣モ亦其責ヲ免ル、能ハズ、何分ノ御處置ヲ仰グマデナリト奏上シ、直チニ退出シタリト云ヘリ。扨テ右ノ如ク大君主ハ出兵ノ事ヲ早ク承知セラレタル次第ハ、反對派ノ推測ニ據レバ十日ノ夜鄭官房長ハ出兵ノ命令ヲ發シタルヤ否、直チニ之レヲ朴内部ヘ内報シ、朴内部ハ其夜參内シテ密奏ヲ遂ゲタルモノニテ、

總理大臣入闕ノ際ニ障子ヲ隔テ、朴內部ノ聲ヲ漏聞シタリト云ヘリ。

翌十三日ハ國王ノ勅諭モアレバ趙軍務大臣處分ノ義ニ付キ內閣會議ヲ開キタル處、議論二派ニ分レ、朴、徐、金(農商工部)、朴(學部)ノ四大臣ハ免職論ヲ主張シ、金(總理)、金(外部)、魚ノ三大臣ハ非免職論ヲ固持シテ決定セズ、一時朴內部ハ涙ヲ垂レテ激論ニ及ビタリト聞ケリ。

同十五日夜、齋藤、星ノ兩氏來リ、內閣不折合ノ事情ヲ述べ候ニ付、本官ハ翌日右兩人ヲ派シ、朴內部ノ底意ヲ叩カシメント期シタルニ、齋藤氏ノ注意ニ付熟ト意見相尋候處、同氏ノ見込ニテハ、若シ內閣ノ折合ヲ保タント欲セバ趙軍部ヲ除キシ上、魚度支、兪總書等ヲモ併セテ除カザル可カラズ。去リ乍ラ今日急ニ之レヲ除カントスルニアラズ、猶ホ趙軍部處分ニ關シ、總理大臣トノ折合ヲ附ケンガ爲メ、金外部大臣ヘ委細談ジ置キタルコト有之趣申出候ニ付、一應金外部ノ意見ヲモ承知致度ト存ジ、翌十七日午前同官ノ來館ヲ請ヒ、近日內閣不折合ノ事情等相尋ネ候處、金外部曰ク、內閣ノ不折合ハ實ニ將來ノ爲ニ案ゼラレタリ。金總理ハ善ク人ノ說ヲ容ル、方ナレバ多少讓合附クト雖モ、朴內部ハ自己ノ發議ニ係ハルコトハ一歩モ讓ラヌ方ナリ。故ニ今日趙軍部處分ノ事ハ幸ヒニ妥協ニ歸スルモ、他日再破綻ヲ免レザル鏡ヲ掛ケテ見ルガ如シ云々。依テ本官ハ仲裁方案ヲ同大臣ニ授ケ、先ヅ金總理ノ同意スルヤ否ヤヲ試ミタルニ、其日午後ハ王命ニ依テ御前會議ヲ開ク都合ナル趣兼ネテ承知致候ニ付、朴氏ニ托シテ右會議ノ延引ヲ取計ハシメタルモ行ハレズ、而シテ御前會議ノ結果ハ趙軍部ハ其職ヲ免ゼラレ、金總理ハ辭表ヲ呈スルニ至レリ。其詳細左ノ如シ。

各大臣ハ他ノ事件ニ付例ノ如ク會議ノ結果ヲ奏上シ終リタル處、(是ノ日趙軍ノ事ハ故ラニ削除シテ奏上ニ及バザル相談ナリシト云フ)

大君主　曰ク、前日軍部大臣處分ノ事ヲ總理大臣ヘ達シ置キタルニ、今日マデ未ダ何等復命シ來ラズ、抑モ卿等ハ該事件ヲ如何ニ思フヤ。

金農商工部　進奏シテ曰ク、趙軍部大臣ノ罪數フルニ餘リアリ、勅諭ノ通リ免職當然ト存ゼリ。

徐法部　曰ク、臣モ亦同樣ニ考ヘ居レリ。

朴內部、朴學部　亦同樣ノ意味ヲ奏上シタリ。是ニ於テ金總理、魚度支ノ二大臣ハ之レニ對シ辯解セントシタル處、

大君主　(聲色共ニ厲ク勅シテ曰ク)軍部大臣處分ノ事ハ朕既ニ之レヲ命ゼリ、然ルニ大臣其命ヲ奉行セザルニ於テハ是レ君主ノ權、國ニ行ハレヌト云フモノナリ。抑モ國家統治ノ大權ハ君主ニアルコトハ各國皆同樣ニテ、井上公使モ亦斯ノ如ク說ケリ。故ニ朕ガ命令スル所ヲ奉行セザルニ於テハ是レ君主ナキモ同樣ナレバ、朕ハ此國ニ君臨スルコトヲ欲セズ、爾等宜シク此國ヲ共和政體ト爲ス可シ。趙軍部ノ罪ハ我國舊法ニ依レバ死

ニ當ルモノナリ、斷ジテ之ヲ假借スルヲ得ズト云々。

金總理　曰ク、道理ニ據ラズ單ニ免職セヨトノ聖旨ナラバ、一ノ軍部大臣ヲ免ズルハ別ニ難事ニ無之、唯ダ其後任ハ何人ニ命ゼラル可キヤ。

大君主　曰ク、別ニ後任ヲ必要トセズ、協辨ニ代理セシムルモ可ナリ。

金總理　復曰ク、鄭蘭敎ハ必ラズ免官セザル可カラズ。

大君主　曰ク、其事ハ必ラズシモ急ヲ要セザレバ、今ニ於テ決定スルニ及バズ。

是ニ於テ辭ヲ收メ謹ンデ命ヲ領シテ退闕シ、翌十七日趙軍部ハ本官ヲ免ゼラレ、同日ヨリ金總理ハ引入リテ登閣セズ、尋ネテ辭表ヲ奏呈シタルニ付キ、一昨二十日之レヲ內閣會議ニ掛ケタル上、聞屆不可相成トノ案ヲ附シ奏上ノ手續ニ及ビタル由ナレドモ、同大臣ハ飽クマデ辭職ノ決心ナリト聞ケリ。尙ホ同大臣ノ外ニ魚度支部大臣、金外部大臣モ引續キ辭表ヲ奉呈スル見込ナル由。

抑モ舊新兩派ノ久シク相容レザルハ必ラズシモ其所執ノ主義如何ニ關セズ、其他ニ協辨和シ難キ原因少ナカラズ。其一ハ舊派ハ着實ニシテ久シク國民ニ德望アルモ、新派ノ首領タル朴、徐二氏ハ本來國民ヨリ罪人視セラレタルニ、俄カニ歸朝シテ政局ニ立ツモノナレバ、其德望ハ遙カニ舊派ニ及バズ、隨テ彼等ハ政府ニ根據ヲ堅ムルヲ以テ唯一ノ急務ト爲シ、多ク同臭味ノ人々ヲ集メ、可成丈權力ヲ自黨ノ手ニ占メントスルモノヽ如シ。是レ舊派ノ疑惑ヲ買ヒ衝突ヲ招ク一原因ナリ。其次ギハ新派ノ朴、徐兩氏ハ王宮ト親緣アルヲ以テ、屢々宮闕ニ出入スルハ隨テ同氏等ハ國王ノ權力ヲ借リテ其意志ヲ達シ、國王、王妃モ亦同氏等ニ依リテ其希望ヲ果スコト往々可有之ニ付、反對派ノ嫌惡ヲ避クルヲ得ズ。是レ舊派ガ朴氏ヲ指シテ未來ノ世道ト爲シ、事々物々衝突ヲ興ス所以ナリ。故ニ目今ノ有樣ニテハ新派ハ表面當館ト親和ノ形ヲ裝フモ、內實國王ヲ戴イテ舊派ヲ倒シ、舊派ハ偏ニ本官ノ聲援ヲ賴ミ、新派ノ膨脹ヲ防ガントスルモノノ如シ。左レバ本官ハ孰レニ向ツテモ援助ヲ與フル能ハズ、尤モ新派ニ左袒シテ舊派ヲ卻クルコトハ敢テ難カラザルモ、將來日、韓兩國ノ爲メ必ラズ得策ノ處分ト認ムルヲ得ズ。若シ又舊派ヲ助ケテ新派ヲ卻ケントセバ、勢ヒ非常ノ手段ヲ用キザル可カラズ。然ルニ一方ニハ先般來屢々御注意ヲ受ケ候通リ、我國ノ故障モ有之候ヘバ、若シ深ク之レニ干涉スル時ハ或ハ其故障ノ度ヲ高メ、終リニ大事ニ至ランコトノ恐レナシトセズ。旁タ以テ本官ハ其處分ニ苦シミ、姑ク傍觀シテ自然ノ成行ニ相任セ置キ候。尤モ今後ノ成行如何ニ依リテハ更ニ考案ヲ廻ラシ、一時彌縫方取計可申ト存候ヘドモ、政府部內ノ軋轢ハ必ラズ此度ニ止リ申間敷、左候時ハ彼等能ク內政改革ノ實効ヲ奏スルヤ否ヤ頗ル被案候。依テ此際彼此ノ事情ヲ酌量シ、將來ノ目的ヲ定メ、之レニ從ツテ我ガ對策ノ方針ヲ一定スルコトハ急務ト存候間、事宜ニ依リテハ本官一時歸

朝ノ上鄙見ヲ陳述シ、諸事取極メ度モノト存候。

明治二十八年五月二十二日

特命全權公使　井　上　馨

外務大臣　子爵　陸　奥　宗　光　殿

朝鮮内閣ノ破裂

趙軍務大臣免官ノ後、金總理大臣ハ直チニ辭表ヲ奉呈シ、内閣分裂ノ傾向有之旨致承知候ニ付、本官廿三日再ビ朴内部大臣ヲ招キ、内閣分裂ニ付利害ヲ剖析シ忠告シタル要領左ノ如シ。

一、朝鮮今日ノ急務ハ獨立ノ基礎ヲ鞏固ニスルニ在リ、而シテ獨立ノ基礎ヲ鞏固ニスルハ内閣一致シテ事務ヲ擧ゲザルベカラズ。

二、朝鮮ノ改革ハ自動ヨリ起リシニアラズ、卽チ適々他國ノ勢力ヲ借リ以テ僅カニ今日新政ヲ行フノ機會ヲ得タルモノナレバ、是レ所謂他動ニ因テナルモノニシテ、我國維新ノ際ト其情勢ヲ異ニセリ。今日朝鮮ノ勢ヒハ之レヲ人身ニ譬フルニ、血液消耗、體力疲弊シテ恰カモ久患重症者ニ異ナラザレバ、俄カニ投ズルニ劇劑ヲ以テスルトキハ、但ニ其効ヲ收メ難キノミナラズ、反テ神昏ク氣塞ガルヲ致シ、轉タ危殆ヲ增スノミ、故ニ目下ノ計ハ唯ダ須ク國力ノ强弱ヲ量リ弊竇ノ所在ヲ究メ、且ツ外國ノ形勢ヲ審カ

ニシ、以テ徐々ニ實務ノ擧グルヲ圖ルベシ。

三、內亂ハ常ニ外患ヲ招クコトハ之レヲ朝鮮最近二十年ノ間ニ徵シテ明カナリ。卽チ明治十五、十七年及ビ昨年ノ如キ皆ナ內亂ヨリシテ外患ヲ致セシモノニアラザルハナシ。他日若シ閣僚和セズ、延イテ內擾ヲ釀サバ則チ外患必ラズ之レニ乘ズベシ。是レ勢ヒノ嗜易キモノナレバ、今日閣員黨ヲ立テ牆內ニ相鬩ギ以テ政府ノ體統ヲ缺クハ誠ニ不得策ト謂フ可シ。

四、新派ノ諸大臣ハ內閣ノ軋轢ヲ以テ主義方針ノ相合セザルニ起ルト爲セドモ、右ハ朝鮮古來ノ習慣ニテ、權ヲ爭ヒ勢ヒヲ占メ遂ニ世道タラントスル情弊ニ出デシモノト推定サレタリ。縱令其精神ハ然ラザルモ其實勢ノ趨ク所終ヒニ此ニ至ルハ疑フ可カラザルナリ。何ントナレバ客年內閣組織已來、各大臣ガ自ラ施設シタル政務ハ幾許モナケレバ、其間主義相衝突スベキ機會ナシ。果シテ此觀察ニシテ違ハザルトキハ、其爭ヒヤ遂ニ將ニ國家ヲ衰弱ノ境ニ導カントスルモノナレバ、深ク警戒スベキモノナリ。

五、新派諸大臣ハ又苟クモ主義不合ノ閣員アレバ、悉ク之レヲ斥ケ、更ニ同主義ノ人ヲ擧ゲテ新內閣ヲ組織セバ、將來一致協和シテ政務革新ノ成効ヲ期スベシト謂ハルヽモヽ、是レ亦謬見ト謂フベシ。今日ノ如ク內閣諸員ハ互ニ猜疑ヲ懷キテハ、幾回其人ヲ替フルモ忽チ合ヒ、忽チ離ル可ケレバ、終ヒニ永久ノ協睦ヲ望ムベカラズ。加之、凡ソ政事ヲ革新セント欲セバ、治理ニ通曉シ事務ニ諸熟ノ人ヲ求メザルベカラズ。今ノ諸大臣ハ不充分ナガラモ數月間其局ニ當リ、其事務ヲ練習シタルモノナレバ一旦之レヲ斥ケテ更ニ不熟練ノ人ヲ擧グルトキハ、事務益々澁滯シテ革新ノ業成効ヲ見ザルベシ。

云々。

右ノ趣意ヲ反覆シテ凡ソ四時間程說明ヲ與ヘタルニ拘ラズ、翌日朴內相ヨリ淺山顯藏ヲ以テ忠告ノ趣旨ハ了解シタルモ、事勢如何トモ致ス可カラザル場合ニ迫リタレバ、遺憾ナガラ聽從シ難キ旨反答有之候。依テ考フルニ朴內相ノ初志ハ、趙軍務ヲ斥クルニ過ギザリシニ、其後同志ノ人々（寧ロ朴氏ヲ推立テ新ニ奸地位ヲ得ントスル人々）漸ク增加シ、一集會每ニ氣焰相高マリ、竟ニ朴氏ト雖モ之レヲ制スル能ハザル場合ニ達シタルニアラザルカト被疑候ニ付、朴氏ノ外尙ホ同志者ヲ說諭セバ或ハ効能アルベシト思考シ、同二十五日徐法部、李警務使ノ二人ヲ招キ、略ボ前顯ノ趣意ヲ以テ之レヲ說諭シ、尙ホ杉村書記官ヲ金農商工部ヘ、楠瀨中佐ヲ權軍部代理ヘ派シテ同ジク忠告ヲ與ヘタルニ、金、權ノ兩氏ハ遂ニ自說ヲ屈シテ其場ヲ逃レタル由ナレドモ、徐、李ノ兩氏ハ同志者ト協議ノ上何分ノ返答ニ及ブ可シトノ辭ヲ遺シ、于今何等ノ確答無之候。然ルニ金總理大臣ハ一昨二十八日終ヒニ其官ヲ免ゼラレタレバ、朴派ノ諸大臣ハ

本官ノ忠告ニ頓着セズ、當初ノ見込ミニ從テ決行シタルモノト被推察候。委細ハ其都度發送ノ電信ニテ御承知相成候義ト存候。

抑モ新派ノ諸大臣ハ時ヲ得タル曉ニ悉ク他黨派ノ人ヲ斥ケ、純然タル同派（卽チ十七年ノ脫走連及ビ同臭味ノ人）ノミヲ擧ゲテ政府ヲ組織セントノ企謀ハ、本年二月中ニ起リタル總辭職ノ時ニ相發シ候ヘドモ、當時ハ東學黨未ダ鎭定セズ、大院君ノ勢力未ダ全ク挫折セザルニ因リ、輕々ニ本官ノ忠告ニ背キ難キ事情有之候處、今ヤ此二大患既ニ除カレ、且ツ魯國ノ干涉ハ我國ヲシテ金州半島ノ永久占領ヲ思ヒ止ラシメタリト聞キ、此機ニ乘ジテ再發セシモノト被推測候。尤モ彼等ハ其前ヨリ深ク國王、王妃ノ歡心ヲ買ヒ、之レニ說クニ日本ノ干涉ヲ弱メ、政府ノ權力ヲ殺ギ、之レヲ國王ノ手ニ收復ス可シトノ議ヲ以テシタル處、國王、王妃ハ兼ネテ切望セラレタルコトトテ、一モ二モナク之レヲ採納セラレタルニ因リ（此一節ハ推測）益々舊派ヲ制スル勢力ヲ得、且ツ又近頃同派ノ人々ヲシテ屢々魯館等ヲ訪ハシメ（屢々訪問シタル事實アルモ果シテ何等依賴シタルヤ否ヤ不詳、或ハ單ニ屢々訪問シテ其歡心ヲ買ハントスルモノカ）反ツテ我ヲ他人視スル裝ヒヲ爲スニ立至リ申候。別紙甲、乙、丙號ハ其ノ一端ヲ窺フニ足ルモノト被存候間茲ニ相添供貴覽候。

明治二十八年五月三十日

特命全權公使　伯爵　井上　馨

外務大臣　子爵　陸奥宗光　殿

（甲號）

金農商工部大臣ノ說左ノ如シ。

新舊兩派ハ政事上ニ於テ相異ナル主義ヲ懷キ居ル內ニモ著シキ相違ノ點ハ、舊派ノ人人ハ老少南北ノ四色ニ拘泥シ、門地ニアラザレバ之レヲ採用セズ。然ルニ新派ハ之レニ反シ御誓文ノ旨ヲ遵奉シ、門閥ニ拘ラズ人材ヲ登用セリ。依テ今日協和一致ト申事極メテ困難ナレバ、孰レカノ一方ヲ存シテ政府ニ當ラシメザルベカラズ。抑モ我國ハ君主國ナレバ、君主ノ命令ハ謹ンデ之レヲ奉ジ、君主ノ思召ニハ之レニ逆フコトヲ得ザルハ貴國ト雖モ同樣ノ事ナリ。左レバ君主ノ信任セラル、黨派ハ政府ニ立チ、信任セラレザル黨派ハ其職ヲ退クベキ道理ナレバ、今日ノ事情ニ就キ觀察スルトキハ、舊派ノ人々ハ政府ヲ退カザルヲ得ザル都合ナリ。何ントナレバ我ガ大君主ハ新派ノ諸大

臣ノ信任セラル、モ舊派ノ諸大臣ハ信任セラレザルナリ。

且ツ又李埈鎔ハ先般謀反罪ヲ以テ處罰セラレタルニ、其父タル李載冕ハ未ダ其職ヲ退カズ、我ガ大君主ハ實ニ李載冕ヲ嫌ハレ、隱ニ危懼ヲ懷カレ居レリ。然ルニ舊派ノ諸大臣ハ之レト親密ナル交渉ヲ爲セバ、彼等ノ間ニ如何ナル協議アルモ計リ難シ、近來聞ク所ニヨレバ舊派ノ人々ハ夜晩ク密會ヲ爲スト云ヘリ。是レ必ラズ我々ニ對シ何カ隱謀ヲ企テ居ルニ相違ナシ。我々ノ黨派ハ素ヨリ公明正大ナリ、決シテ彼等ノ如キ後ロ暗キコトナシ。云々

（乙號）

五月二十七日夜、兩陛下ニ親信アル宮内官吏洪啓薰ヲ招キ談話シタリ。同人ハ本ト金宏集、魚允中崇拜家ノ一人ナリシガ、俄カニ新派ノ二大臣ヲ讃稱シテ舊派ノ二大臣ヲ攻擊セリ、談話中ノ要點ハ左ノ如シ。

一、國内統治ノ大權ハ大君主ノ手ニ在ルコト勿論ナルニ、昨年改革已來、政務ハ總テ内閣ニテ議定シ、奏本ヲ具ヘテ大君主ノ裁可ヲ請フニ止マレリ。然ルニ今上ハ順良ノ御氣質ナレバ、奏本ニ對シテハ多分ハ之レヲ認可セラル、方ナリ。若シ御意ニ副ハヌ事アリテ認可セラレヌ時、若クハ何等ニ付キ大君主ヨリ特ニ命令アリシ時ハ、總理大臣等ハ多ク異議ヲ申立テ、聖意ヲ奉行セザル方ナリ。去レバ昨年來君權幾ンド行ハレザレバ、恰モ君主ナキモ同樣ノ事ナリ。然ルニ朴、徐二大臣ハ外國ノ事例ニ通ジ、君權ノ重ズベキヲ進奏シ、國家統治ノ大權ヲ擧ゲテ之レヲ大君主ノ手ニ復セシムル主義ヲ執ル人々ナレバ、大君主モ偏ニ該二大臣ニ信賴シテ他ノ舊大臣ヲ疎遠セラル、傾キアリ。故ニ少ナクトモ舊派ノ二大臣ヲ斥ケザル已上ハ、大君主ハ滿足セラレザルコト必然ナリ。

二、天ニ二日ナケレバ國ニ二主アルベキ道理ナシ。然ルニ舊派ノ諸大臣ハ君意ニ背ムキ君命ニ從ハザルコト往々アリテ、却テ他處ノ意ヲ受ケ其指揮ヲ奉ジテ政事ヲナスコトナレバ、是レ一國ニ二主アルモ同樣ナリ。此ニ由テ之レヲ觀レバ舊派ノ諸大臣ハ國家ニ對シ二心ヲ懷ク者ト見做スモ過言ニアラザルベシ。云々

五月二十九日洪啓薰報復シテ曰ク、

貴下ヨリ承ハリシ言ヲ以テ夫レトナク大君主ヘ申上ゲタルトコロ、大君主ニハ金總理、

魚度支ノ進退ニ付、朕ハ敢テ是非トモ之レヲ退ケネバナラヌト云フ事ニアラザルモ、内閣ノ公論ハ既ニ決定シテ奏上シタレバ、其公論ヲ採用セヌト云フコト相叶ハズ、終ヒニ免官ノ詮議ニ及ビタル次第ナリ。後日若シ機會アラバ再ビ之レヲ採用スベシト御意アリシ旨傳ヘタリ。

（丙　號）

本月二十八日宮内府内藏院長鄭秉夏氏來館致候ニ付、同人ハ大君主ノ御思召モ厚ク、且ツ一ト通リ事理ヲ辨ヘタルモノニ有之、旁タ本使ノ意見ヲ代表シテ大君主ニ内奏セシムルトキハ、目下差シ掛リタル内閣大臣間ノ風波ヲ治ムルノ一手段ト存ジ、同人ニ就キ内閣大臣ノ協和ニ關スル利害得失上詳細ノ談話ヲ爲シタル末、同人ハ早速承諾翌日入宮奏聞スベシト約シ相別レタル後、本月三十日同人ハ國分書記生ヲ招キ奏上ヲ經タル始末ニ付左ノ如ク談話セリ。

予ハ昨日（二十九日）例ニ依リ進宮セリ。然ルニ金總理ノ辭職ハ已ニ聞キ屆ケラレ、同月ノ官報ハ公然掲載ヲ爲シタル後ナレバ、予ガ公使ノ意見ヲ代陳スル目的ト聊カ齟齬致シ遺憾ナキ能ハズト雖モ、折角公使トノ御約束モアリ、旁タ徒ラニ默シテ止ムベキニアラザレバ、予ハ進ンデ奏上セント欲シ入謁セシニ、恰カモ沈相薫、閔泳奎等入侍ノ人々席ニアリシタメ、之レヲ憚リ姑ク差シ控ヘタル中、追々入侍モ去リタレバ、時機好ト昨日日本公使ヲ訪問シテ公使ノ直話ヲ聽キタル始末、即チ新舊兩派ノ一致和合ヲ計ラザルベカラザル事柄ニ關シ、具サニ奏陳スル所アリタルニ、大君主ノ御言葉ハ左ノ如シ。

昨年事變以來日本政府ノ厚誼ハ實ニ言語筆紙ニ盡シ難シ、就中、井上公使來任後勸告ニ、開導ニ、屢々入奏シテ孜々至ラザルナシ、其ノ我國ニ懇切ナル至情ハ朕始終感謝シテ止マザルナリ。然ルニ這回二、三大臣ノ辭職セザルベカラザル事ノ原因ハ、一、三舊大臣ハ昨年六月以來屢々朕ガ意志ニ違背シ、或ハ君權ヲ無視シ傍若無人、上下君臣ノ別ナキガ如キ言行多カリシ事、並ニ軍部大臣ヲ免職セザルベカラザル場合ニ於テ、總理、度支ノ二大臣ハ强ヒテ朕ガ意ニ戻リ、之レヲ曲庇シテ留任セシメント企タル事是レナリ。夫レ軍部ノ失策タルヤ

第一　申泰休ノ如キ不良ノ徒ヲシテ朕ガ同意セザルニモ拘ラズ訓練隊長ノ重職ヲ授ケ外面ハ朕ガ意ニ出デタルモノヽ如ク裝ヒタル事。

第二　日本占領地ニ慰問使トシテ派遣スルニ當リ、其發令前ニ係ハル陸軍將官ノ軍服ヲ着ケテ彼地ニ赴キタル事（新式制度發布前ニ於テハ一般舊式ニ據ルベキ筈ナルニ

私擅ノ擧動ト云フベシ）

第三　揚州ノ民擾ニ當リ勅旨ヲ請ハズシテ出兵ヲ命ジタルハ越權ノ處置ナル事（舊法ト雖モ猶ホ且ツ兵符ヲ下スノ例アリ、況ンヤ新官制ニ據ルトキハ勅旨ヲ請フベシトノコト明瞭ナリ）

第四　軍部內ニ於ケル金錢出納上不明ノ事多シトノ事（此ノ事柄ハ朕深ク根柢ヲ究メザレバ充分事實ヲ知ラザルモ公議ハ之レヲ失策ノ一ニ數ヘタリ）

國王ノ御言葉ハ矯飾ニ過ギタルニ付、左ニ事實ノ眞相ヲ揭グ（朱書セリ）

第一、申泰休ヲ隊長ニ任ズルトキ軍部ヨリ奏上シタルニ、國王ハ肯領セラレタルハ事實ナリ。敢テ聖意ニ戾リタル如キ事當時ナカリシ。

第二、趙軍部ハ出發ノ際新式制ニ據リ軍服ヲ拵ヘ御前ニ着用シテ、此回ノ行ハ慰問使且ツ觀戰ヲ爲スコトナレバ、兵馬ノ間ニ奔走スルノ覺悟ナレバ、古式ノ軍服ハ便宜惡シト存ズレバ發令前ナレドモ新軍服ヲ着用シタキ旨奏セシニ、國王モ同意セラレタルモノナリ。然ルニ今辭之レニ借ル可難。

第三、此出兵ハ軍務參議鄭蘭敎（朴泳孝ノ一味）ナルモノ軍部大臣ノ命ヲ待タズシテ自カラ出兵ヲ命ジタルノ事實ナリ。

第四、金錢出納上不明ノ事アリト云フモ昨年六月以後變亂ノ餘ヲ受ケ帳簿等ニ記載洩レアリシニ據ル、之レハ獨リ軍部ノミナラズ、舊各官營頗ル多シ）

以上ノ如ク數ヘ來タレバ軍部ハ己レノ職權ヲ濫用シ、又君權ヲ無視シタルノ責ヲ免カレザルモノナレバ、其懲誡ヲ受クルハ當然ナリ。而シテ舊大臣ハ此ノ如キモノヲ尙ホ依然トシテ國務大臣ノ位置ニ措カントスルハ、朕ガ徹頭徹尾同意ヲ表スル能ハザル所以ナリ。故ニ諸大臣列席ニ於テ大ニソノ擧動ヲ非難シ、痛ク叱責シタル處、彼等尙ホ朕ガ意ニ逆ヒ其留任ヲ固執セントノ事ナレバ最早君主ナキニ均シ。否、君權ヲ無視スルモノナリ。就テハ大臣等ノ望ミ通リ國體ヲ變更シテ新ニ共和政治ヲ興スナリ、又大統領ヲ撰ブナリ、我儘氣隨ニ行フ方可然、朕ハ敢テ無君權ニ虛位ヲ擁スルコトヲ甘ズルモノニアラズト痛責シタルニ、總理、度支ハ奏スラク、臣等逆鱗ニ觸レタル以上ハ安閑トシテ職ニアルベキニアラザレバ、辭表ヲ呈シテ各其職ヲ辭スベシ云々、朕之レニ答フルニ辭表ヲ出スト否トハ勝手タルベシ、朕ハ之レヲ停メ亦之レヲ勸ムルモノニアラズトノ極點ナル議論ニ押移リテ止ミタリ。事已ニ斯ノ如シ最早今日トナリテハ新舊大臣間ニ調停ヲ試ムル餘地ヲ存セズ、去レバ公使ガ折角國家ノ爲メ親切ナル忠告ヲ容ル、能ハザルハ深ク遺憾トスル所ナレドモ、事情餘儀ナキ次第ナリ。而シテ舊新大臣間ニ於ケル協和ハ到底望ムベカラザルコトハ、舊大臣タルモノガ始終淸國崇拜ノ念ヲ割斷スルコト能ハズシテ、

其戀々タル事大ノ舊夢ハ常ニ胞裡ニ往復シテ矢張リ清國ノ擧動ニ注目シ、其向背ヲ定メントスルガ如キ氣色アリ。故ニ朕ガ熱心ニ執リツヽアル進前主義ト大ニ相反シテ、動モスレバ舊式古格ヲ維持セント欲スルモノナリ。之レニ反シテ新派ト稱スル朴泳孝ハ如何トモ云フニ、之レハ熱心ニ進前主義ヲ執リ、如何ニモシテ國家ヲ旺盛ナラシメントスルニアリテ、其衷情ノ切ニシテ公平ナル能ク朕ガ意ニ適合セリ。今日本政府並ニ井上公使ト雖モ、我國ガ進前主義ヲ執リ國家ノ隆盛旺ヲ計ルニ於テハ極メテ同意、否、大賛成ノ事ナルベシ。朕ハ飽クマデ朕ガ意ニ適合スル此ノ朴内部ノ一派ヲ信依シ、之ニ據リテ内閣ヲ組織セシムルコト大ニ利益ナルヲ知ル。又中途沮喪スル事ナキヲ信ズ。故ニ朕ハ此内閣ヲ監督ノ下ニ措キ、終始必用ナル注意ヲ與ヘ、敢ヘテ失墜ナカランコトヲ期セズンバアラズ。此頃トテモ朴内部時々入謁ノ際ニ於テ事ヲ事前ニ愼重スベシトノ注意ヲ與ヘツヽアルコトナリ。舊派大臣ノコト大イニ執念深キ、曷ゾ其レ此ノ如クナルヤ。嚮キニ趙軍部ガ曾テ日本新占領地ニ赴キタルハ、卽チ舊派大臣ノ密議ニ出デタル結果ニシテ、舊大臣ハ以爲ラク、清國何程敗衂ノ後ヲ受ケタルモ、世間ニ傳ハル程ノコト之レ有ルマジ、去レバ實地ノ模樣ヲ視察シテ事實ヲ調査シ、然ル上向背ヲ定ムル方得策ナルベシトテ、暗ニ名ヲ觀戰ニ借リ、其實實況ヲ取調ブル爲メ派遣スルニ至レルモノナリ（國分書記生云フ、否、夫レハ大ナル邪推ナリ。趙軍部一行ノ占領地行ハ井上公使ノ勸告ニ出デタルモノニシテ、趙軍務若クハ舊大臣等ノ發意ニ成リタルモノニアラズ云々）最初ノ發言ハ何レニアルニモセヨ、必竟趙軍部ノ目的ハ是レニ外ナラザリシト云フ、豈ニ嘆ズベキニアラズヤ。尙ホ内閣總書兪吉濬ノ如キハ、久シク日本ニアリテ殆ンド日本的教育ヲ受ケタルモノナリ、然ルニ全ク舊派化シテ今ハ全然タル事大主義ヲ執ルニ至レリ云々。

以上國王ノ御言葉ナリト云ヒ了ツテ同氏ハ尙ホ語ヲ繼ギ、井上公使ノ忠告ハ返ス返スモ感謝致スナリ。去リ乍ラ朕ハ目下ノ行掛リ上新派ヲシテ内閣ヲ組織スル方寧ロ利益ナリ、又何等失墜ノ憂ヒナシト信ズレバ、公使モ深ク心配セザルヤウ吳々モ拙者ヨリ御傳ヘ致ス可シトノ聖意ナリ、因テ拙者以爲ラク、舊派ハ非常ニ國王ノ感情ヲ害ヒ殆ンド君臣ニアラズトノ御思召アルガ如シ。故ニ拙者モ强ヒテ調和說ノ行ハレ難キヲ知リ、當日ハ退席致シタリ云々。

韓廷ト歐米使臣トノ關係並ニ之ニ處スル方策

於漢城　日置益

朝鮮政府革新時代ノ發端ニ當リ、內閣總理大臣ノ地位ヲ占メタル金宏集派ノ勢力一タビ衰ヘショリ、玆ニ再ビ朋黨ノ分裂ヲ生ジタリ。

抑モ朝鮮從來ノ黨派ナルモノ一起一仆屢々其面目ヲ改メシト雖モ、要スルニ或ハ大院君ニ寅緣シ、或ハ王妃ニ依付シ、一時ノ權寵ヲ恃ンデ以テ自家ノ威福ヲ擅マニセント云フニ過ギズ。苟クモ駐韓他國公使ト黨中氣脈ヲ通ズルガ如キハ殆ンド未ダ之レヲ聞カザリシニ、今ヤ立黨ノ狀態大ニ疇昔ニ異ナリ、現時朋黨ノ旗色ハ外國人士ト互ニ信號ヲ通ズルノ形迹アルコト是レ實ニ當國ニ於ケル一ノ新現象ニシテ、有心者ノ最モ周密ナル注意ヲ要スルモノト謂ハザルベカラズ。新現象トハ如何ナルモノナルカ、近日道路喧傳スラク新黨ニアリ、曰ク貞洞派（卽チ各國公館所在地名ヲ冠ス）或ハ英語派ト稱シ、歐米人ヲ怙ンテ後援トナシ、以テ其私慾ヲ逞フセントスルノ團體ヲ言ヒ、曰ク日本語派又ハ軍人派ト稱シ日本ノ保助ニ依リテ其地位ヲ維持セントスルノ集合ヲ指スガ如シ。

夫レ今回朝鮮ノ革新事業ハ我レ實ニ之レガ啓導者タリ、否、實ニ之レガ主働者タリ。故ニ現政府ノ本體ハ元ト日本派ヲ以テ組織シタル一團塊トモ稱スベキモノニシテ、從テ特ニ日本派トシテ標識セラルヽガ如キ形迹ヲ存スルノ理由モナカリシガ、今ヤ遽カニ此派名ヲ以テ一種人種ニ冠スルニ至リタルハ所謂英語派ナルモノノ政府本體內ヨリ分生シテ新タニ一旗幟ヲ建テタルニ起因セズンバアラズ。夫レ然リ、今日此再派ガ占ムルトコロノ地位ヲ言ハヾ、英語派ハ進取攻擊的ニシテ、日本語派ハ保守的ナリ、換言スレバ日本語派ナルモノハ本來自ラ其頭角ヲ顯ハシタルニハアラズシテ、全ク英語派ノ擯斥ニ會シテ始メテ其黨名ヲ得タルモノノ如シ。而シテ仔細ニ其分子ヲ檢スル時ハ、日本語派ノ勢力ハ遙カニ英語派ノ下風ニ立タントスルノ傾向アリ。目下此派ニ就キ重ナル人物ヲ擧グレバ禹範善（訓練隊長）李明善（前內務協辨現非職）等數名ニシテ、其他ハ日本通辨ノ輩ニ過ギズ。人或ハ朴泳孝、金嘉鎭等ヲ以テ此派中ニ數フルモノアレドモ、是レ恐ラクハ觀察ノ誤謬タルヲ免カレザルベシ。朴、金諸氏ノ意向ヲ察スルニ、明日

日本語派ノ成立ハ英語派ヲ稍ヤ生色ヲ帶ビテ擯斥之レヲ傾ケントスルニ因リ

劉世南州縣局長モ有力ノ一人ナリト聞ケリ

張膽遽カニ他派ニ左袒スルハ不利益ナリトノ考ヘヨリ、苟且附加徒ラニ其外形ヲ裝フニ過ギズシテ其實全ク英語派（寧ロ外國派ト稱スル方適當ナラン）ニ屬スルモノナリ。是ニ於テ英國派中ニハ朴泳孝、徐光範、金嘉鎭、朴定陽、李完用、兪吉濬、徐載弼、李允用等ヲ始メトシ、政府ノ有力者ハ殆ンド全ク此派ニ屬スルト云フモ甚シキ過言ニ非ザルベク、而シテ此黨派ノ主義トスルトコロハ、好シヤ今後時局ノ變遷ニ際シテハ更ニ何派ニ化成セラルヽヤヲ知ル能ハズトスルモ、今日ノ情勢ヲ以テ之レヲ論斷スレバ、其日本ヲ非難シ排斥スルノ氣焰ハ日一日ヨリ熾ナラントスルノ傾向ヲ現ハシ、直チニ之レヲ日本排擊派ト推定スルニ大差ナカルベキヲ信ズルナリ。

此觀察ハ今日イイニ認メシトイフ但シ難圈ノ適中場點ノ分稍レヤ旗色ナ明カ英語派パ認ムルトモ可ナラシ、右ノ外、李淵、閔禹采、鎔等固ヨリ英語派ナリ

？△

？△細カニ觀察スルトキハ、左ノ如ク言フヲ正當ナリトス。

朴泳孝ハ今其方途ヲ失ヘリ、何トナレバ彼レガ王妃ノ寵ヲ得テ空飛ブ鳥ヲモ落スベキ時代ニ當リテ、彼ノ爪牙トナリテ働キタルモノ今ハ既ニ背イテ外國派ニ入リタリ。朴泳孝今若シ此派ニ組センカ、元ト彼レガ配下タリシモノ、後ヘニ附隨セザル可カラズ、外國派ハ必ラズシモ朴泳孝ノ入來ヲ拒マザル可キモ、之レヲ黨領ニ載クコトハ彼等ノ好マザル處ナラン。勢ヒ玆ニ至ツテ朴ハ全ク孤立ノ體ナレドモ、事態愈ヨ切迫シテ若シ他ニ依ル可キ力ノ興ラザルニ於テハ、英語派ニ入テ僅カニ其禍ヲ避クルノ窮策ニ出ヅルナラン。金、朴、兪（徐載弼ハ未ダ米國ヨリ歸リ居ラザルモ、是レハ米國派ガ自黨臭味ノモノト見テ外部協辨ノ椅子ヲ與ヘタルモノト想像スルヲ得ベシ）ノ輩ニ至ツテハ、只管形勢ヲ觀望シツツアルガ如クナレドモ、寧ロ米國派ノ勢力强キヲ認メ之レニ依ルノ傾向アリ（日書記）

人或ハ云フ、今ノ英語派ナルモノハ直チニ是レ王妃派ナリト、夫レ或ハ然ラン、然リト雖モ予ヲシテ之レヲ言ハシメバ、今ノ王妃派ナルモノハ昔日ノ王妃派ニ同ジカラザルナリ。何ヲ以テカ之レヲ言フ、曰ク國母ノ尊キヲ以テシテ權ヲ諸閔ニ與ヘ、一門ノ跋扈ヲ極ム、王妃實ニ之レガ立働者タリシナラン。是レ當年ノ王妃派ナリ。國太公ノ威ヲ以テシテ外戚ノ跳梁ヲ忌ミ、同志ヲ糾合シテ閔族夷滅シ、以テ自家ノ威福ヲ肆ニセンコトヲ企テタルハ是レ實ニ昔日ノ大院君派ナリ。然レドモ今日ノ形勢ハ大ニ之レニ異レリ。夫レ朴泳孝ハ王妃ガ年來ノ仇讐ナリ。而カモ客歲朴氏ガ我ガ帝國ノ威光ヲ藉リ、入テ內閣ニ列セシヨリ、王妃ハ百方之レヲ籠絡シ、引イテ無二ノ寵臣トナシ、以テ今日ニ至リシモ、近來冷熱乍チ變ジ、寵辱所ヲ易ヘントスル傾向ヲ見ハシ、王妃ガ純然タル英語派ヲ助クルニ至リタリト傳フルハ何ゾヤ。蓋シ王妃ノ千詭計萬譎謀ハ究竟自己ノ私欲（閔氏若クハ同臭味ノ人ヲ引イテ勢威ヲ占メントス慾望ナリ）ヲ謀ルニ外ナラズシテ、他ニ一主義、半見識ヲ具有スルニアラザルベキヲ以テ、今ヤ朝奏暮楚、常ニ勢力ノ存スルトコロニ趨附シ、以テ己レノ慾望ヲ遂ゲントシツヽアリ。是ノ故ニ日本公使ガ權力

ヲ有スルヲ見テハ、其怨敵タル朴氏マデモ之レヲ親近シテ一時ヲ欺瞞シ、今歐米人ガ勢ヒヲ握ラントスルノ機ヲ察シテハ、忽チ外國人派ヲ援引シテ己ガ勢位ヲ保タントスルモノヽ如シ。是レ則チ王妃若クハ大院君以外ニ更ニ重力ヲ有スルモノヲ生ジタルコト明白ニシテ、論者ノ所謂英語派ハ假令今日ノ王妃派ナリトスルモ、王妃自カラ黨幟ヲ樹テタルニアラズシテ、寧ロ外國派ノ權勢コソ反ツテ王妃ヲ來附セシメタルモノト斷言スルヲ得ベシ。是レ豈ニ朝鮮政界ノ新現象ニ非ラズトセンヤ。

顧ミテ日本排斥派ノ萠生シタル所以ヲ審察スルニ、其原由スルトコロ一ニシテ足ラズト雖モ、概言スレバ左ノ二題目コソ其近因トシテ見ルベキモノナリ。

一、日本人ノ跋扈

二、外國人ノ策略

日本人ガ戰勝ノ餘勢ヲ藉リテ一般ニ驕慢跋扈ノ弊アルコトハ今更ニ喋々ヲ要セザルコトナルガ、近來駐韓領事等マデモ朝鮮政府ニ對スル方針ニ於テ頗ル驕恣ニ失スルノ形跡ナシト云フヲ得ズ。今其一例ヲ擧グレバ、京城塔洞ナル彼ノ蠟石ノ高塔ヲ買取ラントノ意志ヲ以テ、僅カニ六百圓ヲ投ジテ其塔ノ存在スル土地ヲ買取リタルモノアリ。朝鮮政府ハ事後之レヲ聞キ、愕胎シテ該約束ノ取消ヲ我ガ領事ニ依賴シ來レリ。其理由ハ彼ノ古塔タル素ヨリ政府ノ所有ニ屬シ、

朝鮮政府内ノ多數ノ人ノ我ガ離隔テシ慮ヲ生ズルニ念ハ、鐵道電信ノ二約案ハ提出ト三百萬圓ノ貸付ニ際シ、銀行日本ノ要求條件ハ、即チ我ガ朝鮮紙幣ヲ法貨ト通用ニシテ並ニ朝鮮政府ヲシテ朝鮮東紙幣縛ヲシテ發行ニ二件ノ重キニハ其ノ居ルカ如シ

一私人民ノ賣買ヲ爲シ得ルモノニアラズ。且ツヤ斯カル我國稀代ノ紀念物ヲ外國人ノ手ニ移シ去ルコト實ニ一大恨事ナリト云フニ在リ。我ガ領事ハ之レニ答フルニ、我ガ人民ニ於テハ單ニ地面ヲ買得シタルノミ、塔ハ政府ノ所屬トアレバ何地ヘナリトモ勝手ニ挪運スベキコトヲ以テ其懇囑ヲ拒絶シタリト、此事タル我ニ於テ理論上素ヨリ差支ナカルベシト雖モ、實際ノ情節ニ於テ甚ダ快カラザル處置ト云フベキナリ。何ントナレバ朝鮮政府ノ申込モ決シテ不當ト云フベカラズ。故ニ領事ハ若シ其土地賣買ノ契約ヲ全然取消サシムルコト能ハズトセバ、切メテハ石塔現存ノ地基ヲ朝鮮政府ニ買戻サシムルカ、或ハ一歩進ンデ善隣國ノ紀念物ヲ惜存スルノ好意ヲ表スルガ爲メ、該買地主ニ諭シテ之レヲ献納セシムルノ手段ヲ取ルカ、此間妥當ナル調停ヲ行フニ於テ何ノ難キ事カアラン。更ニ一例ヲ擧グレバ、遠ク居留地以外ニ開店營業スル日本人アリ、是レ本ヨリ條約違犯ノ所爲ナルヲ以テ、朝鮮政府ハ其差止方ヲ依賴シ來レリ。然ルニ領事ハ曰ク、唯ダ其旨ヲ通達スベシ、併シ乍ラ本人若シ從ハザルトキハ之レニ處スルノ方ナシト、然ラバ捕縛シテ領事館ニ送致スベシト云ヘバ、曰ク不可ナリ、領事ニ於テ其所爲ヲ罰スルノ職權ナシト確言シアルガ如キ、此地ニオケル本邦人ノ現狀ヲ察スルニ、一般人民ノ跋扈ハ勿論、之レニ對スル官吏ノ方針モ寧ロ之レヲ庇護鼓勵スルノ傾向アリ、風潮ノ趨クトコロ終ニ醉漢櫻間養三郎ガ朴邸ニ於ケル暴行トナリ、醜客有馬辰治ガ金外相ニ對スル途上ノ要擊トナリ、醜辱

亡狀ノ椿事ヲ演出スルニ至リタルコト實ニ慨嘆ニ勝ヘザルナリ。夫レ此ノ如シ、而シテ朝鮮人ヲシテ帝國官民ニ對シ嫌厭忌惡ノ情ヲ抱カザラシメント欲スルモ豈ニ得ベケンヤ。

何ヲカ外國人ノ策略ト謂フ。曰ク、露公使ノ謀計ト雇米國人ノ運動是レナリ。抑モ日本ガ非常ノ勢力ヲ當國ニ伸ブルヤ、大ニ一般外國人ノ嫉妬心ヲ喚起シタルハ固ヨリ當然ノ情勢ナリト雖モ、獨リ駐韓米國人ニ至テハ概シテ無邪氣ノ人物ノミニシテ、加フルニ其本國ハ一般ニ日本ニ對シ好意ヲ表シツツアルヲ以テ、曩者日本ガ朝鮮ノ改革ニ着手スルノ初メニ當リテハ、敢テ甚ダシキ惡感情ヲ抱カザリシノミナラズ、却テ日本ニ依附セントスルノ考ヘアリシナリ。彼等心中蓋シ以爲ラク、日本元ト我ガ米國トノ友交最モ厚シ、必ラズ吾等ガ今日ノ情態ヲ察シ、吾等ヲシテ應分ノ用ヲナサシムルコト疑ヒナシト、是ニ於テ務メテ日本公使ノ下風ニ趨附シ、其親信ヲ得テ朝鮮ニ於ケル各自ノ地位ヲ保タントシタルノ形跡アリシハ殆ンド掩フベカラザルナリ。然ルニ當時日本公使ハ曾テ彼等ニ向テ一眄ノ榮ヲ與ヘザリシノミナラズ、無情ニモ悉ク之レヲ逐斥セントスルノ模樣アリタルヲ以テ、彼等ノ企望ハ茲ニ全ク齟齬シ、到底日本ニ依リ其地位ヲ保シガタキヲ察シ、乃チ斷然意ヲ決シテ日本ノ反對ニ立チ、百方策ヲ構ヘ傳手ヲ求メテ王宮ニ入リ、日本人跋扈ノ說ヲ以テ宮中ヲ聳動シ、遂ニ王宮守護ノ要職ヲ受ケ、今ニ至ツテ內廷ニ留マルアリ、又或者ハ常ニ深宮ニ出入シテ其顧問ニ參スルノ形迹甚ダ明カナリトス。想フニ此等外國人ハ其本國ノ趨向如何ハ敢テ問フ所ニ非ラズ、只管汲々トシテ自己ノ利益ヲ謀リ、且ツ糊口ノ計ヲ失ハンコトヲ是レ憂フルノ外亦他志ナカルベク、是ニ於テ心ヲ盡シ慮ヲ竭シテ王室ニ曲近シ、就中「ニンステッド」「ダン」兩氏ノ如キハ、現ニ世子宮ノ師傅トシテ常ニ左右ニ侍シ、始終口ヲ極メテ日本ノ缺點ヲ指摘シツツ居ルモノヽ如シ。彼ノ日本士官ガ熱心ニ教授シタル訓練隊ヲ以テ王宮ノ護衛ニ當ラシムルノ一事モ今ニ至ツテ容易ニ之レヲ行フ事能ハザルハ誠ニ其緣由ナシトセザルナリ。又米人「グレートハウス」ノ如キハ、元來日本最員ノ人ナルガ如ク、最初ヨリ我レニ附從スルノ心アリ、我亦一旦彼レニ對シ朝鮮政府ニ勸說シテ雇用セシムルコトヲ約束シタルモ、不幸半途ニシテ廢阻セシ以來、其感情如何ハ素ヨリ特ニ指陳スルノ要ナキナリ。若シ夫レ「リゼンドル」ノ如キハ、彼レニ於テ全然日本ノ意思ヲ以テ解雇セラレタルコトト思惟スルハ無理ナラヌ事情アリト知ルベシ。以上述ブルガ如ク、雇米國人ノ一味ガ各自ノ利益ヲ保護スルノ點ヨリ茲ニ日本反對ノ一團結ヲ組成スルニ至リシカバ、魯公使「ウエーバー」氏ハ此機大ニ乘ズベシトナシ、雇米人ノ不平ト現任米公使ノ不見識ナルヲ奇貨トシ、之レヲ利用シテ先ヅ日本ノ勢力ヲ抑挫スルノ手段ヲ取リ、飽クマデ米國ノ顧問員ヲ薦供シ、漸次朝鮮人中ニ於テモ米國主義ノ人ヲ擧用センコトヲ慫慂シ、思フガ儘ニ米公使ヲ利用シテ自家ノ經營ヲナシツヽアリ。蓋シ魯公使ノ底意ヲ察スルニ、今ニ於テ遽カニ魯人ヲ朝鮮政府ニ入レ、

其羽翼ヲ整フルコトハ、獨リ不得策トナスノミナラズ、是レ實ニ行ヒ易カラザルモノナレバ、寧ロ米人ヲ率キテ己レノ機關ニ供シ、徐ロニ永遠ノ謀ヲ畫クニ如カズト思惟シタルモノノ如シ。由是觀之、前ノ所謂外國派又ハ英語派ナルモノハ、卽チ米國派ナリ。而シテ此米國派ノ黑幕ハ魯公使ナリトスルモ甚ダシキ誤ナキヲ信ズルナリ。況ンヤ米公使ガ瑣末ノ事ヲ處スルニ當リテモ一ニ魯公使ノ意見ヲ問ヒタル上ナラデハ決行シ能ハザルノ一事ハ、此推測ヲ下サシムルニ充分ノ理由ヲ與フルニ足ルベキオヤ。而シテ「リゼンドル」ノ如キハ其爪牙股肱トナリテ此間ニ奔走シ居ルコト明白ナリトス。事體此ノ如シ、今ニシテ之レガ計ヲ爲サズンバ朝鮮內閣ハ結局米國內閣トナリ、李善得以下ノ米人之レガ高等顧問トシテ間接ニ魯公使ガ心計ヲ施設スルコトトナルベシ。勢ヒ此ニ至ラバ必ラズヤ我ガ顧問官ト是等高等顧問トノ衝突ヲ來スヲ免カレザルベシ（目下ト雖モ李善得ノ如キハ常ニ王宮ニ出入スルノミナラズ、時ニ外部等ヘモ出入シ、彼レ是レ施政上ニ付密語スルノ形迹アルガ如シ）去ル十七日米公使主人トナリテ各國使官ト朴、徐、金等數輩ヲ同席ニ招キ、獨リ我ガ代表者ヲ省キテ招待セザリシハ、米公使ガ故意ニ之レヲ除キタルモノト推定シテ不可ナキガ如シ。今其意ヲ察スルニ、此宴會ヤ所謂英語派ト外國使臣等ノ親睦ノ爲メ開キタルモノニシテ、此一事ノ朝鮮人ニ如何ナル感動ヲ與ヘタルヤハ、智者ヲ俟タズシテ知ルベキナリ。近來相傳フ、貞洞方面日夕輿馬駱驛タリト、顧ミテ我ガ帝國公使館

輿馬駱驛程ザ少ノ多ラス人入モアリ出ルニト增加シナルガ相ニキ如違

ノ門前雀羅ヲ見ルノ概アルモノ蓋シ亦其結果ノ一ナルベキ歟。

去ル十九日「アレン」氏來館ニ付暗ニ厭味ヲ言フ積リニテ、去ル十七日貴館ニテ大宴會アリシヤニ聞ケリト云ヒタルニ、彼レ辯解シテ曰ク、然リ朴、金、徐、其他日本派ノ人ヲ招キタリ、右ハ來ル七月四日ノ獨立祭日ニ招クベキモノヲ取越シテ饗應シタルモノナリ、其故ハ朝鮮人ハ馳走ノ無用招待ヲ好マザレバナリト云ヒ終ハリテ稍ヤ慙色アリキ。

事茲ニ至ル、終ヒニ挽回ノ策ナシト謂フカ、曰ク否、是レ纔カニ朝鮮ノ舞臺ノ席幕トシテ見ルベキノミ。我ガ有力ナル外交家ハ、之レニ處シ必ラズ能ク難ヲ排シ紛ヲ解キ綽然トシテ餘裕アルベキヲ疑ハザルナリ。然ラバ何ヲ以テ今日ニ處セントスル乎、曰ク其法蓋シ三アリ、請フ之レヲ左ニ陳ゼン。

第一　朝鮮人ヲシテ日本人ニ對スル惡感情ヲ滌除セシムルノ策ヲ講ゼザルベカラズ。卽チ嚴密ナル方法ニ依テ日本人ノ跋扈ヲ檢束シ、並ニ日本官吏ガ居留自國人民ニ對スル偏庇テウ念慮ヲ革制セシムルコト。

試ミニ思ヘ、朝鮮果シテ全然我ガ領土ト爲スヲ得ベキカ、策ノ得失ハ暫ク問ハズ、朝鮮人ヲ遇スル如何ニスルモ妨ゲナシ。彼レ若シ我ガ苛虐ニ堪ヘズシテ旗ヲ揭ゲテ我ニ抗セバ、我レ之レヲ撲滅センノミ。然レドモ朝鮮ハ我有ニ非ラザルナリ。彼我ノ關係

ハ獨立對等ナル今日、我レ彼レニ對シテ有スルトコロノ權力ハ、一ノ常規外ノ緣由ニ依ルモノナリ。今若シ兩國人民ノ感情益々相離背スルニ至ラバ、時局ノ艱難想ヲ設クルニ堪ヘザルモノアリ。而シテ目下我ガ官民朝鮮人ニ對スルヤ實ニ理不盡ナルコト多ク、飽クマデ傲慢無禮ノ言行ヲ加ヘテ以テ自ラ得々然タリ。此ノ如クニシテ進行スルトキハ、遠カラズシテ日、清開戰前ノ局面ニ退却スルハ火ヲ睹ルヨリ明カナリ。勢ヒ一タビ去ラバ果シテ如何ナル方法ニ依リ重ネテ現今ノ地位ヲ回復セントスルカ、思ハザルモ亦甚ダシト謂フベキナリ。

抑モ怪シム、多數日本人ハ傲然人ニ矜リテ曰ク、我レ實ニ朝鮮ノ獨立ヲ保固ナラシメタリ、而シテ又其ノ人民ヲ開導誘掖スルノ任務ヲ負ヘリト、其名ヤ甚ダ美ナリ、然レドモ朝鮮ニ對スル百般措置ノ實跡ヲ顧レバ、言行背馳、啻ダニ霄壤ノミナラザルヲ奈何ンセン。夫レ馬關條約ハ實ニ朝鮮ノ獨立ヲ確表シタリ。加之、日本政府ハ朝鮮ノ爲ニ巨款ヲ籌貸シテ財政ノ困黜ヲ濟ヒタリ。顧問官ヲ供薦シテ大ニ開導誘掖ノ勞ヲ執リツツアリ。而カモ其心術ヲ敲カバ果シテ能ク此等表面上ノ事實ト一致吻合スルヲ得ルカ、不幸ナガラ予ハ此間ニ一點ノ疑義ナキヲ保スル能ハザルナリ。蓋シ近來日本人ハ多少地位ヲ有シ、學識ヲ具フル人物マデモ兎ニ角戰勝熱ニ浮カサレ、宇内ノ大勢ニ注目スルノ餘裕ナク、朝鮮ノ實況如何、將來日本ガ之レニ對スル策略如何等、根本的大問題ニ至テハ毫頭之レヲ省慮籌畫スルノ見識ヲ有セズ、茫然五里霧中ニ彷徨シナガラ徒ニ大言壯語、朝鮮人ニ對シテハ恰モ己レ之レガ大恩人タルガ如ク、或ハ侮蔑凌辱スルノ意ナシトセズ。其心術ノ卑陋ナル言フニ勝ユベケンヤ。更ニ一般人民ニ至テハ朝鮮ヲ獨立セシメタリトセバ、取リモ直サズ朝鮮ヲ占取シタルコト、考ヘ居ルモノノ如ク、從テ朝鮮人ヲ視ルコト殆ンド奴隷ノ如シ。噫此ノ如クニシテ兩國ノ關係ヲ密着セシメンコトヲ望ム抑モ難イカナ。

夫レ他國ノ獨立ヲ擁護シ其人民ヲ啓導シタルコト世界其例ナキニアラズ。溯ツテ考フルニ、日本開國後、米國ハ「ビンガム」公使ヲ東京ニ派遣シ、常例ニ拘ハラズ永ク其任ニ留マラシメ、日本ガ他外國ノ爲ニ權利ヲ侵害セラレ、國步甚ダ艱ムノ日ニ當リテ日本ニ對シ如何ナルコトヲ爲シタルヤハ人ノ知ル所ナルベキヲ以テ、今茲ニ縷述スルヲ要セズト雖モ、日本ガ歐米ト交際ヲ通ジテヨリ漸ク他國ノ爲ニ國權ヲ侵損セラレツツアルヲ視ルヤ、米國ハ自ラ奮テ卒先開導者タルノ責任ヲ深ク心肝ニ訓シ、獨力日本ノ爲ニ中流ノ砥柱トナリテ歐洲諸國ニ對抗シ、列國ノ譏怨ヲ一身ニ引受ケ、毅然撓マザルコト十餘年間一日ノ如クナリシモノハ「ビンガム」公使其人ニアラズヤ。而シテ

當年氏ガ自國人ニ對セシ擧動ヲ察スルニ、氏ハ不偏不黨極メテ公明嚴正ナル方針ヲ取リシコト是レ實ニ氏ヲシテ長ク其地位ヲ保タシメタル大原因ト云フヲ得ベキナリ。抑モ當時米國ハ曾テ自ラ口ヲ開キテ日本ノ獨立ヲ保護スルト言ハザリシ、而シテ其着々實行セルトコロ彼ノ如クナリシナリ。顧ミテ日本ハ今世界ニ向テ朝鮮ヲ協助スト公言シナガラ、其實際ニ至テハ以上各條述ブルトコロノ如シ。念フテ茲ニ至レバ豈自ラ赧然タラザルナキヲ得ンヤ。之レヲ要スルニ「テンプラ」政略ハ到底永ク恃ムベキニアラズ Hohnesty is the best policy トハ實ニ千古ノ確言ナリ。

今日ノ計タル日本ハ朝鮮ニ對シテ毫末ノ野心ヲ挾ムベカラズ。朝鮮ハ到底我有ニ非ラザルモノト斷念セヨ、否ナ朝鮮ハ獨立對等ノ一國タルコトヲ心ニ銘ジ、須臾モ之レヲ忘ルベカラザルナリ。夫レ然リ既ニ朝鮮ヲ以テ我對等ノ國トシ、我ガ善隣國ト爲スニ於テハ愈ヨ朝鮮人ヲシテ我レニ離背セシムルノ不利益ナルコトヲ思ハザルベカラズ。是ニ於テ今ハ日本ノ利益ノ爲ニ謀ルモ亦宜シク飜然舊國ヲ一變シテ正意誠心ヲ以テ我ガ世界ニ對シテ爲シタル公言ヲ實ニスルコトヲ努メザルベカラズ。是レ則チ今日ノ局面ニ當リテ我ガ權力ヲ朝鮮ニ生キ延ビシムルノ一大要件タルヲ信ズルナリ。

第二　米公使ト露公使トノ關係ヲ疎ナラシムル事。

即功難
ヲ奏次
漸モ見
功ヲ其ニ
ヲ得キ
ヲ可モ
去リシ
リ乍ル
三ラ？
此ヲ
常計
久ハ
リ策
ノ
朝
鮮
ハ
激
若
切
或
者
一
局
バ
勢
セ
時
レ
化
急
政
ノ
變
ナ
シ
迫
時
ヲ
當
シ
臨
機
ノ
執
ザ
ザ
ル
ル
ル
ル
手
段
メ
得
合
場
ヲ
ベ
シ
ア

此策ヲ行ハントセバ、一方ニハ宜シク我ガ政府ノ人ヲ以テ華盛頓政府ノ人ニ就キ親シク朝鮮ノ現況ヲ說カシムベシ。其說ハ日本ガ朝鮮獨立ノ基礎ヲ確固ナラシムルコトハ米國ノ最モ賛同スルトコロナルベシ。然ルニ現任朝鮮米公使ハ其無經驗ノ爲メ一ニ露公使ノ指導ニ依賴スルノ結果トシテ不知不識ノ間ニ露公使ノ飜弄スルトコロトナリ、本國政府ノ方針ニ矛盾スルノ結果ヲ生ズルノ掛念アリトスルニ在リ。斯クシテ「シル」氏ニ私交アル人ヲシテ密カニ同氏ニ向ッテ剴切ナル警戒ヲ加ヘシムベシ。而シテ一方ニ在テハ京城我ガ公使館ニ於テ故ラニ米國ヲ以テ徹頭徹尾我レニ好意ヲ表シタルノ國ナリトシテ特別ノ親交アルガ如クニシ、今ヨリ少シク私交上ノ往來ヲ厚クスルト同時ニ、英總領事「ヒリヤー」氏ヲシテ隱然其勢力ヲ「シル」氏ニ及ボサシメ、以テ露公使ガ米公使ニ對スル今日ノ地位ヲ漸次英總領事ニ移サシムルコトヲ力ムルニアリ。

第三　日本ノ顧問官ト英、米ノ顧問官トノ交際ヲ開キ、互ニ相協助スルノ地位ニ立ツコト、即チ一般ニ排外主義ヲ棄テテ包括主義ヲ取ラザルベカラザルコト。

今日ノ急ニ處スルノ策固ヨリ一ニシテ足ラザルベシト雖モ、其要ヲ擧グレバ大略以上述ブルトコロノ如シ。此三策ニシテ實行セラレンカ、眼前ニ横ハレル忌ハシキ新現象ハ忽チ煙散霧消シテ、所謂英語派ナルモノハ我レ打チテ一丸トナシ、擧ゲテ之レヲ掌中ニ收ムルコトヲ得ベシ。

彼レ王妃閔黨ノ如キ亦タ何ンカアランヤ。若シ然ラズシテ因循坐シテ時機ヲ失ハバ臍ヲ嚙ムノ悔將サニ遠キニアラザラントス。一片ノ赤誠杞憂ニ切ナリ、敢テ忌憚ヲ忘レテ芻議ヲ献ズト云爾。

明治二十八年六月二十五日

井上公使出發後朝鮮政況

井上公使發京後朝鮮政府部内ハ極メテ靜穩ナリ。要スルニ朴内部派ハ内閣ノ協同ヲ保チ、反對者ノ心ヲ和ゲント苦心シ、兢々トシテ相勤ムルノ外、井上公使御暇乞謁見ノ翌日ニハ國王ヨリ特ニ宮内官吏ヲ魚度支大臣邸ヘ遣シ、内命ヲ傳ヘシメ（外部大臣ヨリ聞ケリ）之レニ因テ魚氏ハ終ヒニ辭職ヲ思ヒ止マリタルハ其助ケト爲リ、姑息ナガラモ目前小康ノ姿ニ有之候。初メ朴氏等ハ金前總理ハ同ジク朝ニ立チテ事ヲ共ニスベキモ、魚度支ハ剛情ニシテ自説ヲ屈セザル方ナレバ、到底魚氏ト事ヲ共ニスル能ハズ、加之、國王、王妃モ共ニ魚氏ヲ好マセラレズト公言シタリシガ、今日ト爲リテハ全ク顚倒ノ結果ト爲レリ。近頃朴派ノ人々ハ切ニ魚氏ノ剛强不屈ヲ稱賛シ、之ニ反シテ金前總理ヲバ無骨ノ小人或ハ奸物ト斥クルニ至レリ。當國人等ノ無節操不見識ナルコトハ今日ニ始マラヌコトニテ、閔泳駿ノ威權赫々タル時ハ口ヲ極メテ彼ヲ稱賛シ、大院君朝ニ立テバ同邸内ハ來客ノ山ヲ築ク有樣ナレバ、彼等ハ俄カニ其説ヲ二、三ニスル

ハ深ク怪ムニ足ラザルコト、存候。近來兪吉濬モ窃カニ人ニ對シ「嚮キニ金前總理ヲ補ケテ朴内部派ニ反對シタルハ、實ニ顧問官ノ指揮ニ出デシコトニテ自己ノ本意ニアラズ」ト辯解致シ居ル由、尤モ内閣ノ變動ニ乘ジテ其地位ヲ進メント運動シ、而シテ其目的ヲ達セザル輩、並ニ新派ニ容レラレザル人々ハ、窃カニ不平ヲ懷キ居ルトカニテ、同新派ノ内ニモ隱然二派ニ分カレ、一ハ貞洞派ト稱セラレ（貞洞ハ外國公使館ノ所在地ナレバ各館ニ出入スル者ヲ指シテ云フ）新學部大臣李完用、農商工部大臣李采淵、學部協辨尹致昊、宮内會計院長李夏英等ハ其重ナル人々ナリ。彼等ノ目的ハ各國ト厚薄ナク交際シ、各國共同ノ補助ニ依テ或ル一國ノ强制ヲ避ケントスルニ在ルガ如ク傳聞シ、他ノ一派ハ軍人派若クハ日本派トモ稱スベキモノニシテ、訓練隊長禹範善、前内部協辨李明善、劉世南、玄英運等一團結ヲ爲セリ。彼等ハ近頃貞洞派ノ稍ヤ得色アルヲ羨ミ之レト和合セザルガ如シ。度支協辨安駉壽ハ兼ネテ朴氏ト意見相投合セザルモ、勉メテ之レニ服從シ來リシ樣子ノ處、近來安氏ハ朴氏ニ因テ其地位ヲ進ムル能ハザルヲ悟リ、朴氏モ亦安氏ヲ容ル、能ハザル所ヨリ、終ヒニ安氏ヲ貶黜シテ地方官（漢城府尹ナラン）ト爲スコトニ内決シタル由、此義ニ付朴氏派ノ言フ所ト安氏自ラ言フ所ト相符セザル所アルモ、兎ニ角兩氏ノ間ニ不和ヲ生ジタルハ事實ト推定セラレ候。又兩三日前警務官李圭完ハ突然辭表ヲ提出シテ于今出勤セズ、同氏ハ朴氏ニ從ヒ久シク日本ニ居リ、目今警務廳ニテハ有用ノ人物ナリ。

然ルニ久シキ已前ヨリ警務使李允用、其他同廳員ノ行爲ニ關シ不平ヲ懷キ居リシ處、近來漸ク不平ノ度ヲ高メ、終ヒニ辭表ヲ呈出スルニ至レリト云フ。此外朴氏ニ隨從シテ日本ニ在リシ鄭蘭敎、柳赫魯等ハ敢テ朴氏ニ叛キタルニアラザルモ、朴氏ハ王妃ト相結托スト聞キ窃カニ之レヲ憂慮シ、切リニ金玉均ノ此ノ世ニ居ラザルヲ嘆息シヲルトゾ。

曩キニ王妃ノ機密金ト稱シ、朴氏ノ名ヲ以テ京城第一銀行支店ニ預ケ置キタル金高ハ、昨年末ニ於テ四萬餘圓アリシ處、同年末ニ二萬圓ヲ引出シ、近頃又五千圓ヲ引出シ、重ネテ殘高悉皆（壹萬七千圓程）ヲ引出シタル旨銀行員ヨリ承知致候。右五千圓ハ上海ニ送金スベキモノナリト使ノ人銀行員ニ相語リタルニ付、世人或ハ二閔ノ旅費ニ供スルモノナラント疑フ者有之候ヘドモ信用致シ難ク候。近頃王妃ハ屢々宮中ニ内宴ヲ開カル、由ナレバ、或ハ其等ノ費用ニ供セラル、コトト被推測候。

現宮内大臣李載冕氏（大院君ノ嗣子）ハ兩度辭表ヲ奉呈シタルモ御聞屆不相成ニ付、近頃第三回目ノ辭表ヲ奉呈シタル由、尤モ同氏ハ李埈鎔處分後悒鬱トシテ樂シマズ飽クマデ辭職ノ決心ナリト國分書記生ヘ直話シタル由。

明治二十八年六月十六日

臨時代理公使　杉村濬

外務大臣代理　侯爵　西園寺公望殿

再伸　露館ト王宮ノ間ニ何ニカ秘密交渉アルヤニ當地ニ於テ傳說致シ候ヘドモ、突留メタルコト無之候。數日前露公使ノ夫人ヨリ美麗ナル物品ヲ王妃ヘ献上シタルニ因リ、其謝禮トシテ宮女ヲ露館ヘ遣サレタリトノ浮說有之モ、是レ亦事實不詳候。尤モ露使ヨリ献品シタルコトハ去ル十九年頃ニモ其例有之候趣致承知候。

井上伯爵意見書

本官在任中ノ事情大要ハ過ル二十二日內閣ニ於テ陳述致置候。就テハ尙ホ左ニ急要ノ條件ニ付本官意見申出候。至急何分ノ決議有之度候。

公債ノ事

朝鮮政府財政ノ窮乏ハ追々報道シタル通リ、數百年前ヨリ執政ノ失當ニ由リ種々惡弊ノ極ニ達シタルハ今更申ス迄モナキ事ナガラ、抑モ遠ク壬辰ノ役後八道ノ困窮ニ加フルニ、王室ノ困迫ヨリ止ムヲ得ズシテ負擔ヲ增シ、困弊ヲ累ネ、殊ニ昨年ニ至リ朝鮮ノ米廩トモ稱スル慶尙、全羅、忠淸ノ三道ハ旱魃ニ加フルニ東學黨ノ騷擾ト、加フルニ、日淸戰爭場トナリシ爲メ、幾ンド荒廢ニ歸シタル姿トナリ、此等ノ爲メ一層困難ニ陷リタルモノナリ。昨年我ガ誠實ノ忠告

ヲ以テ内政改革ニ着手セントスルヤ、政府ノ金庫全ク空乏、王室ノ費用ヲ始メ兵隊ニ與フベキ給料凡ソ三ケ月モ不渡ノ有様ニテ、終ヒニ舊暦十二月ニ至リ官吏ハ漸ク愁訴ヲ起シ、兵隊ハ窃カニ激昂ノ色アルヨリ、政府憂懼ノ餘リ金員借入ノ義ヲ本官ニ嘆訴スルニ依リ、止ムヲ得ズ我ガ第一銀行ヨリ金十三萬圓ヲ貸與セシメタルモ、是レ僅カニ未拂延滯給一ケ月分ヲ拂ハシメ、纔カニ騷擾ノ萠芽ヲ鎮壓セシメタリ。彌ヨ改革ヲ實行セシメントスルニ、第一必要ナル財源ヲ得ザルニ因リ、一モ着手スルコト能ハズ。去リトテ其ノ儘經過セバ、復タ收拾ス可カラザル境ニ陷リ、折角帝國政府ガ世界ニ向ツテ公言シタル朝鮮ノ獨立ヲ扶持シ、其内政ヲ整理スト云フコトハ其結果ヲ得ズシテ、反ツテ其滅裂ヲ促ガシタル如クナラン歟ト、憂慮ノ餘リ五百萬圓ノ公債ヲ興サシメントシ、或ハ電信、或ハ信書ヲ以テ政府ノ御配慮ヲ乞ヒ、終ヒニ岡本ヲ歸國セシメテ其事情ノ困難ト切迫ヲ陳述シタリ。我ガ政府ニ於テモ財源救護ノ必要ヲ認メラレ、先ヅ三百萬圓ダケ貸與ノ事ニ御決定相成リ、尚ホ右貸與ニ付條件有之趣ヲ以テ末松法制局長官ヲ派出セラレ、又日本銀行役員鶴原、首藤ノ兩人ヲ伴ヒ來着スルヤ、朝鮮政府ハ朴内部、魚度支ノ兩大臣、及ビ安度支協辨ヲ以テ委員トシ、談判ヲ開キタルニ、我ガ注文ノ條件ニ對シテハ彼レ不同意ヲ唱ヘ、彼ノ提議ハ我モ亦允徒スルヲ得ザルノ條件ナルヲ以テ之レヲ聽カズ。種々ノ手段ヲ以テ交渉數回ノ後、一時我ガ主旨ニ屈服セシメ、約款ヲ纔カニ訂結スルニ至リタリ。然ルニ訂約通リ初三年据置キ、利子ヲ拂ヒ、後二ケ年間兩度ニ金額三百萬圓ノ數ヲ償還スルコトハ事實困難ナリ。近來假リニ調査シタル彼ノ政府歳入出豫算ニ就キ考案ヲ下ストキハ到底履行シ能ハズ。訂約ノ當時各大臣等切リニ延期ヲ懇求シタルハ誠ニ將來ヲ懸念シタルモノニシテ、正當ノ良心ヲ以テ推諒スレバ不道理ノ請求トモ存ゼラレズ。就テハ右償還期限ヲ既訂約條ノ通リ其期ニ至リ履行セシムルハ必然彼ヲシテ苦境ニ陷ラシムルノミナラズ、我ガ政府ニ於テモ之レヲ實行セシムル爲ニハ度支部ノ全歳入ヲ差押ヘ、强還セシムルノ止ムヲ得ザルノ壓迫手段ヲ取ラザル可ラザルニ至ラン。尚ホ外觀ニ於テ彼ニ屈從威迫ノ返却手段タル嫌ヒモ有之、且ツ方今外交ノ事情ニ際シタル場合ナレバ、左ニ二案ヲ畫シ建議候間、孰レカ其一ヲ御採用相成候様致度候。尤モ本官ノ希望ハ第一案、清國償金ノ内ヨリ五百萬圓ヨリ少ナカラズ六百萬圓ヨリ多カラザル金額ヲ惠與相成候方、是非御採用有之様致度候。依テ左ニ先ヅ其理由ヲ概陳セン。

昨年我ガ政府ガ朝鮮ヲ獨立セシメ、且ツ内政ヲ改革セシムト聲言シ、終ヒニ日、清戰爭ノ端ヲ發シ、牙山ヲ始メ平壤、義州ハ日、清ノ修羅場トナリ、釜、仁、元ノ三港ハ我ガ軍ノ上陸場トナリ、從テ八道幾ンド進軍ノ地トナリ、閭閻爲ニ驚擾シ、百姓離散ス。時恰カモ收穫ニ際セシモ、又之レヲ顧ミル能ハズ、如何ニモ無慘ノ境遇ニ立チ至リタリ。是レ畢竟ハ彼ノ政府失政ニ起因スルト、人民迷惑並ニ當時彼ノ政府按撫ノ至ラザルニ由ルト雖モ、此ノ國柄ニ對シテハ

未ダ望ムベカラズ。故ニ今之レニ酬イルニ清國ヨリ受クベキ償金ノ内ヨリ、五百萬圓ヨリ少ナカラズ、六百萬圓ヨリ多カラザル金額ヲ付與スルモ敢テ過當ノ恩惠ニモアラザル可シ。而シテ此結果ハ朝鮮人ノ感情ヲ深クシ、外見上ニ於テモ又我ハ獨立ヲ扶ケ財源ヲ救護スル忠實ヲ示ス一手段トモ相成候ハント相考ヘ候。若シ夫レ第一案ニシテ行ハレ難キ場合ニハ、第二案ノ償却期限延期、海關抵當、擔保トシテ稅關監督ニ日本人聘用等ノ條件ヲ以テ、規約ヲ改訂スルコトニ致置候。

第一案　清國ヨリ受クベキ償金ノ内ヨリ、五百萬圓ヨリ少ナカラズ六百萬圓ヨリ多カラザル金額ヲ朝鮮政府ヘ惠與シ、此内ヨリ先ヅ三百萬圓ノ貸與金ヲ償還セシメ、殘額ノ内其一半若クハ三分ノ一ヲ王室ニ與ヘ、餘ハ彼ノ政府有益ノ興業費ニ充テシム。卽チ本官ノ考フル所ニテハ、右殘額ヲ基本トシテ彼ノ政府ヲシテ先ヅ京、仁間ノ鐵道ヲ布設セシメナバ(王室ノ分ハ王室ノ持株トシテ出サシム)、大抵其事業ヲ完成シ得ベシ。若シ基本ノ不足ヲ告グル場合ニハ、既成ノ鐵道ナリ又ハ海關稅ヲ抵當トシ、我ガ銀行若クハ會社ヨリ資金ヲ貸與セシムルコト。

第二案　三百萬圓ニ對スル償還期限ハ、元金ヲ三ケ年据置キ利子ヲ拂ヒ、四ケ年目ヨリ年賦ヲ以テ償却セシム。但シ其期限ハ二十ケ年ヨリ多カラズ十五ケ年ヨリ少ナカラザル間ニ於テ取極ムルコト。又之レガ擔保ニハ、釜、仁、元三港ノ海關稅ヲ以テスル外、稅關監督トシテ日本人ヲ聘用セシムルコト。(三百萬圓貸借約定ノ節ハ、釜、仁兩港ノ海關稅ハ、既ニ清商同順恭ト我ガ第一銀行ニ抵當トナリ居リ、他ニ抵當ヲ禁ズルノ約アリシヲ以テ擔保トスルヲ得ザリシモ、今日ニテハ第一銀行ノ方ハ償却濟ニ付擔保トスルヲ得ベシ)

要スルニ第一案ハ三百萬圓ヲ返却セシメ、殘餘ノ一半ヲ王室ニ與ヘ、國王並ニ王妃ヲ心服セシメ、且ツ抱キ込ミ、他ノ一半ヲ以テ朴、魚ノ兩氏ヲシテ安心我ガ政府ニ依賴心ヲ深カラシムルノ手段ニシテ、且ツ他國ノ容喙ヲ惹キ出ス端緒ヲ鈍カラシムルノ手段ニ外ナラズ。第二案ハ第一案ノ如キ充分ナル効能ハ之レナクモ、前約ニ比較スレバ餘程寬厚ナル返却方ニ付、幾分歟壓服ノ感情ヲ薄カラシムルナラン。且ツ又三百萬圓貸與ノ儀ハ、議會ノ協賛ヲ經テ其貸附方法ニ至ツテハ、政府ニ一任シタルヤニ承知致居候。左スレバ右貸付ノ條件、次ノ議會ヘ報告ヲ要スルコトモ可有之、然ルトキハ現在成立ノ約條ハ、前陳ノ通リ到底彼ニ於テ履行シ能ハザル効果覺束ナキモノナレバ、後日議會ノ論難ヲ惹キ起スガ如キコトアリテハ、一論難ノ端ヲ議會ニ與ヘル道理ニ付、此邊モ併セテ御一考相成度候。

鐵道ノ事

條約案ノ如ク實行セシメントスルニハ、尋常ノ手段ニテハ迚テモ終局スルコト難シ。且ツ外觀ニ於テモ朝鮮ヲ獨立セシムルノ名義ヲ以テ我ガ利益ヲ得ルヲ唯一ノ目的トシ、威迫力ニ因ツテ得ルヤノ嫌ヒモアリ、旁タ以テ今日ノ處、京城、釜山間ニ於ケル鐵道ハ差シテ必要トモ見エズ。唯ダ京城、仁川間ハ貨物ノ運搬、旅客ノ往來頻繁ナルヲ以テ、差向必要ヲ感ジ居候間、第一案ニ決議相成候ヘバ、先ヅ京、仁間ニ於ケル鐵道ヲ朝鮮政府ヲシテ起工セシメ、要スル所ノ機器、材料、技術者等ハ、總テ我ニ依賴セシムルヤウ裡面ヨリ手段施シ度存候。

電信ノ事

電信約案ハ鐵道案ヨリモ一層異論多キ由ニ付、是レ亦御希望通リ結局スルコトハ困難至極ニ可有之、依テ左ノ通リ置致度候。

京城ヨリ元山ニ至ル電線ハ素ヨリ朝鮮線ニシテ、仁川ヨリ京城ヲ經テ義州ニ達スル電線モ名義上亦朝鮮線ナリ。（本線ハ最初支那ヨリ資金ヲ借入架設シ、工事監督ハ勿論、其管理モ亦支那ヨリ爲シ居タルニヨリ、支那線ト稱シタレドモ、名義上朝鮮線ナルハ勿論、之ニ對スル負債償却ノ後ハ全ク朝鮮政府ノ所管ニ歸ス可キモノタリ）然ルニ日、清開戰ニ際シ、我ニ於テ之レヲ占用シタルモノナレバ、平和ノ局ヲ結ビタル今日トナリテハ、右兩線ハ無論朝鮮政府ヘ返還スベキモノナルヲ以テ、直ニ之レヲ返還ス可シ。京城、釜山間並ニ京城、仁川間ニ於ケル我ガ軍用電線ハ、成程非常ノ工資ヲ費シタルモノニハ相違ナキモ、現今ノ儘我ニ於テ之レヲ管理センニハ、相應ニ線路保護兵ヲモ要スベク、然ルトキハ彼レ此レ又タ面倒ノ事モ起ルベシ。從ツテ他國ヲシテ容喙ノ地歩ヲ與フルガ如キモノ故、此際擧ゲテ朝鮮政府ヘ惠與セバ、彼ニ於テモ未ダ充分ニ自ラ之レヲ管理スル丈ノ準備モ調ヒ居ラザレバ、要スル所ノ技術者又ハ其管理方ヲモ皆我レニ求ムル樣、是レ亦裡面ヨリ斡旋致度存候。

右鐵道、電信條約案最初御廻送ノ分、不取敢朝鮮外部ヘ提出シ、熟考セシメ置候處、爾後同政府部内ニ於テモ、段々異論有之趣承知致シ、又本官ニ於テモ該案ノ結果ハ、名實共ニ多少朝鮮ノ獨立ヲ損傷シ、從ツテ他國ヨリ批難ノ嫌ヒモ有之候ニ付、彼レ此レ斟酌ノ上再次鄙見申出置候義モ有之候處、時態變更ノ今日トナリテハ、斷然ノ處置ヲ爲スコト急要ト認メ、前陳ノ通リ更ニ鄙見申述ベタル次第ニ有之候。要スルニ此後ノ對韓策ハ、先ヅ恩惠ヲ以テ彼ヲ心服セシ

メ、自然ニ我ヲ恃ムニ至ル手段ヲ取ルコト最モ得策ニ可有之ト相信候。

京城守備兵ノ事

朝鮮現今ノ有様ニテハ、民亂其他不測ノ警戒ニ備ヘンガ爲メ、我ガ兵ノ駐屯ヲ要スルハ勿論ノ儀ニ存候得共、現在京城守備兵ハ後備ナルヲ以テ、到底常備ト入替ヲ要スベク、然ルニ引續キ守備兵ヲ駐屯セシムルコトハ、外見上干繫モ有之儀ニ付、先ヅ朝鮮政府ノ要否ヲ聽キ、同政府ニ於テ是非共入用トノコトナレバ、大君主ノ命ヲ受ケタル上、外部大臣ヲ經テ我ガ政府ハ公文（公文中ニハ大君主ノ命ヲ受ケ依賴云々ノ文字明記ヲ要ス）ヲ以テ依賴スル様致サセ、後日他國ヨリ容喙ノ場合ニ十分答辯ノ餘地ヲ取置キ候方可然ト存ジ、右等ニ付熟ト朴内部大臣ノ心意ヲ聽キ、彌ヨ必要ナレバ所要ノ兵數及ビ駐屯ノ場所等モ内談ノ上通報候様、此程杉村代理公使ヘ申通ジ置キ候。尤モ本官ノ見込ニテハ、所要ノ兵數ハ平時ノ二大隊モ有之候得バ先ヅ充分ト相考候。

渡韓者取締ノ事

昨年已來各種ノ日本人陸續渡韓シ、種々ノ目論ヲ實行セントシ、動モスレバ獨立扶植ノ恩義ヲ題シ、戰勝ノ餘光ヲ藉リ以テ種々ノ難題ヲ持掛ケ、様々ノ注文ヲ爲スガ故、朝鮮官民共ニ甚ダ迷惑シ、果テハ日本人ニ對シ恐怖ヲ懷クノ情勢ヲ生ゼリ。近着ノ京城來電ニヨレバ、過グル十五日、櫻間某兇器ヲ携帶、朴内部大臣ノ邸ニ侵入暴行シ、又同二十一日相馬某金外部大臣ノ通行ヲ見掛ケ其乘輿ヲ押止メ甚ダシキ無禮ヲ加ヘ、此等ノ爲メ凡テノ朝鮮人我ガ人民ニ對シ大ニ嫌惡ノ意ヲ喚ビ起シタルノミナラズ、豫ネテ日本人ノ擧動ヲ見テ專横ナリトシタルモノヲシテ著シク厭嫌ノ度ヲ高メシメタリ。

商界ノ有様亦然リ。開戰已來支那商人ハ擧ゲテ歸國セリ。我ガ商人ニシテ彼等ノ得意ヲ占ムル實ニ此時ニアリシモ、奈何セン我ガ商人ハ親和ト實直トヲ以テ商業ニ從事スルモノナク、商界ノ强敵タル支那人ノ不在ヲ奇貨トシ、威迫的ノ商業ヲナシ、戰爭前ヨリモ一層朝鮮人ヲ酷遇スルノ觀アルハ實ニ慨嘆ノ外ナシ。

今ヤ支那商人ハ續々又歸來セリ。彼等ハ朝鮮人ト歴史上ノ親和力ヲ有スル上、舖商ニセヨ、行商ニセヨ、團結力ト忍耐ト儉約トヲ以テ從事スル故、商戰上彼等ノ爲メ敗ヲ取ルハ、昨年七月前ヨリ幾層ヲ加フルニ至ラントス。

從來日本人ノ朝鮮人ニ對スル種々壓迫手段ヲ以テシ、平和ノ今日トナリテハ殊更人足共ニ至

ルマデ、東學黨ハ我レ之レヲ退治セリ、獨立ハ我レ之レヲ爲サシメタリト、氣焰ヲ以テ彼ヲ威壓スルニヨリ、彼等嫌惡ノ意ヲ益々深カラシメ、尙ホ支那人ニ對スル亦輕蔑暴行ヲ以テスルノ情勢ハ日一日ヨリ甚シ。此レ支那人ト朝鮮人トノ間ニ有スル歷史上ノ親和力ヲシテ一層增加セシムルノ行爲ニシテ、將來日本人ハ愈ヨ信用ヲ失シ、終ヒニ朝鮮官民共ニ我ガ政府並ニ人民ヲ嫌惡スルニ至ルハ必然タリ。

又近來ノ如ク各種ノ日本人商界ヲ跋扈シ、加フルニ一方ニハ料理、茶屋、芝居、輕業ノ如キ贅澤物ノ數多ナルニ從ヒ、亦我ガ商人等ノ驕奢ヲ增長スル故ニ、我ガ物品モ高價ニ賣却セザルヲ得ザルナリ。故ニ此際內地ニ於テ渡韓規則ヲ制定相成リ、渡韓者ヲ嚴重ニ取締ラザレバ、今後如何ナル珍事ヲ生ズルヤモ料リ難キニ付、至急取締法ヲ設ケラレ、將又我ガ領事ニ行政上ノ權力ヲ充分ニ與ヘラル、樣致度候。

木浦及ビ鎭南浦居留地ノ事

今度新開スベキ木浦及ビ鎭南浦ノ兩所ニ特別日本居留地設定ノ儀ニ付テハ、兼ネテ御訓令ノ趣モ有之候處、右兩所トモ地區甚ダ狹隘ニシテ、我ガ居留地ヲ特設セントセバ、英、露、佛、獨、米、淸、我國ヲ併セテ七區ノ居留地ヲ區畫セザルヲ得ズ。然ルニ地勢狹隘ノ地區ヲ七分セバ、各其ノ保ツ所ハ一小區ニ過ギズ。目下朝鮮貿易ニ從來スルモノ、日本人其多數ヲ占メ居ルコトハ、釜、仁、元三港ニ徵シ顯然タレバ、右新開二港ヘノ通商者モ亦我ガ商人並ニ淸國人民多數ヲ占ムルヤ必然ナリ。左レバ狹小ナル地區忽チ充滿シテ不足ヲ告ゲ、他國ニ屬スル居留地內ニ住居セントスルモ之レヲ得ザルニ至ラン。將來各國各居留地制度ヲ設クルニ至レバ、第一警察上ニ於ケル各自ノ制度ヲ立テ、其結果矛盾ヲ生ズルハ必然ナラン。又費用上居留地ノ負擔ニ付テモ大ナル不利益アルベシ。斯クテハ折角我ガ商民ノ便益ヲ得ン爲メ居留地ヲ特設シタル結果ハ、反テ不便利ノ結果ヲ來ス場合ニ立至ル可クト存候。故ニ寧ロ該地區ヲ擧ゲテ各國共同居留地ト爲シ、「ミニシツパル、ユニオンシユール」卽チ居留地會制度ヲ組織セバ、將來ノ爲メ反ツテ我ガ國民ノ便益ト相考ヘ候。將又共同居留地設定ニ付テハ、各國人民需要ニ應ジ、地區競賣方法ニ約定シ、尤モ一人若クハ一商店ノ名義ヲ以テ多クノ地區ヲ占買ノ弊、仁川等ニ現在候ニ付此等弊害ヲ防止センコト最モ必要ト相認候故、大略別紙方案ノ通リ取リ極メ度存候。

右ハ目下朝鮮政府勅令ヲ以テ開港ヲ決行スルコトニ內定致居ル趣ニ付、至急何分ノ御決定有之度候。

法制局參事官石塚英藏召還ノ事

石塚參事官ハ朝鮮ヘ出張已來、同國內閣ノ依囑ヲ受ケシメ、官制其他法文制定ニ從事シ、勵精盡職今ヤ改革ニ必要ナル諸般ノ法文モ制定發布ニ至リ、且ツ少シク事情モ有之候ヘバ、歸朝ヲ命ゼラレ候樣致度候。

陸軍砲兵中佐楠瀨幸彥ノ訓練事務囑托ヲ解ク事

京城公使館付楠瀨砲兵中佐ハ、特ニ朝鮮軍務部ノ依囑ニヨリ、參謀本部ノ認許ヲ得テ韓兵訓練ノ事ニ從事シ、親切ニ訓練、今ヤ新式訓練大隊ヲ編成シ得ルニ至レリ。然ルニ同官ハ公使館附ニモ有之、前ニ軍部改革ノ際他ニ適當ノモノナキ爲メ、參謀本部ヘ紹介ノ上、一時其囑托ニ應ゼシメタルモノナレバ、一先ヅ右囑托ヲ止メ候樣、其筋ヨリ通達相成樣致度候。

以上ノ諸條件、可成速カニ御決定ノ上、本官ノ歸任ヲ要セラレ候ハバ、何時ニテモ歸任可致、又新任公使派遣ノ御都合ニ候得バ、本官ノ希望ハ公使其人ノ細君ノ交際向等ニ熟練ナル人物ヲ特ニ御人撰相成候樣致度、尙ホ又適任者內定ノ上ハ御發表前本官一應歸任致シ、從前ノ行掛リ及ビ將來ノ措置等ニ付、熟ト大君主並ニ王妃ヘ奏聞ヲ遂ゲ、且ツ各大臣ノ居合、新任公使ノ結ビ付ケ等ニ付テモ、夫々遺憾ナキ樣致度存候間、此ノ義モ御一考相成度候。

明治二十八年七月一日

特命全權公使　伯爵　井上　馨

外務大臣臨時代理　侯爵　西園寺公望殿

（別紙）

木浦、大同江ノ兩港トモ地區狹隘ニシテ特別ナル日本居留地ヲ設定スベキ見込ニ從ヒ、茲ニ其方案ヲ立ツルコト左ノ如シ。

木浦、大同江新開二港居留地取極要項

一、二港トモ何レノ國ニ論ナク單獨居留地ヲ設クルノ制ヲ止メ、廣ク區域ヲ定メ唯一ノ各

國商民共同居留地ヲ設定スルコト。

二、居留地ト爲スベキ地區ハ一旦朝鮮政府ニテ之レヲ買上ゲ道路宅地ノ區畫ヲ立テ、宅地等級ヲ定メ競賣法ニ從テ之レヲ賣渡スコト。

三、道路宅地並ニ堤岸埠頭ニ關スル取極メ並ニ維持ハ左ノ方法ニ從フ可シ。

道路宅地ノ區畫並ニ宅地ノ等級ハ朝鮮當該官吏ト各國領事ト協議シテ之レヲ定ムルコト。

埠頭堤岸ハ朝鮮政府ノ費用ヲ以テ建造スルコト、居留地ノ道路、溝渠、橋梁ハ朝鮮政府ノ費用ヲ以テ之レヲ建設ス、但シ之レヲ修理洒掃スルハ居留地積立金ヲ以テ支辨スルコト。

居留地內街燈ノ建造修理並ニ居留地取締費用ハ居留地積立金ヲ以テ支辨スルコト。

右居留地積立金不足ナル時ハ更ニ居留地人民ヨリ法ヲ立テ費金ヲ徵收スルコト。

宅地競賣代價並ニ每年徵收セル實地稅ノ若干分ヲ以テ朝鮮政府ヘ納メ、其餘リハ居留地積立金ト爲スコト。

四、宅地競賣ハ左ノ方法ニ從フ可シ。

一人若クハ一商店ノ名義ヲ以テ二區又ハ三區以上ヲ買受クルヲ得ザルコト。

宅地ヲ競買シタル者ハ一ケ年內ニ於テ營業スベキ家屋又ハ住居スベキ家屋ヲ建築スベキコト。

若シ同期限內ニ右家屋ヲ建築スルコト能ハザルトキハ更ニ競買元價百分ノ十ニ相當スル金額ヲ納ムレバ六ケ月間ノ延期ヲ許スコト。

前項ノ期限內ニ相當ノ家屋ヲ建築セザルトキハ當該領事ノ手ヲ經テ宅地ヲ引上グ可シ

但シ此場合ニハ當人既納ノ宅地原價十分ノ二並ニ延期納金（若シ之レアラバ）ヲ控除シ其金額ヲ當人ニ返還スベキ事。

五、居留地ノ取締リ規則ヲ設ケ事務ヲ處理スル爲メ仁川港各國居留地ノ例ニ倣ヒ、朝鮮官吏各國領事並ニ地主ヨリ撰擧シタル委員ヲ以テ組織シタル居留會ヲ設クベシ。

韓官ト井上公使トノ交情

二十八年七月三日京城發杉村代理公使ノ電報ニ因レバ、本日內謁見遂ゲ、井上公使御傳言ノ趣ヲ具サニ奏上シタル處、國王ニハ公使ガ告別ノ際述ベシ眞實ナル忠告ハ明カニ記憶シ居ル旨ヲ仰セラレ、並ニ國王、王妃トモ公使ノ早ク歸任相成ルコトヲ渴望スル旨御沙汰アリタリ。又公使ノ献上物ニ付キ王妃、世子トモ深ク謝詞相申述ラレ、全體御機嫌ヨキ方ナリシ。過日來宮中ト內閣ノ間ニ起リタル衝突ハ、內閣ニテ手ヲ緩メタル爲メ一ト先ヅ平穩ニ復シ、國王ニモ安堵セラレタル樣子ナリ。義和君ノ出發日子國王ヨリ確カナル御返答ナキモ、同君自カラ急ガル由ニテ、本日人ヲ派シテ船便ヲ問合セラレタリ。

朝鮮事變前後電報

（明治二十七、八年中ノ往復電報中重要ナルモノヲ一括セルモノニシテ、電文ノ內容ヲ要約セルモノナリ）

（明治二十八年十月二日午前九時廿八分京城發）

大本營　川上中將　　京城　楠瀨中佐

舊來王宮政事ニ復スルノ目的ヲ以テ、宮內協辨、警務使等主動トナリ、日本派ノモノヲ排斥スルノ策ヲ施セリ。依テ安駉壽、金嘉鎭等ハ昨日辭表ヲ出セリ。宮內協辨李範晋ハ舊來魯西亞ニ依リテ國ヲ立ツルノ大贊成者ト聞ク。

（明治二十八年十月三日午前八時十五分發）

西園寺大臣　　三浦公使

左ノ事ヲ井上伯ニ傳ヘラレタシ。

亞米利加人雲山採鑛約定ニヨリ、「カエヒ」等ノ周旋ニ依リテ約定出來タル事確カニ分リタリ。右ニ付獨逸領事ガ外部大臣ニ嚴談ニ及ビタルモ、自今ノ所解約ノ都合ニ至リ難シト聞ケリ。

（八日午前六時三十二分京城發）

明治二十八年十月八日　　大本營　陸軍參謀部

本朝左ノ電報朝鮮國公使館附新納海軍少佐ヨリ伊東海軍中將ノ許ニ到達セリ。

只今訓練隊大院君ヲ戴キ吶喊シテ大闕ニ打チ入レリ。

伊東中將　　新納

（八日午前八時五十分京城發）

大本營　參謀總長　　楠瀨中佐

今朝五時大院君ハ君側ノ奸ヲ除クト稱ヘ、訓練隊二大隊ヲ率キテ王宮ニ入リ、些少ノ抗抵ノ後君側ニ至レリ。時ニ五時五十分、又三浦公使ハ六時五分ニ王闕ニ入レリ。訓練隊長洪啓薰ハ戰死セリト云フ。

（明治二十八年十月八日午後三時二十五分京城發）

參謀總長　　楠瀨中佐

本朝暴發ノ原因ハ、訓練隊解散ノ內決ニ基ク、其解散ヲ理由トシテ特ニ巡査ト鬪爭ヲ爲サシムルノ手段ヲ取リ、昨夜ノ如キ特ニ巡査ヲ訓練兵ニ仕立テ、夜間警務廳ヲ襲ハシメ、又巡査ヲシテ兵卒ニ不日解散ノコトナド放言セシメタルニ因ル。

第二訓練隊ハ遂ニ今朝兵營ヲ脫シ、孔德里ニ至リ大院君ヲ起シテ宮闕ニ赴ク、此間第一訓練隊ハ宮闕ノ諸門ヲ守備セリ。第二訓練隊ト宮中ノ侍衞隊トノ間ニ衝突ヲ惹起シタルモ、僅カニ二三十發ニテ鎭定セリ。此際我守備隊ハ國王ノ召ニヨリ鎭撫ニ力メタルモ死傷ナシ。

韓人ノ死者訓練隊長ト婦人二、兵卒二ハ確カナリ。國王、世子ハ安穩、三浦公使ハ午後一時歸館、露國公使ハ今朝我ガ公使ニ續キ入闕セリ、目下至テ靜謐ナリ。

（明治二十八年十月八日午後八時五分發）

井上公使　　杉村書記官

日本兵ハ訓練隊ヲ敎唆シタル形跡ヲ見ズ、顧問官中岡本ハ多少大院君ト關係ヲ免レズ。

大院君ヨリハ再三密使ヲ送リシ事アリ、公使ハ拒ンデ受ケラレズ、今朝公使ノ入闕ハ國王ヨリノ急使ニテ鎮撫方依頼アリシニ因レリ。

（明治二十八年十月九日午前九時發）

井上公使　三浦公使

我守備隊ハ豫テ王宮護衛ノ依頼アリシ外ニモ殊ニ當日依頼アリタリ。我守備隊ハ何レモ荷擔セズ、只管相當鎮定ニ盡力セリ。大院君ハ將來宮中ノ事務ヲ整理スル迄ニテ、政務ハ金宏集、魚允中、金允植等ニ一任シ、一切關係セザル旨ヲ誓ヘリ。侍衛隊ハ散亂シタルニ依リ當分訓練隊ニテ王宮ヲ警衛セリ。

（明治二十八年十月八日午後十一時三十分接）

其後宮中ノ形勢ハ益々鎮靜ニ歸セシニ付キ、同九時頃鎮撫ノ爲メ出張シタル我守備兵ハ悉皆引上ゲ歸營セシメタリ。其後宮中ノ守備ハ國王ノ命ニ依リ訓練隊ヲ以テ侍衛隊ニ替ヘラレタリ。同八時過ギ米、露ノ二公使ハ御機嫌伺ヒトシテ參内シ、同十一時過ギ國王、大院君同席ニテ謁見ヲ許サレ、終リテ兩公使ハ本官ヲ控所ニ尋ネタリ。但シ兩公使ハ參内前本官ヲ尋ネタル趣ナルモ、本官ハ已ニ出門後ナルニ付キ面會セズ。金總理、金外務、安軍部ノミ大臣入闕シ、殊ニ金總理ト外務ハ善後方案ニハ親シク御相談アリシ模様ナリ。李載冕ハ宮内大臣ニ、金宗漢ハ同協辨ニ、趙義淵ハ警務使ニ任ゼラレ、其他多少更迭アルベキ様子ナルモ詳ラカナラズ。大院君ハ今後宮内事務ニ參與セラルヽ迄ニテ、政務ニハ一切干渉セラレザルコトニ協定セラレ、其趣意ハ詔勅ニテ公布セラルヽ運ビナリト。本官ハ十一時頃金總理ト金外務ニ面會シ、善後方案ニ付意見ヲ叩キ勸告ヲ與ヘタル後同十二時頃歸館セリ。（京城、三浦）

事變前ノ朝鮮國内閣員及ビ其他ノ高等官

内閣總理大臣	金宏集
内部大臣	朴定陽
外部大臣	金允植
度支部大臣	沈相薫
軍部大臣	安駉壽
法部大臣	徐光範
學部大臣	李完用

農商工部大臣　李範晋
宮內府大臣　李耕植
中樞院議長　魚允中
義州觀察使　兪吉濬

以上ノ調査ハ在京城帝國公使ノ電報及ビ朝鮮官報ニ據ル。

二十八年十月一日依願免官

事變後ノ朝鮮國內閣員及ビ其他ノ高等官

內閣總理大臣　金宏集
外部大臣　金允植
內部大臣署理事務　內務協辨　兪吉濬
度支部大臣　魚允中
軍部大臣　趙義淵
法部大臣署理事務　法部協辨　張博
學部大臣　徐光範
農商工部大臣署理事務　農商工部協辨　鄭秉夏
宮內府大臣　李載冕
中樞院議長　朴定陽
中樞院一等議官　安駉壽

以上ノ調査ハ在京城帝國公使ノ電報及ビ朝鮮官報ニ依ル。

（明治二十八年十月十五日午後五時接）

去ル八日ノ事變以來宮中、政府トモ總テ日本方トナリ、總理大臣以下沈着シテ平常ノ通リ事務ヲ取扱ヒ居レリ。又大院君ハ毫モ政治ニ關係セズ、昨日各國使臣ヨリ外部大臣ニ向ヒ左ノ三件ヲ照會セリ。

一、去ル八日ノ變況ニ付各使臣ノ聞ク所ハ朝鮮政府ノ云フ所ト異ナルコト。

二、變亂ノ首謀者以下ヲ嚴重ニ處分スルヲ望ムコト。

三、廢妃ノ詔勅ハ國王ノ眞意ニ出デタルモノト認メ難キコト。

尤モ文意ハ穩和ニシテ一ツモ日本人ニ惡意ヲ及ボサズ。之ニ對シテハ近日朝鮮政府ヨリ必ラズ相當ノ返答ヲナスベシ。故ニ今日ノ形勢ヲ持續シテ現政府ヲ助クル時ハ、將來必ラズ豫期ノ如キ好結果ヲ得ベキ見込ミナレ共、萬一政府ハ其方針ヲ變ゼラレ、現政府ノ人々ニ危懼ヲ懷カ

シメ、孤立ノ姿ニ陷ラシムルトキハ、忽チ瓦解シテ拾收スベカラザルニ至ラントスルノ恐レアリ。（京城、三浦）

（明治二十八年十月十六日午前十一時四十七分發）

西園寺大臣　三浦公使

王妃撰定ノ手續擧行アルベキ旨昨日宮內大臣ヨリ布達セリ。朝鮮政府ハ日々鞏固ニ赴キ市中至テ平穩ナリ。義和宮ハ去ル十四日英、佛、獨、伊、墺六ヶ國ノ特派大使ニ任ゼラレ、李埈鎔ハ今明日中日本留學ヲ命ゼラルベシ。徐光範ハ學部大臣ニ專任セラレ、法部協辨張博ハ大臣代理ヲ命ゼラレタリ。高永喜ハ日本駐在公使ヲ免ゼラレ、金嘉鎭ハ其後ヲ繼グベシトノ說アリ。

（明治二十八年十月十三日）

平遠艦長ヘ命令　大本營

朝鮮變動ノ結果ニ依リ、露國政府ハ艦隊ヲ仁川ニ集合スルノ確報ニ接シ、我政府ハ彼我衝突ヲ避クルノ廟議ニ決セリ。依ツテ其艦ハ旅順口回航ヲ止メ直ニ佐世保ヘ回航スベシ。

（明治二十八年十月十七日前七時十五分京城發）

西鄕海軍大臣　伊集院大佐

下官等昨日着本地ノ事情ニ關シ、新納、ケイロ口述ノ大意ヲ不取敢報告ス。

一、去ル七日夜岡本外壯士三十餘名（內、警察員數名アリ）午後十一時龍山ニ集合シ、翌八日午前零時ヨリ孔德里大院君ノ別莊ニ赴ケリ。

大院君ハ「グゼンジュ」外二名ヲ以テ之ヲ途ニ迎フ。壯士ハ別莊ニ至ルヤ、監督巡査ヲ押ヘ大院君ニ面會ス。午前二時大院君ハ壯士等ヲ率キ出發シ護衞スベキ第二訓練隊ニ會センガ爲メ西門外ニ一時間餘待チ合セリ。同大隊長「ウハンセン」ハ撰拔隊三〇名ヲ率キ、先鋒ニ立チ江華門ニ向フ、此時我守備隊モ暗ニ保護ス。

午前四時過ギ大院君ハ恙無ク江華門ヨリ進入ス。護衞ノ訓練隊及ビ我守備隊ハ後ヨリ門ヲ入ラントスル時、訓練隊聯隊長「コウケイクン」ハ第一訓練隊ノ一部ヲ率キ之ヲ防ガンガ爲メ突然側面ヨリ發砲シタレドモ忽チ擊破セラレ、「コウケイクン」モ爰ニ斃レタリ。

大院君ハ先鋒ノ撰拔兵ト壯士等ヲ率キ王宮ニ至リ國王ニ面會ス。

二、壯士ノ主謀者ハ岡本ニシテ、次ハ韓城新聞記者國友某ナリ。此等ノ壯士ハ領事館ニテ一

應取調ノ上十一名ハ目下謹慎シテ處分ヲ待テリ。又顧問官ノ重ナル者ハ深ク立入ラザル様子ナリ。

三、目下京城ハ平穩、人民ハ此ノ事變ニ付特ニ劇動ノ兆ナシ。

四、各國使臣等ハ事變後一二度會合シ何事ヲカ議シタリ。

五、以上ハ新納ノ口述ニ係ル概要ニテ、同官ハ全ク此事變ニ關係ナシト信ズ。

（明治二十八年十月十七日午後八時十分發）

西園寺大臣　　小村政務局長

本官露國公使ヲ訪問シ、今回ノ事件ニツキテ日本政府ハ大ニ驚愕セシ旨ヲ申述ベタリ。露國公使ハ此事件ニ日本政府ハ更ニ關係シ居ラザルモノト固ク信ズル旨ヲ明言セリ。守備隊ハ全ク大院君ヲ擁シテ王宮ニ入リシハ事實ナレ共、同君ハ前ヨリ「フノイン」ニクミシ居リシヤ否ヤ頗ル判斷ニ苦シムト云ヘリ。「コクレル」ノ言フ所ニ依レバ、京城在留一般ノ外國人ハ大院君ガ日本壯士ヲ使嗾シテ王宮ニ入リタレド、同君ヲ守備隊ガ護衛シタルハ不審ニ堪ヘズト云ヒ居ル由。

（明治二十八年十月十八日午後一時五分京城發）

參謀本部　川上中將　　京城　田村歩兵中佐

公使歸朝ノ日ハ未ダ極ラズ。

今日岡本初メ壯士ハ退韓ヲ命ゼラル、其人員約四拾人。

退韓者ノ乘船ヲ待テ公使館員、領事館員ノ始末ヲツケル筈、之レト同時ニ守備隊ノ中隊長以上ノモノニ歸朝ヲ命ズルツモリ、其レマデニハ多分宇佐川モ着クナラン。

安藤檢事ハ敦賀丸ニテ明十九日ノ夜出帆シテ歸朝ス。

（明治二十八年十月十八日午後二時十分發）

外務大臣　　小村

公使館、領事館員ハ關係者ニ歸朝ヲ命ゼラレタル處、本官今直ニ之ヲ實行シテハ壯士等不穩ノ擧動ニ出デ、左スルトキハ露國ニ出兵ノ口實ヲ與フルモノナレバ、今明日中ニ官吏以外ノ關係者ヲ退韓セシメ、然ル後、館員等ノ歸朝ハ武官ノ關係者ト共ニ實行スル事ニ田村中佐トモ協議シ置キタリ。

（明治二十八年十月十八日午後十一時四十分着）

外務大臣　内田

小村局長ト協議ノ上、今回ノ事變ニ關係セシ本邦人中岡本柳之助等二十五名及ビ此度ノ事變ニ關係ナキモ今後危險ノ恐レアルモノ數名ニ對シ只今退韓ヲ命令セリ。尚ホ一兩日中ニ退韓ヲ命ズルモノ數名アリ、右ハ多分明日仁川發筑後川丸ニテ歸朝ノ筈ナリ。

（明治二十八年十月二十日午後十二時四十五分京城發）

川上中將　田村中佐

三浦公使ハ今朝出發セリ、公使ハ二十三日ニ來ル尾張丸ニテ歸ヘル豫定。公使ハ李埈鎔ヲ連レ歸ル由、併シ未ダ出發セズ。退韓者モ護衛ヲ付ケルハ穩カナラズト思フ。

（明治二十八年十月二十日午後十二時二十五分發）

西園寺大臣　内田領事

今回ノ事變ニ關セシ退韓者ハ殆ンド全ク筑後川丸ニテ歸朝スル筈ナリシガ、安藤檢事正出發後、彼等ハ種々ノ疑惑ヲ起シ、半數以上ハ當分出發ヲ見合スル事ニ相成リタリ。然ルニ此度退韓者ヲ輸送スル爲メ態々筑後川丸ヲ御用船トシ、普通ノ荷物、旅客ノ搭載ヲ差止メ、且ツ兵隊ヲ以テ乘リ組ミ、退韓者ヲ護衛セシムル趣ナレ共、彼ノ如ク致シテハ益々彼等ノ疑惑ヲ增シ、殘留セル退韓者間ニ如何ナル不都合ヲ生ズルヤモ計ラレズ。御承知ノ通リ退韓者ハ在留禁止ノ命ヲ受ケタル日ヨリ十五日以内ニ出發ノ制規ナルニ依リ、其間ハ小官ニ於テモ之レニ對シ强ヒテ退去セシムル事ヲ得ズ。就テハ此際力メテ其疑惑ヲ打消シ、可成速カニ退去スル樣誘導スル事肝要ト認ムルニ依リ、筑後川丸ノ御用船タル事、及ビ兵隊ノ護衛ノ義ハ至急御取消シ相成タシ。右小村公使ト協議ノ上上申ス。筑後川丸乘組ミ退韓者ノ氏名ハ橋口ヨリ具報ノ筈ナリ。

（明治二十八年十月二十日午後七時十五分發）

小村公使　西園寺

内田領事ヨリノ電信受取リタリ。御用船ヲ解キ兵隊ノ護衛ヲ止ムレバ屹度退韓ノ目的ヲ達スル事ヲ保證セバ、更ニ要求アレバ其地ノ都合次第ニ其筋ヨリ命令ヲ下スベシ。退韓者ヲシテ其地ヲ去ラシムル事ハ目下ノ急務ナリ。縱令退韓處分ニ關スル勅令中、十五日以内ノ條項ニ違フ

モ、說諭ノ上一同平穩ニ退韓セシムル事ヲ得バ可ナリ。然ラザレバ陸海軍派出ノ武官ト協議ノ上兵力ヲ用フルモ可ナリ。依テ其手段ヲ定メ、一面ニハ着手シ、一面ニハ本大臣ヘ電報スベシ。

（明治二十八年十月二十一日午前三時三十分發）

西園寺大臣　　京城小村公使

退韓者ノ內廿一名ハ既ニ仁川ニ赴キタルヲ以テ、既ニ橋口ヨリ事實（ヨアヤアイズメ）(?)悉皆筑後川丸ニ乘船セシメ、兵隊ノ護衛ヲ附シ、御用船トシテ明朝宇品ヘ向ケ出帆ノ事取計ヒタリ。尙ホ今回ノ事變ニ關係セシ退韓者ニシテ當國政府ニ殘リ居ルモノハ一名ヲ除ク外同關係者ニ非ラザルヲ以テ、右ハ尾張丸ニテ悉ク歸朝セシムベシ。

（明治二十八年十月二十一日午後五時二十五分仁川發）

寺內少將　　仁川高井兵站監

筑後川丸ハ今更商船ノ名義ニナスハ反テ不可ナルヲ以テ、矢張リ官ノ借上ゲトナセリ。又退韓者ノ衛兵ハ特ニ附セズ、憲兵士官一名、上等兵二名、步兵軍曹以下八名歸國ノ名義ヲ以テ監視警戒ノ爲メ乘船セシムル事トセリ。退韓者ノ中、所持セル刀劍類八本ハ船內倉庫ニ納メシメタリ。若シ要スレバ宇品着ノ上護身ノ具取リ上ゲノコトハ該地通信部ヘ御下命ヲ望ム。

退韓者岡本柳之助妻子三名、從者二名止ムヲ得ザル事情アリ、同船ヲ許サレ度旨橋口領事ノ請求ニ依リ何レモ乘船ヲ許シタリ。

此船ハ今午後五時出帆宇品ニ直航セシム。

三浦公使昨日下仁、楠瀨中佐ト共ニ尾張丸ニテ歸朝ノ豫定ナリ。

乘船者人員ハ憲兵病人ノ外柴四郎退韓者廿四名眷族者五名ナリ、其人名ハ領事館ヨリ外務省ヘ電報スルヲ以テ略ス、宇品ヘハ人名書ヲ送レリ。

（明治二十八年十月二十一日午後七時十五分發）

西園寺外務大臣　　仁川橋口領事

此度ノ事變ニ關係シタル退韓者ノ中、岡本、國友、廣田、本山、澤村、片野、隈部、佐藤、菊地、佐々木、前田、イエイリ、牛島、松村、月成、富士、武田、吉田、大崎、山田、鈴木ノ二十一名及ビ關係ナキ退韓者鈴木、高橋、大迫ノ三名、並ニ柴四郎ハ本日午後五時筑後川丸ニテ宇品ヘ向ケ出發セリ。

（明治二十八年十月二十一日午後十一時十一分發）

小村公使　　西園寺大臣

安達謙藏、淺山顯三、內務部顧員ナル澁谷加藤次、柴四郎、警務廳囑托醫師ナル柴四郎ノ弟及ビ其他今回ノ事變關係者ハ速カニ退韓處分ヲ要スルニ付、內田領事ヘ其旨至急訓令スベシ。但シ柴四郎ニ於テハ特別ノ事情アリテ退韓ヲ命ゼズ歸朝スト內田領事ノ報告アリ。

（明治二十八年十月二十二日發）

西園寺外務大臣　　在米栗野公使

本使ハ貴電中一部分ノ要領ヲ內密ニ國務大臣ニ示シタルニ、同大臣曰ク、有罪者ヲ相當ニ處罰シ法ヲ正ダサバ、日本政府ハ全ク批難ヲ免カルベシ。同大臣ハ朝鮮現政府承認云々ニ關シ在韓外國使臣ノ執リタル措置ハ笑止ト云ヘリ。

（明治二十八年十月二十二日午後三時五十五分發）

西園寺大臣　　內田領事

只今熊本縣人安達謙藏、澁谷加藤次、福島縣人佐瀨クマテツノ三名ニ對シ退韓ヲ命ジ、尙ホ今回ノ事變ニ關係ナキモ新潟縣人金子六藏ニ對シ退韓ヲ命ゼリ。同人等ハ兩三日中當地出發ノ筈、淺山顯藏ハ目下仁川ニ赴キ居ルヲ以テ同人ハ橋口領事ニ囑托シテ退韓ヲ命ズルコトニ取計ヒタリ。

（明治二十八年十月二十三日午前十一時三十分發）

寺內少將　　仁川高井大佐

尾張丸ニ三浦公使、楠瀨中佐並ニ從者七、朝鮮國士官五、此士官ハ陛下ノ命ニ依リ日本ニ留學スルモノニシテ、事變前ヨリ仁川ニ居リシ者ナリ。此外退韓者三名ニ憲兵下士一、步兵卒一ヲ同船セシメ、今午後十二時二十分出帆宇品ニ直航セリ。

（明治二十八年十月二十五日午後一時十五分發）

司法大臣　　廣島野崎檢事長

一應訊問ヲ終ヘタリ。其陳述大要左ノ如シ。

岡本ハ大院君ヨリ君側ヲ淸ムル爲メ勅令ニ依リ參內スルニ付、同行ノ依賴ヲ受ケ、同

君ニ從ヒ入闕シタルモ暴擧殺害等ニハ關係ナシ。

柴四郎ハ少シモ關係ナシトテ何事モ言ハズ。

國友ハ大院君ノ依賴ヲ受ケ同志ノ者ヲ集メ、同君ヲ護シ入闕シタルノミトテ其他ハ言ハズ、其他ノ被告モ王宮ニ入リタリトノ陳述ノミニテ暴行殺害並ニ公使館員軍隊等ニ關スル陳述ヲナスモノナシ。

（明治二十八年十月二十　日午　時　分發）

西園寺外務大臣　　內田領事

安達ハ孔德里ヨリ大院君ニ從ヒ王宮ニ入リ、澁谷ハ孔德里ニ在ラザリシト稱フモ、同所ニ行キタル橫尾巡査ハ現ニ澁谷ガ行キ居リシ事ヲ目擊セリト云フ。又佐瀨ト警務廳醫師トハ同一人ニシテ同人ハ孔德里ニ行キタル形跡ハ判然セザルモ王宮ニ入リタルニハ相違ナシ。尤モ右三人ガ王宮ニ於テ如何ナル事ヲ働キタルヤハ未ダ判然セズ。安達、佐瀨ハ最初ヨリ退韓ヲ命ズベキ筈ナリシモ、特別ノ事情アリシ爲メ小村公使ト一時協議ノ上、之ヲ猶豫セシモノナリ。

（明治二十八年十月二十七日午後十二時三十分廣島發）

司法大臣　　野崎檢事長

三浦陳述ノ大要左ノ如シ。

日本人等大院君ヲ護リ入闕ノ事ヲ豫知シ之ヲ默許セシニハ相違ナシ。之レガ爲メ震襟ヲ惱マシ奉ルハ恐レ入ルモ、彼我兩國ノ爲メ此擧ノ止ムヲ得ザルコトヲ信ジタリ。若シ予ヲシテ內閣諸公ニ面陳セシメバ大ニ論ズル處アラントス。

三浦ハ事件ニ關スル一切ノ秘密書類ヲ所持セリ。

（明治二十八年十月二十六日午後三時五十五分發）

西園寺大臣　　小村公使

本官ハ朝鮮政府ニ向ヒ此際皇帝ノ尊號ヲ奉リ、或ハ特派公使ヲ歐洲ヘ派遣スルガ如キ世ノ注意ヲ引クコトハ一切避クベキ旨ヲ勸告シ、朝鮮政府ニ於テモ本官ノ勸告ニ從ヒ居リタル處、今回俄ニ議ヲ變ジ、義和宮ヲシテ出發セシメ、尙ホ昨日閣議ヲ以テ奉任式ヲ擧行スベキ都合ニ決定セリ。右ニ付キ明夜英、露、米ノ各國公使本官ヲ訪ヒ、右奉任式ヲ止メ吳レル樣相談シタルニ因リ、趙義淵及ビ兪吉濬ヲ招キ懇々勸告ヲ爲シタル結果トシテ、明夜半再ビ閣議ヲ開キ前議ヲ飜シテ奉任式ヲ行ハザルコトトナセリ。朝鮮政府ガ俄カニ右等ノ事ヲ斷行セントノ決心ヲ爲シタルハ、井上伯來館ノ報ニ接シ其前ニ事ヲ決行シ置カントノ考ヘニ出デタルガ如シ。朝鮮政

府ハ井上伯來着ノ上ハ一切伯ノ干渉ヲ謝絶スベキ旨兩三日前閣議ヲ以テ議決セリトノ事ナリ。李埈鎔ガ我國ヘ行ク事ハ確定セシガ、本官ニ於テ其出發ヲ引キ止メ居ル次第ナルガ、外國人等ハ同人ヲ「ヲトヲキユスルノネンセル」コトヲ疑ヒ居ル模樣アルユエ、成ルベク速カニ同人ヲシテ出發セシメンコト得策ナリト存ズ。

（明治二十八年十月二十七日午後〇時四十五分發）

西園寺大臣　　小村公使

目下ノ情體ニ於テ外國ノ兵力ニ依ルニアラザレバ、當國ノ安寧ヲ保持スル能ハザルハ本官ノ確認スル所ニシテ、各國ニ於テモ亦敢テ異議アルベキ筈ナシ。故ニ若シ露國ヨリ撤兵ヲ要求セバ是ノ點ヲ以テ之レヲ拒絶シテ然ル可シト存ズ。又當國行政事務ニ干渉ヲ絶ツヲ公言セラル、以上ハ、從來ノ如ク公使館附武官ニ於テ事實當國ノ兵事顧問トナリ、守備隊將校ニ於テ朝鮮兵ヲ訓練シ、其他文武ノ現職ヲ有スル者ヲシテ朝鮮政府雇ヲ兼ネシムル方可ナリ。是等ハ純然タル當國雇トナシ、各部顧問官ハ皆ナ事務家ヲ用ヒ、經驗アル人物ヲ撰ンデ內閣顧問トナシ、以テ表面上全ク我國政府トノ關係ヲ絶ツコト尤モ急務ト愚考ス。右意見御是認ノ上ハ朝鮮政府ヘ勸告等右ノ運ビニ至ル樣相當ノ所置ヲ執ラシムベシ。

（明治二十八年十月二十七日午後六時三十七分發）

西園寺侯爵　　小村公使

李埈鎔日本行ノコトニツイテハ種々ノ風說アル趣ニテ、英領事ハ當分出發ヲ見合サシムル方可ナラント語リタリシモ、本官ハ同人ノ經驗ト云ヒ、反ツテ速カニ出發セシムル方然ルベシトノ意見ヲ述べ、露公使モ同意ヲ表シタルニ付、愈ヨ出發セシムル事ニ取計ヒタリ。訓練隊解散ノ事ハ再度本日催促ヲ受タルモ、本官ハ平穩ニ此目的ヲ達セン爲ニハ尙ホ多少ノ時日ヲ猶豫スルコト必要ナリ。其間國王ノ安全ハ保證スル旨ヲ述べ、各國公使モ然ラバ宜敷斡施ヲ賴ムト云ヘリ。故ニ我ニ於テ他國ガ自ラ兵力ヲ以テ解散ヲ行ハント迫ルガ如キハ萬ナカルベシ。各國公使ハ本官ガ斡旋ニ依ツテ奉任式ノ中止サレタルヲ感謝スル旨ヲ述べタリ。此等ノ事情ヨリ察スレバ各國公使ハ漸ク我眞意ヲ了解シ信用ヲ置キタルモノノ如シ。

（明治二十八年十月三十日午後六時五分發）

西園寺大臣　　小村公使

昨夜內閣會議ニ臨ミ訓練隊ヲ王宮外ニ出ス樣ニ嚴談シタルニ、其隊長（ウハンゼン、リケイコ

（落字）……）ハ一歩モ君側ヲ離レズトノ決心ヲナシ、之ヲ強フレバ金宏集以下ヲモ害シ兼ネ間敷模様アリトノ事故、已ムヲ得ズ其儘引キ取リタリ。然ルニ其後ノ報ニ右兩隊長ハ閣議ノ後デ何レヘカ出奔セリトノ事ナリ。此上ハ訓練隊ノ始末ヲ付クルモ容易ナルニ付キ一應解散シ、更ニ同隊及ビ舊侍衛隊中ヨリ慥カナルモノヲ撰ビ新護衛兵ヲ組織シ、又大院君ハ王宮外ニ退出セシムル考ヘナリ。

（明治二十八年十月三十日午前十一時四分發）

西園寺外務大臣　　小村公使

井上伯渡來ニ就テハ種々ノ風説ヲ生ジ頗ル困却セリ。然レドモ朝鮮政府ヘ對シテハ同伯渡來ノ旨趣ヲ再三辯明セシニ依リ、最早誤解ナキモノト信ズ。但シ訓練隊ハ同伯入京ノ上ハ廢妃ヲ復シ、悉ク訓練隊ヲ處分セラルベキコト、信ジ、我々ハ死ストモ王宮ヲ離レズト決心シ居レリ。右ノ次第ニ付同伯滯在ハ成ル可ク短カカランコト得策ト思考ス。

（明治二十八年十月三十一日午前十時京城發）

川上中將　　田村

當地ニアル各國公使ハ過日ノ使臣會ニテ魯國公使ノ發案ニテ訓練隊王城ヲ守備シアリテハ、陛下ノ御身體甚ダ氣付カハシ、速カニ之ヲ除カントノ事ナレ共、小村公使ハ之ヲ除クトキハ忽チ匪徒四方ニ起リ、又之ヲ行フニハ兵力ヲ要スルモ計ラレズ。然ルトキハ如何ナスヤト答ヘタルニ、彼等曰ク、若シ兵力ヲ要スルトキハ日本兵ヲ用ユルヨリ仕方ナシ。小村曰ク、然ラバ其事大事件ナレバ熟考ヲ要ス。猶豫ヲ與ヘヨト計リタリ。其後魯公使ヨリ訓練隊ヲ除ク催促アリタレドモ、目下之ヲ解クトキハ却テ騷亂ノ種ヲ蒔クニ均シ、又陛下御身體ニ危險アルトモ認メズ、之ニ付テハ日本公使其責ニ任ジ保證スト答ヘタリ。然ラバ總テ日本公使ニ任セルトノコトニテ昨日電報セシ如ク訓練隊ノ二大隊長ヲ除キ且ツ訓練隊モ廢シ、更ニ京城ニ親衛隊ヲ地方ニ鎮衛隊ヲ置クコトニ改メ、今日勅令ヲ以テ發布セリ。之レニテ魯國始メ兵力ヲ以テ當地ニ事ヲ起スコトハ有ル間敷ヤト愚察ス。

（明治二十八年十一月一日午前十一時十分發）

西園寺外務大臣　　小村公使

訓練隊ヲ解散シ更ニ同隊及ビ侍衛隊ノ中ヨリ親衛隊ナルモノヲ組織シテ王室守護ニ充テ、平城及ビ全州ノ訓練隊ハ鎮衛隊ト改稱スル事トナレリ。ウハン善、李斗鎬ハ休職ヲ命ゼラレタリ。

（明治二十八年十一月一日午後十時七分發）

西園寺大臣　京城井上大使

遼東半島談判ノ模樣ハ其後如何ノ運ビニナリシヤ御報アリタシ。又當地着後「アレン」ヘハ未ダ面會セザルモ、「コツクリル」及ビ「シル」公使ヘ面會シタリ。當地駐在ノ各國使臣ハ本大使ノ來着ヲ俟チカネタル模樣ニテ、到着シタル爲メ大ニ安心シタル樣子ナリ。訓練隊ノ隊長禹範善、李斗鎬ハ本邦ヘ行クヤモ知ラレズ。若シ我臣民ニ於テ彼等ニ對シ保護ヲ加ヘル如キ處置ヲ執ルハ甚ダ不都合ト思フニ付、篤ト御注意ヲ乞フ。本大使ハ充分ニ實際ノ事情ヲ諒得シタル上、國王ヘ謁見スル積リニテ多分四日又ハ五日ニナル可シ。金宏集、金允植、趙義淵、鄭秉夏、金嚴鎭等ニ付キ王妃ノ生死、王妃ノ悖德ニ關スル勅令等ノ事柄ヲ質問シタルニ、何レモ皆恐怖ヲ懷キ事情御察シ下サレト相答ヘ事實ヲ吐露セズ、石塚ハ此度ノ事件ニ對シ頗ル「シンパシイー」ヲ有スル由ニ付キ、歸着後ハ餘リ他言セシメザル樣本人ニ嚴重ニ御申付置キヲ乞フ。

（明治二十八年十月三日午後十時四十分京城發）

川上中將　田村中佐

各大臣警務使大隊長等ハ事變後率ネ王宮ニ詰メ切ナリ。曩キニ報ゼシ大院君ノ自訴ハ未ダ實行サレズ、大臣等ノ說ニ露國公使館ニ逃ゲ込ミアル舊侍衞隊ノ大隊長ハ目下朝鮮ノ壯士ヲ集メ、彼等ノ手ヨリ國王ニ露國公使館ニ行幸アレト勸メシ密書ヲ送リ、國王ハ宜シク賴ムトノ返書ヲ與ヘタリ。某官宦此事宜シカラズト諫メシニ忽チ免職セシメラレタリト。

親衞ノ大隊長我士官ニ竊カニ依賴シテ云フ、前項ノ如キ次第ナレバ何時宮中ニ變事アルヤモ計レズ、日本兵ヲ以テ「ガイト」（該徒？）ヲ守備シ呉レマジキヤトノ事ナリ。小官守備大隊ニ戒メテ云フ、露國水兵王城ニ到リ、國王ヲ露國公使館ニ導クモ我兵ノ關スル所ニ非ラズ、決シテ之ニ對シ一兵モ動カスヲ許サズト、小官ノ決心ハ此等ノ事件アルモ斷ジテ兵ト兵トノ關係ヲ避クル積リナリ。

（明治二十八年十一月十日午前九時五分京城發）

川上中將　田村歩兵中佐

井上伯ノ勸告ニテ捕縛セシ閔泳駿ヲ解放ス。色々風說アリ官吏ハ不穩、守備隊ハ靜肅。

（明治二十八年十月七日午後十時十五分發）

西園寺大臣　小村公使

朝鮮政府ハ曩キニ本官ノ勸告ニ從ヒ訓練隊ヲ解散シ、更ニ同隊及ビ侍衛隊ノ内ヨリ護衛兵ヲ組織スルコトニ決シ、其旨公布シタルニ拘ラズ實際ハ訓練隊ノミ宮城内ニアリ。趙義淵、ゴンザイトン等ト結托シ居リ、彼等ヲ處分スルニハ訓練隊ヲ城外ニ退クルノ必要アリ。且ツ我兵ヲ宮城内ニ入ルヽハ我ヨリ進ンデ出張セルニアラズ。各國公使等ニ於テモ此ノ手段ニ依ルノ外他ニ事局ヲ收ムルノ道ナシトテ却テ我ニ勸告セル事ニテ、彼等ハ國王ノ身ノ上ノ危害旦夕ニ迫マリ居ルモノト信ジ居ルノミナラヽ、趙義淵等ガ國王ヲ擁シテ他所ヘ遁レン事ヲ深ク憂ヒ居レリ。然ルニ趙義淵等ニ於テハ却テ國王ガ露國公使館ニ遁レンコトヲ恐レ、均シク我兵ノ入城ヲ冀望シ居ルニ付キ、此際我兵ニ入城セシムル決シテ騷擾ヲ釀スノ恐レナシト信ズ。

（明治二十八年十一月八月午後九時十分發）

西園寺大臣　小村公使

朝鮮政府ニ對シテハ元ヨリ主動的ノ行爲ヲトルニアラズ、又我ガ兵ヲ動カス事ニ付テモ各國公使各其本國政府ノ訓令ヲ得テ之レヲ勸告スルニアラザレバ着手スベキニアラズ。是ノ事ニツキテハ深ク注意ヲ加ヘ、決シテ輕卒ノ擧動ニイデザレバ御安心アリタシ。

（明治二十八年十一月十日午後六時四十分發）

西園寺大臣　井上大使　小村公使

目下京城ノ狀況不穩、國王ノ身邊危險ニ迫リ居ルトノ畏レヲ以テ、既ニ電報セシ如ク各國公使等ハ我ガ兵ヲ以テ速カニ宮城ヲ護衛スルコトヲ頻リニ勸告シ居レリ。然ルニ將來ノ紛擾ヲ避クル爲メ、我政府ハ此際兵ヲ動カスハ好マズ、力メテ穩和手段ヲ以テ善後ノ處分ヲ國王ニ勸告スル意ヲ彼等ニ内告シタルニ、殊ニ米國公使ハ頗ル失望ノ體ナリ。外國公使等ハ善後ノ處置ニ付キテハ單ニ國王ニ勸告スルニ止マラズ、兵力ヲ以テ第一國王ヲ護衛シ、十月八日前ニ復セントヲ望メリ。就テハ之ハ實行セシメントノ熱心ナリ。又各國公使等ハ先般ノ事變ニ我公使關係シタルヲ以テ、當時ノ政府（イストウ）最早關係者ヲ排除シ、善後ノ處置ヲ施行スルハ（ニホンチ）ニ於テ德義上ノ責任ヲ有シ居ルコトハ免レズトノ意見ヲ有シ居レリ。故ニ我レ獨リ各國公使ト共同ノ策ヲ採ラズ、茲ニ手ヲ引クガ如キハ將來ノ爲メ反ツテ不得策ニハ非ザルカト思考ス。又大院君趙義淵及ビ權コウチン、權ザイコウ等ハ結托シテ宮城ニ詰メ切リ、國王ヲ强迫シテ王ノ意ニ非ザル勅令ヲ出シ、王ノ言行ヲ束縛シ居ルニ付キ、今後如何ナル事變ヲ再ビ惹起

スルヤモ計リ難シ。兎角各國公使等ハ懸念シ居レリ。本日貴電ノ如ク彼等ノ勢ヒ日下益々增長スルノ畏レナシトセズ。三日前ニ閔泳駿ヲ捕縛シ、且ツ米國公使館近傍ニ潛伏シ居リ、以前王妃ニ親シミ居リシ宮內府官吏等ニ巡査ヲ付ケタルガ如キ處置ニ依リ、各國公使等遂ニ國王ノ身上ニモ危害ヲ生ズルナラント心配シ、尤モ井上公使ハ金總理ニ勸告シ、昨日閔泳駿ヲ解放シ且ツ巡査ヲ撤回シタリ。

米國公使ハ小村ニ密話シタルニ左ノ事ヲ以テセリ。(若シ我ガ兵士ヲシテ速カニ宮城ヲ護衞スルコトニ至ラザレバ、露國ハ之ヲ口實トシテ或ハ露國水兵ヲ王城ニ入レ、內政ニ干涉スルノ端緒ヲ開クノ底意ニハアラザルヤト想像ス)萬一此場合ニ遭遇スルトキハ米國及ビ英國ノ感情ヲ頗ル害シ、今日マデ英、米兩代表者ノ我ニ對シ表示シタル好意ヲ失フニ至ルヤモ知レズ。尙ホ當地駐在ノ(諸兵)(シビョイ)ト衝突ヲ惹起スルノ畏レナシトセズ。要スルニ國王ニ勸告ヲ與フルニ際シ、我兵ヲ以テ王城ヲ護衞セシムルニアラザレバ再ビ紛擾ヲ惹起スルノ恐レアルヲ以テ、我兵若干ヲ王城ニ入レ、國王ノ眞意ヲ吐露セシメ、彼レヲ護衞シ暫時ノ安寧ヲ保ツタメ……(落字)必要ナル手段ト思考ス。

(明治二十八年十一月十一日午後〇時五十五分發)

伊藤總理大臣　井上公使

西園寺外務大臣

過ル五日儀式ノ謁見ヲナスノ外、內謁見申出デズ。如何トナレバ國王ハ心中馨ニ事情ト眞意ヲ陳述スルヲ望ミ居ルモ、軍務大臣、警務使、軍部次官等當時ノ親衞隊士官等ト結托シ居リ、且ツ大院君、李載冕等モ同腹ニテ國王ヨリ馨ヲ呼ブ事ヲ擁蔽シ居レリ。又我ヨリ內謁見ヲ請ハンカ、國王ニ(ヘントヲセイゾウシヲキアルトウ)(返答製造シ置キアル等?)ノ事情故ニ若シ强ヒテ謁見シ、左右ノ人ヲ拂ヒ反逆人等處分手段並ニ善後策ヲ與フルモ、退宮後ハ直ニ大院君等國王ニ脅迫シテ其ノ方案ヲ明言セシムルハ疑ヒヲ容レズ。左スレバ元ノ訓練隊士官等並ニ趙義淵警務使一身ニ罪ノ及バンコトヲ恐レ、騷擾ヲ釀スカ又ハ內閣一同罪ヲ引イテ辭職スルカニ至ランコトヲ恐ル。右ノ次第ナル故、金宏集、金允植等モ只ダ手ヲ拱イテ如何ナル騷擾ヲ惹キ起サンモ測ラレズトテ、其處置ニ着手シ得ズ。兎角兵隊ヲ以テ王宮ヲ護衞スルニアラザレバ處知セシムルノ着手ノ至難ナルハ各國使臣等モ認メ居ル故、日本兵ヲ以テ先ヅ王ヲ保護シ、各國使臣等先ヅ王ニ謁見シ其眞意ヲ聽キ、趙義淵警務使等ヲ處分セシメ、並ニ廢王妃、王妃ノ惡德ニ係ハル勅令ヲ取消サシメ、王妃ノ喪ヲ發セシメ、成ル可ク十月八日前ノ有樣ニ引キ直サントノ意ニ有之、併シ各政府ノ許可ヲ各使臣等得タル上ニテ我政府モ安心同意スルニアラザレバ、我公使モ手段ニ着手スル能ハ

ズト答ヘタルニ付キ、各公使等ハ本國ヘ電報ヲ發シ其返電ヲ持チ居ル姿ナリ。抑モ各使臣等ハ馨着スルヤ日本政府ハ德義上主動的ニ着手スル爲メ渡韓シタルナラント豫想シ居タル由談話シ居レリ。故ニ今日ハ少シノ失望ノ體ニ見受ケラレタリ。右ノ事情ニ付此儘滯在シ居ルモ苦心多シ、速カニ歸途ニ就テハ如何、貴答ヲ乞フ。

（明治二十八年十一月十二日午前十一時十分發）

西園寺外務大臣　　井上大使　小村公使

昨日貴大臣ヨリ兩名宛ノ貴電ニ對シ左ノ意見ヲ具ス。

一、去月二十五日帝國政府ガ朝鮮ト條約アル歐米各國ニ向ツテ宣言セラレタル電報中ニ、我占領地トノ交通線路ヲ維持スル爲ニスル所ノモノノ外、安寧秩序ヲ維持シ、我人民等ヲ保護スル爲メ我兵ヲ駐屯セシムルコトトアリ、然ルニ過日來電報セシ如ク、今回我兵ヲ王宮ニ入ルヽハ全ク安寧秩序ヲ維持スル必要手段ニ外ナラザレバ、右宣言ノ趣旨ト毫モ牴牾スル所ナキノミナラズ、反ツテ帝國政府ノ意旨ヲ貫クコトト信ズ。若シ然ラズトセバ我兵ヲ此ノ國ニ駐屯セシムルハ何ノ爲メナルヤ甚ダ了解ニ苦シム。

二、我兵ヲ動カス事ハ當地在留外國公使ガ其ノ本國政府ニ承認ヲ經テ公然ノ勸告ヲナスニアラザレバ着手セザル覺悟ナリ。又各國代表者ノ言論トアルハ今回ノ事變ニ關スル處分ニ付國王ノ眞意ヲ聽キ、反逆者ノ處分又ハ善後策ヲ勸告スル等ノ方案モ逐一各國政府ノ承認ヲ得ルヲ必要トスルノ意ナルヤ、果シテ然ラバ電信ノ往復ニテハ其意ヲ盡シ難カラン。左スレバ追テ電報セシ如ク目下切迫ノ事情ニ應ジ安寧ヲ維持スル能ハザルノ恐レアリ。

三、右等代表者ノ言論ハ其本國政府ノ意旨ナリトスルモ、我兵ヲ動カシ如何ナル結果ヲ生ズルトモ日本政府ハ其責ニ任ゼズ云々トアリ。然ルニ既ニ兵ヲ動カス以上ハ全ク其責ニ任ゼズト云フコトハ出來ザル事故獨リ其責ニ任ゼズ。各國政府ト其責任ヲ分ツ外ナシト信ズ。尤モ此事ニ付我政府ニ於テ豫ジメ各國政府ノ保證ヲ要スル義ナラバ正當ノ手順ヲ經テ我政府ニ於テ各國政府ト交渉セラル、事ヲ至當ト信ズ。

（明治二十八年十一月十四日午前一時十分發）

井上大使　小村公使　　西園寺大臣

本月十二日露國公使ニ面談セシ時、露國公使ハ在韓露國公使「ウエバー」ト其本國政府ト往來ノ電信ヲ示セリ。

「ウエバー」ヨリ露國政府ニ發電シテ曰ク、井上伯ハ反逆黨ノ掌中ニアル朝鮮國王ヲ自由ナラシムル爲メ暫シ王城ヲ占有スル事必要ナリトノ意見ナリ。尤モ同伯ハ此爲メ各國ト紛議ヲ惹起スル事ヲ恐レ居レリト、因テ露國政府ハ之ニ向ツテ電答シテ曰ク、國王ノ身ヲ自由ナラシムル爲ニハ同公使「ウエバー」ニ於テ可トスル所ノ總テノ手段ヲ執ルコトヲ承認スト。

右ニ付キ露國公使ハ王宮ヲ日本兵ニテ護衛スルコトハ井上伯ノ動議ヨリ起レリト思ヒ居タルナリ。然レドモ是レマデ閣下並ニ小村公使ヨリノ電報ニ依レバ、閣下等ヨリ是等ノ事ヲ發議セラレタルコトナシト信ズル故ニ、露國公使ニ向ツテハ井上伯ヨリ此ノ如キ動議ヲ起セシコトナシト答ヘ置キタリ。然レトモ斯カル事實ハ關係スル所、實ニ重大ナルヲ以テ極メテ明瞭ニ爲シ置カザルヲ得ズ。

又本日佛國公使ニ面談ノ節、在朝鮮同國領事ヨリ本國政府ノ電信ヲ示セリ。曰ク、

多數ノ外國代表者ハ再應井上伯ニ向テ王宮ニ在ル朝鮮兵ヲ解除スルコトヲ請求セリ、井上伯ハ日本兵ヲ以テ王宮ヲ護衛スル事ヲ條件トシテ之ヲ承認スベシト答ヘタリ。

代表者ハ井上伯ガ京城ノ安寧秩序ヲ保ツコトヲ請合ハル、ナラバ條件ニ反對セズト答ヘタリ。

右ニ付キ佛國公使モ亦閣下ハ主動的行爲ヲナスコトヲ欲セラル、如ク相像シ居レリ、若シ萬一ニモ「ウエバー」及ビ佛國領事ノ報ズル所事實ナリトセンカ、右ハ啻ニ我政府ノ主意ニ背クノミナラズ、甚ダ危險ノ地位ニ陷ラントスルノ恐レアリ、事實明カニ回電アリタシ。

（明治二十八年十一月十四日午前十一時四十分發）

井上大使
小村公使　　西園寺大臣

閣下等連名ノ電信二通並ニ小村公使ノ横文電文接手セリ。

今回ノ事變後ハ主動的ノ行爲ヲトラズトノ我ガ政略ハ井上大使ハ出發前ヨリ十分ニ承知セラレタルコトニシテ、其後數度ノ電訓ニ依リテモ閣下等ニ於テ明ラカナルコトト信ゼリ。然ルニ今更自ラ進ンデ善後策ヲ執ラル、如キハ本大臣ノ了解ニ苦シム所ナリ。就中去ル十二日連名ノ貴電ノ第一項ニ述ベラル、所ノ如キハ全ク我廟議ニ反スルモノニシテ、急激ニ我兵ヲ動カシ危險ヲ顧ミザル如キハ則チ安寧秩序ヲ維持スル必要ノ手段トナスコト能ハザルナリ。本大臣ハ獨、

英、米、佛、露五ヶ國ノ公使ニ面會シ左ノ如キ談話ヲナセリ。

事變後京城ノ狀況ハ先ヅ靜謐ナルガ如シ。然ルニ在朝鮮米國公使ハ其同僚ヲ代表シテ我公使ニ請求スルニ、日本ノ兵力ヲ以テ在權ノ人々及ビ王室護衛兵ヲ追出シ、國王ノ危急ヲ救フ等ノコトヲ以テシ、又朝鮮國ヲ十月八日以前ノ情體ニ恢復センコトヲ求メラレタリ。然レ共我政府ノ見ヲ所ヲ以テスレバ、急激ニ兵ヲ動カスハ却ツテ危險ノ甚ダシキモノニシテ延イテ禍亂ノ及ブ所實ニ恐ルベキナリ。

且ツ十月八日以前ノ情體ニ復セント欲スルガ如キハ非常ノ干涉ヲ以テ之ヲ實行スルニ非ザレバ爲シ能ハザル所ニシテ、嘗テ我ヨリ各國ニ向ツテ宣言セシ趣意ニ反スルヤ明カナリ。然レドモ各國ヨリ公然我レニ依賴アリテ我ヲシテ他日ノ責ニ任ゼシメズトノ儀ナレバ其ハ論外ナリ。要スルニ我政府ノ執ル所ノ方針ハ區々ノ議論ハ姑ク措キ朝鮮國ニ於テ更ニ紛擾ヲ生ゼシメザルコトヲ務ムルニアリ。

右等ノ意味ヲ以テ各公使ノ談話セシ所、露國公使ヲ除ク外大體我ノ意見ヲ以テ當レリトナセリ。特ニ米公使ノ如キハ曰ク、一國ノ使臣ガ本國ノ訓令ナクシテ他ノ一國ノ使臣ニ兵ヲ動カサンコトヲ請求スルガ如キハ實ニ想像シ能ハザル所ナリト。又獨逸公使ノ如キモ一度兵ヲ動カサバ夫レヨリ連環シテ來ル所ノ責任ハ深ク慮ラザルベカラズト、偖テ各公使ハ或ハ本國、或ハ京城ヘ我政府ノ意志ヲ通ズルコトヲ約シタリ。

熟々在朝鮮各國使臣ノ言論ヲ案ズルニ、本國政府ノ意志ト齟齬スル所アルガ如シ、閣下等ハ深ク將來ノ責ヲ慮ラレ我政策ノ軌道ヲ逸セザルコトヲ勉メラルベシ。

（明治二十七年十一月十五日午前九時四十分發）

大磯　伊藤總理大臣　　西園寺大臣

唯今井上、小村連名ニテ左ノ電報アリ。

本日貴電ニ關シ馨ハ決シテ我ヨリ我兵ヲ以テ王宮ニ入ル、コトニ付主動者ノ發議ヲナシタル覺エ更ニナシ。最初ヨリ露、米、英代表者ヨリノ發議ニ付キ追々政府ヘ電報セシノミニ付事實ヲ確ムル爲メ、今朝小村及ビ井上書記官ヲ以テ露、英、米公使ニ面會セシメ其事實ヲ確メタルニ左ノ如シ。

露國公使ニ質問セシニ同公使答ヘテ曰ク、本月五日其本國政府ヘ發シタル電文ハ左ノ意味ニシテ、本月十二日貴外務大臣ニ在東京露國公使ト面晤ノ折、同公使ガ貴大臣ニ示セシ電文ト其意味ヲ異ニセリ。卽チ同日日本公使館ニ於テ各國代表者ハ會合シタリ。其結果ハ十月八日以前ノ事體ニ恢復スルニ兵力ヲ用フルコトヲ必要ト認ムト決議セリ。此決議ニ對シ井上伯ハ同意ヲ

表セラレ、而シテ日本國政府ヘ電報スベシト言ハレタリ。右電文ハ露西亞語ヲ用ヒ、東京ニテ他國語ニ飜譯セシヨリ、或ハ斯カル誤解ヲ生ゼシナラント想像シ居レリ。依テ右誤解ヲ防グ爲メ本日更ニ在東京露國公使ヘ發電スベシト露國公使ハ答ヘタリ。

米公使ハ曰ク、井上伯ニ於テ主動的ノ行爲ヲ執ラルヽハ最初ヨリ各國代表者ノ希望スル所ナレドモ、之ヲ承諾セラレタルコトナシ。日本兵ヲ以テ王城ヲ護衛スル事ニ關シ、同伯ガ動議ヲ提出セラレタルコトナキハ確認ス。右ハ却ツテ各國使臣ヲ代表シ兩回マデモ同伯ニ向ツテ荐リニ之ヲ勸告シタルナリ。又佛國領事ハ井上伯到着以來會議等ヘハ一回モ出席シタル事ナシ。然レドモ尙ホ誤解ノ點ヲ明日ニモ小村質問シ置クベシ。右ノ次第ニテ本官ハ過日來發電セシ通リ毫モ主動的發議ヲ爲シタルコトナキ旨ヲ斷言ス。井上伯ハ十六日當地出發、十七日南越丸ニ乘込ミ歸朝スル筈ナリ。

此電信ノ事ハ今日直ニ露、佛其他ノ公使ニ話ス。尙ホ念ノ爲メ西會禰ヘモ電報シ置クベシ。

（明治二十八年十一月　日　發）

伊藤總理大臣　　西園寺外務大臣

只今井上大使ヨリ左ノ電報アリ。

「小村公使電報セシ三國公使昨日ノ意響ト我政府ノ意思ト大ニ相違シ居ル故、朝鮮政府ノ各員等ヨリ屢々拙者一個人ノ意見ヲ聞カル、モ答フル能ハズ。又個人的ノ考ヘヲ以テ各國公使等ヨリ意見ヲ聞カル、モ同ジク答フル能ハズ、何レヘ向テモ意思ヲ發スルヲ得ズ。最早滯在ハ無用ト困難ノ地位ニ立テリ。尙ホ王宮又ハ政府内ノ混雜シタル情實、並ニ外國人等ノ感情ニ就テハ電信ノ趣意ニテ御了解ハ難カルベシ。其ノ眞相ヲ報告旁タ二三日中出發ニ決意シタリ。就テハ十六日マデニ御用船仁川マデ回送ノ義御計ヒアリタシ、返電待ツ」

依ツテ右ニ對シ左ノ回電ヲ發セリ。

今朝發ノ貴電接閲セリ。目下閣下ガ困難ノ地位ニ立タレ御苦心ノ程察スルニ餘リアリ。御申越ノ通リ目下ノ形勢非常ニ入組ミ來リ、電信位ニテハ眞相ヲ詳カニスルニ苦シム故、此際閣下ノ御歸朝ハ最モ望ム所ナリ。御用船廻送ノコトハ速カニ其筋ニ掛合フベシ。

（明治二十八年十一月二十六日午後八時五十分發）

川上中將　　田村中佐

今日國王ハ各國使臣ヲ召シ、廢妃ヲ復位シ軍部大臣趙義淵、警務使權泳鎭ヲ免ジ、王妃ニ關スル罪人ヲ嚴重取調ベルト云フコトヲ告グ、各國大臣ハ滿足ト云フ答ヲナセリ。露、米二公使ハ廢妃ノ勅令ハ初メヨリ陛下ノ眞意ニ非ラザルト認メ居ルトノ語ヲ添ヘタリ。

軍部大臣ハ魚允中之ヲ兼ネ、許璡警務使ニナル、趙、權ノ二人ハ自宅ニモ寄ラズ王宮ヨリ城外ニ逃ゲタリ。

大院君ハ依然王宮ニ在リ、兩三日前內閣員協議ニテ大院君ヲ幽閉スルノ計畫アリシモ破レタル爲ニ趙、權二人ハ大院君ヨリ怒リヲ受ク。

以上無事ニ治マルヤ否ヤハ何トモ見込ミナシ。

（明治二十八年十一月二十七日午前三時二十五分發）

西園寺外務大臣

大磯　伊藤總理大臣

唯今小村公使ヨリ左ノ通リ電報アリ。

井上大使出發後金總理來館ノ上事變善後策トシテ本官ノ意見ヲ問ヒタルニ付キ、本官ハ一個人ノ資格ヲ以テ外國ヨリ迫ラルヽニ先チ朝鮮政府自ラ進ンデ必要ノ處置ヲ斷行スルニ如カザル旨答ヘタルニ、同總理モ同樣ノ意見ニテ、頃來政府部內ニ於テ二三大臣ハ蒋リニ之ガ手段ヲ施シツヽ居リタリ。

然ルニ其結果トシテ昨夜ニ至リ宮內大臣ヨリ本日午後二時國王ニハ本官初メ各國公使ヲ引見セラルヽ旨通知アリ。乃チ一同參內國王ニ謁見致シタルニ、國王ヨリ勅令ヲ以テ廢妃ニ關スル勅令ヲ取消シタリ。又事變當日ノ犯罪者ハ逮捕ノ上夫々處分スベキ旨ヲ當局大臣ニ命ジタリ。故ニ各國公使ヲ引見シ此事ヲ披露セント欲ス云々トノ御言葉アリ。各國公使モ一同滿足ノ意ヲ表シ退出セリ。又軍部大臣趙義淵、警務使權泳鎭ノ二氏ハ免官ノ處分ヲ受ケ、軍部大臣ニハ「リドウサイ」（元ト金羅監察使）、警務使ニハ「キョシン」（元ト「カンコウ」監察使）新ニ任ゼラレタリ。尤モ「リドウサイ」ハ目下鄕里忠淸道ニ在ルガ故、其上京マデノ間ハ度支大臣魚允中兼任ヲ命ゼラル「シンカイ兵」（前キノ訓練隊）現在將校兵卒ハ國王ヨリ無罪ニ付登勤スベシトノ意味ニテ懇篤ナル勅諭ヲ下シ、將校兵卒一同大ニ安堵ノ模樣ニ見受ケラル。然レドモ本官ハ右軍隊ニ動搖ナキ樣深ク注意ヲ加ヘ居レリ、以上ノ顚末井上伯ヘモ通ゼラレタシ。

（明治二十八年十一月二十七日午前三時四十分發）

西園寺大臣

伊藤總理大臣

唯今京城田村中佐ヨリ左ノ通リ電報アリタル旨川上中將ヨリ申越セリ。

今日國王ニハ各國使臣ヲ召シ廢妃ヲ復位シ、軍部大臣趙義淵、警務使「ケイエイチン」ヲ免ジ、王妃ニ關スル罪人ヲ嚴重取調ブルコトヲ告グ。

各國使臣ハ滿足ト云フ答ヘヲナセリ。併シ魯、米二公使ハ廢妃ノ勅令ハ始メヨリ陛下ノ眞意ニアラザルト認メ居ルトノ語ヲ添ヘタリ。

軍部大臣魚允中之ヲ兼ネ、「キョシン」警務使トナル。

趙、「ケン」ノ二人ハ自宅ヘモ據ラズ王宮ヨリ城外ニ逃ゲタリ。

大院君ハ依然王宮ニアリ兩三日前內閣員協議ニテ大院君ヲ幽閉スルノ計畫アリシモ、破レタル爲ニ趙、「ケン」二人ハ大院君ヨリ怒ヲ(ウイ?)。

此上無事ニ治マルヤ否ヤハ何トモ見込ミナシ。

（明治二十八年十一月二十八日午前十一時四十三分發）

陸奥外務大臣　　西園寺大臣

今朝八時十五分發ニテ小村公使ヨリ左ノ電報アリ、右ハ伊藤總理大臣ヘモ御傳ヘ下サレタシ。

舊侍衛隊ガ宮闕ヲ襲ヒツヽ在ルトノ報ニ接シ、本官ハ國王ノ御機嫌ヲ伺ヒ、且ツ事實取調ベノ爲メ唯今入闕ス。護衛ニハ巡査ヲ用ヒ兵卒ヲ一人モ引率セズ。格別ノ事ハアルマジト信ズ。

尙ホ委細後トヨリ上申スベシ。

（明治二十八年十一月二十八日午前十一時十分發）

大磯　陸奥外務大臣　　西園寺大臣

今午前九時二十二分發ニテ京城內田領事ヨリ左ノ電報アリ、右ハ伊藤總理大臣ヘモ御傳ヘ下サレタシ。

昨夜一二時頃王宮ヲ襲ヒタル暴徒ノ主謀者ハ、當國人「リハンヒン」及ビ米國人「アンダアウツド」ナル者ノ由ニテ、日本人中關係者アルヲ聞カズ、猶ホ取調ノ上具報スベシ。

（明治二十八年十一月二十八日午後二時二十五分發）

陸奥外務大臣　　西園寺外務大臣代理

今午前七時四十五分發ニテ京城田村中佐ヨリ左ノ電報アリタル旨川上中將ヨリ申越シタリ。

昨夜少シ騷ギタリ、我兵關係ナシ、其成行分ラズ。

又昨日午後三時三十分發ニテ同中佐ヨリ左ノ電報アリ。

「リハンシン」露國公使館ニ逃レ込ミ居リ、三百計リノ人ニテ今夜子ノ刻王宮ニ闖入ス

ルノ陰謀露ハレ、總理大臣ト軍務大臣ヨリ之ヲ鎮撫スル事ニ付キテ協議アリ、爲ニ公使ハ今内閣ニ往ケリ。

「リシウカイ」（前ノ軍部協辨）罪人トシテ捕縛セラル。

（明治二十八年十一月廿八日午後三時四十分發）

小村公使

西園寺外務大臣

王宮ニ小事變アリタリ、其顚末ハ此頃現内閣ニ反對スル或部分ノ者密カニ舊侍衛隊（八百六十餘名）「バコウタイ」若干ヲ煽動シ、目下王宮内護衛ノ親衛隊（元ト訓練隊）ト聯絡ヲ通ジ、依テ以テ王宮ヲ襲ヒ、内閣ヲ乘取ラントノ陰謀アル由探知シ、且ツ時機モ頗ル切迫セル趣ニ付、昨夕本官ハ金總理、魚軍部大臣代理ニ面會シ、此際充分警戒ヲ加ヘ且ツ能フベクンバ事ヲ未然ニ防禦スルノ得策ナル旨懇々説諭致シタルニ、親衛隊長等ニモ陽ニ陰謀ニ加ハツテ加擔ノ意ヲ表シ内應スベシト欺キ、暗ニ彼等ノ計畫ヲ探リ得テ多少ノ警戒ヲ加ヘ居レリトノ返答アリタリ。果セル哉今午前三時頃舊侍衛隊ノ兵卒二名當館ニ來リ一片ノ通知書ヲ差出セリ。其文中我々軍卒等王宮ニ押シ入リ逆賊十名ヲ討滅スベケレバ、我軍隊ニ於テ動搖セザル樣致シ呉レヨトノ意味ナリ。依ツテ其兵卒ヲ訊問セシニ、彼等ノ同類ハ隊長ニ引カレテ先程王宮ニ向ツテ侵入セリト答ヘ、早々立チ去ラントセシニ依リ、暫ク之ヲ留メ置ケリ。然ルニ之レヨリ先キ我歩哨ハ午前一時半頃王宮方位ニ三發ノ銃聲ヲ聞キ、次イデ又三時頃吶喊ノ聲ヲ二三度聞キタリト報ゼリ。彼是參酌スレバ舊侍衛隊ノ全部ハ王宮ニ押入ラントシタルモノノ如シ。故ニ右留メ置キタル兵卒一名ヲ放チ遣リ、彼等ノ隊長ニ歸リ云ハシメテ、同隊ハ目下王宮ニ迫リ亂暴ヲ行ヒツヽアルモノノ如シ。就テハ卽刻鎭壓ノ爲メ我軍隊ヲ派遣スベシ、故ニ若シ我軍隊ノ到ラザルニ先チ汝等解散スレバヨシ、否ラザレバ其咎ヲ免カルベカラズ（是レ一時ノ虛喝ニ過ギザレドモ、彼等ニハ頗ル恐慌ヲ來スベシト想像セリ）彼ハ直チニ其營ヲ指シ去レリ。而シテ本官ハ一面實況取調ノ爲メ巡査二名ヲ王宮附近ニ遣シ、又一面ニハ田村中佐、ウサガワ隊長ヲ呼ビ寄セ、我軍隊ノ取締向並ニ居留人保護ニ關スル打合セヲナシタル上、王宮ニ赴キ金總理、魚軍部大臣代理ニ面談セシニ、舊侍衛隊兵士並ニ壯士體ノ韓人數百人今朝一時半頃「シンセイ」門、「ホクシヨウ」門ノ二ケ所ニ押シ掛ケ、或ハ「シウウホキ」ヲ踰ヘ、或ハ門扉ヲ破壞シテ宮内ニ闖入セシヲ以テ、親衛隊五小隊之ニ當リ巧ニ防禦ヲナシ、其先頭ニ立ツ中隊長二人、大隊長一人、兵卒五名並ニ利刀ヲ携ヘ居リシ刺客體ノ者四人ヲ捕縛シ、其他ハ悉ク宮門外ニ追ヒ退ケタリ。彼等ハ大イニ失敗ノ體ニテ、一部ハ侍衛隊ノ兵營ニ歸リ、他ハ散亂セリト云フ。其後王宮内平穩、而シテ只今マデ取調ベタル處ニテハ、此事變ノ主謀者ハ李範晋ノ一派ニシテ、西洋人中二三ノ者之

ニ加ハリタルガ如シ。猶ホ探索中ニ付事實ヲ確メタル上電報スベシ。

（明治二十八年十一月二十八日午後五時二十分京城發）

川上中將　田村中佐

李範晋首領トナリ、壯士ノ一群（曩キノ平壤訓練隊ノ大隊長「リドウテツ」、舊侍衛隊士官等三十名計リ）親衛隊ノ兵營（之ニハ舊侍衛隊ヨリ編入セシモノ而已）ニ押入リ（舊侍衛隊ヨリ入リタル士官ニ內應セシモノアリ）士官ヲ脅迫シ、此二營ノ兵ヲ率キ宮城ニ闖入セントセシモ、其目的ヲ達セザルノミナラズ、壯士五人（此內ニ「リドウテツ」アリ）捕縛セラレタリ。此事變ニ外國人モ關係セシ事明カナレドモ、慥カナル證據ヲ得ルマデハ秘密ニナス。

（明治二十八年十一月二十八日午後六時二十分京城發）

伊藤軍令部長　新納海軍少佐

昨夜又王城ニ一小變アリ、其顚末大略左ノ如シ。

昨夜半過李道轍ナルモノ（舊第三大隊長）ハ朝鮮壯士三十名ヲ引率シ、親衛兵（本ノ侍衛隊）營ニ押掛ケ之ヲ强迫シテ連レ出シ、大闕ノ「シユンセイ」門ニ押掛ケ同門ヲ打破リ、又塀ヲ越エ凡ソ百五十名內ニ押入リシニ、王城警衛ノ親衛兵ハ一先ヅ退キ兵ヲ四小隊ニ增シ、散兵ニ開キ今マ押入リシ暴徒ヲ取圍ミ、右李道轍及ビ中隊長二名、兵五名、壯士四名ヲ捕縛セシニ、後トハ散ン散ンニ逃レ去リ、大事ニ至ラズシテ事濟ミトナレリ。右ハ現內閣大臣以下十名許リ暗殺セントノ計畫ナリシト。

一說ニ王城警衛兵ノ內ヨリモ之ニ應ズル密約ナリシモ其約ヲ踏マズ却テ擊退シタリト、故ニ斯クハ脆ク破レタルモノナリト。

主謀者ハ現場ニ見エザレドモ外國公使館ニ隱レ居ル李範晋其他ノ者ナリト。

今回ハ日本人ノ關係シタル者ナシ。

（明治二十八年十一月廿八日午後七時三十分發）

西園寺外務大臣　小村公使

今朝電報シタル事件ニ付尙ホ委シク探偵シタルニ、日本人ハ全ク關係シ居ラズ、又本日米國公使ヲ訪ヒ、各國公使會同ノ席ニテ今朝電報セシ主意ニテ自分ノ探聞ヲ披露シ、續イテ他ノ公使等ノ聞キ込ミタル事ヲモ聽カン事ヲ求メタルニ、米、露、英三國公使ノ如キハ今朝ニ至リテ之ニ關シ（ヨクジ）ノ爲シタル擧動ノ外何等ノコトヲモ語ラズ。又其事變ノ原因等ニ至リテハ

露國公使ノ如キハ全ク沈默シテ想像ヲダモ言ハズ。又彼等ノ一般ニ今回ノ事ニハ日本人ノ關係セザル事ニ付テ寸毫モ疑ヒヲ存セザル如ク見受ケタリ。又此起因ニ付キテハ素ヨリ充分ノ調査ヲ遂ゲタル上ナラデハ斷言スル能ハザルモ、或ル立派ナル人物ノ關係シ居ルコトニ關シ、打チ消スベカラザル證據アルヤニ聞キ及ビタリ。外國公使等ニ於テモ之ヲ默認シ、公使以外ノモノニシテ多少關係シタル者アリトノ事ヲモ聞キ込ミタリ。是レ或ハ事實ナラン、何トナレバ今此ノ事實ヲ機トシタルモノノ方案ナリトテ事情ニ通ズルモノノ推測スル所ニ據レバ、彼等ハ舊訓練隊ト共謀シテ極メテ靜穩ニ造作ナク王宮ヲ占領スル積リナリシトノ事ナレバ、外國人等モ之レニ加擔スルヲ甚ダシク掛念シタリトモ思ハレズ、兎ニ角爾後ノ景況ハ極メテ靜謐ナレバ、此上充分愼重ヲ加ヘテ委シク事實ヲ調査シ更ニ電報スベシ。

（明治二十七年六月四日發）

東京　陸　奥　　北京　小　村

○○○○内密ニ余ニ告ゲテ曰ク、昨日受取リタル電信ニ因レバ、兵士一千五百人、山海關ニ於テ乘船セリト、右ハ在芝罘二等領事ヨリ余ヘノ電信ニ、清國軍艦四艘仁川ニ向ケ派遣セラレタリトノ報告ニ符合スルモノト見做サルベシ。

（明治二十七年六月四日發）

東京　陸　奥　　在芝罘　伊　集　院

清國軍艦ハ六月三日夜二隻、六月四日午後二隻仁川ニ向ケテ威海衛ヲ解纜セリ、兵士派遣ノ事ハ分カラズ。

（明治二十七年六月七日午後五時三十五分發）

東京　陸　奥　　京城　杉　村

聶氏ガ率ユル處ノ清兵五百ハ六月七日ニ塘沽ヲ發シ、葉氏ガ率ユル處ノ一千一百ハ六月八日ニ山海關ヲ發シ、孰レモ牙山ニ向ケ出發ス。

朝鮮官吏間ニ清國ニ援兵ヲ請フコトニ反對激動セリ、全羅道ノ形勢變更ナシ。

（明治二十七年六月七日午後八時十分發）

東京　陸　奥　　北京　小　村

六月六日ノ貴電（卽チ出兵ノ通知）六月七日午後接到、命ノ如ク直チニ總理衙門ニ照會セリ。

（明治二十七年六月七日午前九時十九分發）

東京　陸　奥　　天津　荒　川

聞クトコロニ依レバ總兵聶ハ六月六日午後二營ヲ率キ戰地ニ向テ太沽ヲ發シタリト。又直隷提督葉ハ一營ヲ率キテ山海關ヨリ京城ニ赴ク積リニテ之レヲ搭載スル爲メ汽船一隻六月六日拂曉山海關ニ向ヒ太沽ヲ解纜セリト。別ニ又當地ニ流布スルトコロノ風說ニ因レバ、南西吉林ノ長春ニ於テ變亂アリ、既ニ參萬五千ノ兵派遣セラレタリトイフ。

（明治二十七年六月七日午後七時十五分發）

東京　陸　奥　　天津　荒　川

六月七日午後三時李鴻章ニ面會シテ我ガ出兵ニ係ハル閣下ヨリ電信ノ趣ヲ口頭ニテ申聞ケタリ。李氏本官ヘ對ヘテ、右ニ付キテハ未ダ北京ヨリ報知ナシト告ゲ、且ツ同氏ハ其懸念スルトコロト希望スルトコロヲ左ノ如ク言明セリ。

李ヨリハ京城ヘ出兵セザルニ付キ、日本兵ハ仁川ヨリ先キヘ進ムベカラザルコト」伊藤伯及ビ貴大臣ニ於テ朝鮮ニ對スル李氏ノ處置ヲ誤解スベカラザルコト」支那ハ常ニ日本ヲ敬重スルガ故ニ、注意シテ兩國兵士ノ間ノ衝突ヲ避クルコト最モ緊要ナルコト」朝鮮並ニ人民ハ驚怖スベキガ故ニ、日本ノ兵ハ可成丈ケ少數タルベキコト」清兵ハ朝鮮ノ開港ヘハ立寄ラズ直接ニ全州ニ赴クコト」李氏ハ明治十八年ノ約書ニ從ヒ變亂鎭定ノ後直チニ清兵ヲ撤回スベシト。

（明治二十七年六月八日午前十時四十四分發）

東京　陸　奥　　京城　杉　村

督辨交渉通商事務ハ洪氏ヨリ受取リタル電報ノ寫ヲ本官ヘ送付セリ。其電文ノ意味ハ全州近傍ニテ賊兵大敗セリト。

朝鮮政府ハ日本兵派遣ノ事ヲ聞キ一驚ヲ喫シ、六月七日午後清國政府ヘ發電シ、清兵ノ上陸ヲ中止センコトヲ請ヘリ。

督辨ヨリ送付シタル電報ハ察スル處多分ハ僞造ニシテ、之レヲ以テ清國政府ヘ兵士上陸中止請求ノ材料トセシモノヽ如シ。

（明治二十七年六月八日午後四時三十分發）

東京　陸　奥　　京城　杉　村

外務督辨ニ面謁シタリ。同督辨ハ目下ノ形勢ハ兵力ノ保護ヲ要スル如ク切迫ノ場合ニ立至リ居レリト思考セズト。又日本政府ニ於テ斯カル處置ヲ執ラルヽトキハ、他國政府ヲシテ同樣ノ處置ニ出デシムベク、且ツ日本兵士ノ上陸ハ朝鮮人中ニ於テ大ニ激昂ヲ惹起スベシトノ理由ヲ以テ、日本兵士上陸ノ事ヲ停止セラルベキ樣本官ヨリ帝國政府ヘ請求致シ呉レベキ旨依賴アリタリ。然レドモ本官ハ斷然之ヲ拒絶セリ。

（明治二十七年六月八日午前十一時四十七分發）

東京　陸　奥　　上海　大　越

清國問題ヲ熟知スル「上海マーキユリー」紙記者「オー、シー」ノ談ニ依レバ、清國政府ハ目下ノ機會ニ乘ジ朝鮮國王ヲ清國ヘ連レ行キ、朝鮮ノ國土ヲ清國ノ一有ト宣告シ、李經方ヲ其總督ニ任ズルノ企テアリト云ヘリ。

清國政府ハ日、露兩政府ノ外ハ之ニ反對スルモノ無カルベシト思惟セリト。「オー、シー」ハ此事ヲ某清官ヨリ聞キタリト云フモ、其ノ姓名ヲ明言セズ。

（明治二十七年六月九日午後一時二十五分發）

東京　陸　奥　　京城　杉　村

本月八日清兵一千人汽船ニテ牙山ニ到着セリ。本月十日此外尙ホ清兵到着ノ筈ナリ。

（明治二十七年六月十日發）

東京　陸　奥　　倫敦　青　木

朝鮮變亂ニ關シ英國〇〇〇〇內密ニ余ニ告ゲテ曰ク、露國ハ目下一切ノ干涉ヲ避クルガ如クナルヲ以テ、英國政府ハ未ダ敢テ顧慮スルコトナシト。

右談話中ノ語氣ヨリ察スレバ、英國政府ニ於テハ將來朝鮮國ニ關シ、日清兩國ハ英國ニ對シテ不利ナル取極メヲ爲サヾランコトヲ希望スルト同時ニ、實ハ今回日本ノ處置ニシテ、苟クモ直接又ハ間接ニ露國ノ侵入ニ對スル豫防ニ出デタルモノナレバ、却テ之レヲ可トスルモノヽ如シ。尤モ余察スルニ方便ノ有ラン限リ東方兩大國間ノ開戰ヲ避クルコトハ英國政府ノ希望スルトゴロナリ。

（明治二十七年六月十一日午前天津發）

天津　井　上　少　佐

清國軍艦定遠、鎮遠、鎮邊、鎮中、威遠、揚威、來遠、經遠、廣乙、廣丙ハ威海衞ニ碇泊出港準備整ヘリ。

濟遠、超勇、操江、平遠、飛虎ハ濟物浦。靖遠、致遠ハ不分明。多分朝鮮カ。

（明治二十七年六月十一日午後九時三十分發）

東京　陸　奥　　京城　大　鳥

京城目下ノ情況ハ多數ノ兵員ヲ入京セシムルニ相當ノ理由ナキヲ畏ル。其筋ヘ御協議ノ上本使ヨリ命令スルマデハ兵員ヲ上陸セシメザル樣大島少將ヘ電訓アル樣御取計ヲ願フ。

此電信ニ對シ陸奥外務大臣ハ陸軍大臣ト協議ノ上左ノ如キ電訓ヲ發シタリ。

大島少將ノ率ユル軍隊ヲ上陸セシメザルコトハ出來ガタシ、併シ閣下ヨリ大島ニ入京請求アル迄ハ仁川港ニ滯陣セシムルコトハ出來ルベシ。ソレニテ宜シケレバ閣下ヨリ其旨大島少將ニ申送ルベシ。參謀本部ヨリモ大島ヘハ閣下ノ請求アレバ仁川ニ滯陣スベシト電訓スベシ。但シ一戸ノ率ユル軍隊ノ入京ニ付テハ閣下ニ於テ異議ナキコトヽ信ズ。

（明治二十七年六月十一日午前九時十五分發）

東京　陸　奥　　京城　杉　村

大鳥公使ハ海兵四百二十名、巡査二十名ヲ率キ六月十日午後七時三十分當地ニ着セリ。

（明治二十七年六月十一日午前十一時五十分發）

東京　陸　奥　　仁川　能勢領事

探偵ノ報告ニ因レバ、清兵ハ六月八日ニ一千人牙山ニ上陸シ、六月九日ニハ六百人、六月十日ニハ五百人到着シタレドモ、彼等ハ未ダ上陸セズ、葉、聶兩氏上陸セリ。

（明治二十七年六月十一日午前十一時五十五分發）

東京　陸　奥　　京城　大　鳥

京城ハ靜謐ナリ」亂民ニ關スル形勢ニ付テハ更ニ變化ナシ」本使ヨリ更ニ電報スルマデハ殘餘ノ兵員ヲ派遣セラレズシテ、唯ダ何時ニテモ出兵スルヲ得ル樣準備致シ置カレタシ」參謀本部ヨリノ通知ニ依レバ、豫定ノ全隊六月十一日午後既ニ廣島ヲ出帆セリトノコトナルガ故ニ、

大鳥公使ヨリノ申出ハ最早致方無之事ナルヲ以テ其趣同公使ヘ電報セリ。

（明治二十七年六月十一日午後六時四十五分發）

東京　陸　奥　　北京　小　村

〇〇〇〇ノ聞キ込ミタル報告ニ據レバ、既ニ派遣セラレタルモノ、外、更ニ清兵二千人派遣セラレタルベシトイフ。

（明治二十七年六月十二日午後三時三十五分發）

東京　陸　奥　　釜山　室　田

聞クトコロニ依レバ露國軍艦及ビ兵員ハ浦鹽斯德港ヨリ派遣セラルベシト言フ、本官ハ保護ノ爲メ我ガ軍艦ヲ元山ニ送ルコト必要ナリト思考ス。

（明治二十七年六月十二日午後九時四十五分發）

東京　陸　奥　　京城　大　鳥

袁氏曰ク、清兵ハ內地ヘ進入セズ、猶ホ未ダ牙山ニ在リ、賊軍ハ六月十日、六月十一日全州ニテ敗北シ、金堤ヘ逃走セリト。

大院君ハ宮中ヘ參內シ大ニ閣臣ノ失行ヲ攻擊セリトノ事ヲ聞キ及ビタリ。

日本兵員ハ（和歌浦丸ニテ乘込シ兵員ナルベシ）六月十二日午後四時仁川ニ着セリ。

（明治二十七年六月十二日午後十一時三十分發）

東京　陸　奥　　仁川　能　勢

本日午後帝國兵員無事到着シ、夜半陸路當地ヲ出發セリ。

（明治二十七年六月十七日午後一時發）

東京　陸　奥　　北京　小　村

在清〇〇〇ハ日本兵ノ遣韓ハ不得策、且ツ不必要ト思考セリ。〇〇〇ハ露國ノ擧動ヲ恐ルヽガ爲ニ、日清間ニ葛藤ヲ生ゼザルヤウ頻リニ心配シ居レリ。〇〇〇ハ葛藤ヲ避クルヤウ充分ノ注意ヲ加ヘンコトヲ李鴻章ニ忠告セリ。日本政府モ同ジク注意アランコトヲ希望セリ。在清〇〇〇ハ在清〇〇〇ノ意見ト同感ナリ。在清〇、〇〇〇ハ日本ノ在韓臣民及ビ商業保護ノ爲メ必要ナリトシ、我ガ擧動ヲ賛成セリ。

（明治二十七年六月十七日午後八時四十五分發）

東京　陸　奥　　北京　小　村

李鴻章ハ非常ニ露國ヲ畏ル、コト及ビ在清〇〇〇ノ忠告並ニ本年ハ皇太后ノ慶典アルニ拘ラズ干戈ヲ動カスガ如キコトアリテハ其責任甚ダ輕カラザル等ノコトアルガ故ニ、日清兩國間ノ葛藤ヲ生ゼザルヤウ頻リニ心配シ居ルヤウ見受ケラル。

（明治二十七年六月二十三日午後一時十分發）

東京　陸　奥　　天津　荒　川

李鴻章ハ頻リニ出師ノ準備ヲナシ居ルガ如シ。

六月二十二日午後兵員三百、馬七十頭太沽ヨリ牙山ニ向ツテ發シタリ。

近日ノ内尚ホ五千ノ兵員派遣セラルベキ模樣アリ。

（明治二十七年六月二十三日午前十一時五十一分發）

東京　陸　奥　　京城　大　鳥

釜山、京城間電信線修繕ノ爲メ必要ノ技師、電線及ビ器具ヲ直チニ御送附アレ。

（明治二十七年六月二十三日午後三時四十分發）

東京　陸　奥　　露京　西　公　使

數月前露國政府ハ清國政府ニ向ツテ、露國ハ朝鮮ノ國政ニ干預スルコトナク、又該國ノ獨立ヲ侵サヾルベキ旨ヲ約シタリト聞ケリ。

（明治二十七年七月一日午後八時十分發）

東京　陸　奥　　北京　小　村

在清〇〇〇〇ハ天津ヨリ左ノ如キ報知ヲ得タリ。凡ソ十五營、卽チ七千五百ノ清兵ハ直チニ派遣セラルベシ。而シテ右清兵ハ平安道ノ平壤ニ上陸スベシ。〇〇〇ハ開戰ヲ非トセリ、且ツ曰ク、朝鮮ニ於ケル佛國ノ利害ハ只ダ宣教師ヲ保護スルコト而已ナリト。

（明治二十七年七月二日午前十一時五十六分發）

東京　陸　奥　　天津　荒　川

清國政府ハ李鴻章ヨリ建議シタル開戰策ヲ採用シタルモノヽ如シ。

清軍將來上陸ノ場所ハ大同江ナルベシ。清軍ハ出發ノ準備整ヒ猶ホ未ダ命令ヲ待チ居レリ。

（明治二十七年七月七日午後八時三十分發）

東京　陸　奥　　北京　小　村

七月七日面晤ノ節、總理衙門王大臣本官ニ向ツテ問フテ曰ク、貴官ハ在北京英國公使ヨリ申入レタル如ク開談スベキ訓令ヲ受ケザリシカト。本官之ニ答ヘ説イテ曰ク、今ニ及ンデ適當ノ筋途ハ清國政府ヨリ提議ヲ差出スニアリト告ゲタルニ、王大臣ハ一應相談ノ上遲クモ七月九日ニ返答スベシト約セリ。

（明治二十七年七月八日午後一時四十分發）

東京　陸　奥　　在露　西　公　使

七月六日本官ハ亞細亞局長ニ面晤セリ、同氏曰ク、余ハ未ダ在日本露公使ヨリ何ノ電報ヲモ接受セズト、依テ本官ハ貴答ノ要領ヲ同氏ニ説明セシニ、同氏ハ右ニテハ衝突ノ危險ヲ豫防スルモノナキヲ以テ甚ダ不滿足ナル旨申聞ケタリ。故ニ本官ハ我目的ノ全ク私ヲ計ルノ意ニ出デタルニ非ザル旨ヲ表示シ、且ツ露國政府ノ疑念ハ事實相違ノ旨ヲ證明シ、若シ露國政府ニシテ日本ヘ對シ同樣ノ忠告ヲ再ビスルニ於テハ事體甚ダ輕カラザルコトヽナルベシ。如何トナレバ今我兵ヲ撤回スルコトハ到底出來得ベカラザルコトナレバナリトノ旨ヲ答ヘタルニ、同氏曰ク外務大臣ハ目下重病ニテ田舍ニ保養致シ居レドモ、同大臣ト協議ヲ遂グベシト、且ツ兎ニ角在日本露公使ヘ訓令ヲ發スル前ニ露國政府ノ決議ヲ必ラズ本使ヘ告知スベキ旨ヲ約束セリ。

本官ハ露國政府ヲシテ此上ノ干渉ヲナサシメザルヤウ全力ヲ盡シ居レリ。

（明治二十七年七月十九日午後五時四十分發）

東京　陸　奥　　釜山　永　瀧

京城、釜山間ニ直チニ電線ヲ架設スベキ旨軍用電信隊ニ通知セヨトノ電報ヲ接收シタリ。

依テ軍用電信隊ハ用意整ヒ次第第一着トシテ大邱以北ニ電線架設ノ目的ヲ以テ當地ヲ出發スベシ、此事ハ已ニ地方官ニ通知シタリ。

（明治二十七年七月十八日午後一時二十五分發）

東京　陸　奥　大　臣　　京城　大　鳥　公　使

本使ヨリ提出シタル改革案ニ關シ、督辨交渉通商事務ヨリ公書ヲ接受ス、其大要左ノ如シ。

該案ハ朝鮮政府ノ意見ニ協ヘリト雖モ外國ノ大兵駐屯スル上ハ治安ヲ妨害スルヲ以テ內政改革ノ事ハ我兵撤回ノ後朝鮮政府ニ於テ之レヲ行フベシト。

又三名ノ委員ハ最近ノ會議ニ於テ口頭ヲ以テ提案ヲ受納シ居リナガラ、前文同樣ノ公書ヲ送リ、且ツ之レニ加ヘテ曰ク、若シ朝鮮政府ガ提案ヲ容ルヽニ於テハ、他國モ亦同樣ノ請求ヲ爲スニ至ルベシ、故ニ朝鮮政府ハ我兵並ニ我ガ提案ノ撤回ヲ請求シ、而シテ右撤回ノ後ハ朝鮮政府ハ自ラ改革事務ヲ執行スルコトヲ怠ラザルベシ。

（明治二十七年七月十八日午後三時十九分發）

東京　陸　奥　大　臣　　天津　荒　川　領　事

李鴻章ハ十七營ノ清兵ヲ朝鮮ニ派遣スル事ニ決シタルガ如シ。而シテ其六營ハ七月十九日或ハ二十日ニ太沽ヨリ出發スルナラン。

（明治二十七年七月十九日午後六時發）

東京　陸　奥　大　臣　　仁川　室田總領事

袁世凱ハ七月十九日午後一時三十分清國軍艦揚威ニ搭ジ天津ニ向ヒ當港ヲ發シタリ。清國領事館書記生周曰ク、袁世凱ハ七月十八日夜總理衙門ヨリ電信ヲ以テ直チニ天津ニ赴クベシトノ命令ヲ受ケタリト、周ノ考ヘニテハ袁ハ李鴻章ヨリ親シク訓令ヲ受ケタル後ハ速カニ歸韓スベシト。

（明治二十七年七月十九日午後八時四十分發）

東京　陸　奥　大　臣　　芝罘　伊　集　院

北洋全艦隊七月十九日若クハ二十日ニ朝鮮各港ヘ向ケ解纜ストノコトハ今ヤ最モ確實ナルモノヽ如シ。

（明治二十七年七月二十日午後十一時二十五分發）

東京　陸　奥　　京城　大　鳥

本使ハ七月十九日我兵ノ爲メ營所ヲ建設スベキ旨朝鮮政府ヘ要求シ、又屬邦保護ノ口實ヲ以テ清國兵ノ永ク朝鮮國內ニ駐屯スルハ、朝鮮國ノ獨立ヲ侵碍スルモノナレバ之レヲ驅逐スベキ旨七月二十日同政府ヘ要求セリ。而シテ右ニ對スル回答ハ七月二十二日ヲ以テ限リトセリ。

朝鮮政府ニ於テ該日限マデニ滿足ノ回答ヲ爲シ能ハザルニ於テハ、本使ハ大イニ同政府ニ逼リ、此機ニ乘ジテ同政府内ノ大改革ヲ行ハシムル積リナリ。

袁世凱俄然歸國セシ爲メ、朝鮮政府内清國派ノ勢ヒ衰ヘツツアルガ如シ。

（明治二十七年七月二十三日前八時十分發）

東京　陸　奥　　京城　大　鳥

朝鮮政府ハ本使ノ電信ニ述ベタル第二ノ要求ニ對シ、甚ダ不滿足ナル回答ヲ爲セシヲ以テ、不得已斷然タル處置ヲ執ルニ至リ、朝鮮兵ハ日本兵ニ向テ發砲シ双方互ニ砲擊セリ。

（明治二十七年七月二十三日午後五時發）

東京　陸　奥　大　臣　　京城　大　鳥

發砲ハ凡ソ十五六分間モ引續キ、今ハ總テ靜謐ニ歸シタリ。督辨交渉通商事務ハ王命ヲ奉ジ來リテ本使ニ參内センコトヲ請ヘリ。本使王宮ニ至ルヤ、大院君親ラ本使ヲ迎ヘ、國王ハ國政及ビ改革ノ事ヲ擧ゲテ君ニ專任セラレタル旨ヲ述ベ、總テ本使ト協議スベシト告ゲタリ。本使ハ外國使臣ニ回章ヲ送リ、日韓間談判ノ成行ニ因リ、龍山ニ在ル我兵ノ一部ヲ京城ヘ進入セシムルコト必要トナリ、而シテ龍山兵ハ午前四時頃入京シ、王宮ノ後ニ當ル丘ニ駐陣スル爲メ南門ヨリ王宮ニ沿ヒテ進ミタルニ、王宮護衛兵及ビ街頭ニ配置シアルトコロノ多數ノ兵士ハ、我兵ニ向テ發砲セリ。依テ我兵モ餘儀ナク之レニ應ジテ發砲シ、遂ニ王宮ニ入テ之レヲ守衛セシムルニ至リタルコトヲ告ゲ、且ツ日本政府ニ於テハ決シテ侵略ノ意ナキ旨ヲ保證セリ。

（明治二十七年七月二十四日　前八時十分發）

東京　陸　奥　大　臣　　北京　小村代理公使

最近ノ報道ニ依レバ太沽ヨリ二千人、旅順口ヨリ三千人ノ兵ヲ四艘ノ軍艦ニテ護衛シ、朝鮮ヘ派遣中ナリト、此報道ハ一萬人ノ兵ハ七月二十一日朝鮮ニ向テ出發ノ用意整ヒ居レリトノ前報ヲ確カメタリ。又曰ク、五千人ノ徵募兵ハ安徽省壽州ニ在リト、又曰ク、李鴻章ハ多額ノ公債ヲ募集スルコトニ付勅裁ヲ乞ヒ、已ニ香港上海銀行及ビ其他ヨリ千萬兩ヲ借入レシト。

（明治二十七年七月二十四日午後十二時十分發）

東京　陸　奥　　天津　荒　川

其行キ先ハ判然セザレドモ、旅順口ヨリ二千、太沽ヨリ四千ノ清兵已ニ出發セリ。外ニ一千

ノ清兵ハ多分七月二十四日ニ太沽ヲ發スルナラン。又三千ハ二三日内ニ發スベシ。

（明治二十七年七月廿五日京城ヨリ郵送、廿八日午前二時四十五分釜山ヨリ發電）

東京　陸　奥　大　臣　　京城　大　鳥　公　使

大院君ハ今マ新政府ヲ組織中ニシテ、金嘉鎭、安駉壽、其他進歩派ノ人々登用セラレ、閔泳駿、閔應植、其他閔派ノ人々多數大院君ノ指揮ニ依リ流竄ニ處セラレタリ。外務督辨ヨリ本使ヘ公文ヲ送リ、本使ニ請フニ朝鮮政府ニ代リテ牙山ニ在ル清兵ヲ撤退セシムベキ事ヲ以テセリ。

（明治二十七年七月二十七日午後三時四十五分發）

東京　陸　奥　大　臣　　釜山　永瀧　領事官補

當港在留七十名ノ清國人半數ハ今夜十二時獨國汽船ニテ上海ヘ立退クベシ、殘餘ノモノハ來月ノ初メニ立退クベシトノ事ナリ。

（明治二十七年七月二十七日午後八時五十分發）

東京　陸　奥　大　臣　　在北京　小村臨時代理公使

秘密電信ハ總テ取次ガザル旨只今電信局ヨリ通知ヲ受ケタリ。

（明治二十七年七月二十七日午後十一時三十五分發）

東京　陸　奥　大　臣　　釜山　永瀧　領事官補

御用船ニ乘組ミ只今當港ニ着シタル海軍士官ノ告グル所ニ依レバ、我軍艦ハ豐島近海ニテ清國運漕船一艘ヲ打チ沈メ、其一艘ヲ奪占シ、他ノ二艘ヲ走ラシメタリト云ヘリ。

（明治二十七年七月二十八日午前十二時三十分發）

東京　陸　奥　大　臣　　釜山　永瀧　領事官補

富士川丸、信濃川丸及ビ田子浦丸三艘ノ御用船ハ仁川ヘ向ケ進航中ノ所、豐島ノ戰鬪ヲ聞キタル爲メ今夜當港ヘ引返シ來レリ。

（明治二十七年七月三十一日前四時五十分發）

京城　大　鳥

七月二十三日事變以後、將來變亂ノ再起ヲ防遏スル爲メ朝鮮兵ノ兵器ヲ取上ゲタリ。尤モ金

穀器物ノ如キハ悉ク返還シタリ。又朝鮮人民ニ誤解ヲ生ゼザル樣充分ノ注意ヲ加ヘタリ。然レドモ朝鮮國兵權並ニ警察權消滅シタルヲ以テ、人心大ニ恐怖ヲ懷キ居レバ、本使ハ朝鮮政府ニ可成的速カニ秩序ヲ恢復スルコトヲ諭告シ居ルト雖モ、新政府ニ對シ斯カル急速ノ働キハ望ミ難キコトニ付、本使ハ貴大臣ニ於テ左ノ救濟手段ヲ執ランコトヲ願フ。

第一、日本公衆ヲシテ朝鮮ノ窮民救助ノ爲メ凡ソ三萬圓ノ醵金ヲ爲サシムルコト。

第二、巡査百名、警部三名ヲ直ニ京城ニ送ルコト。

第三、本邦壯士、兇人等ノ渡韓ヲ制止スルコト。

事變ニ引續キ來ル所ノ目下ノ困窮ニ對シ、前述ノ如キ救濟策ヲ講ズルハ日本ノ義務ト存候。而シテ改革事務ハ着々歩ヲ進メ居リ、大院君ハ金宏集ヲ委員長ニ、其他進歩黨ノモノヲ以テ委員ニ任命シタリ。

本公使館員ハ大院君ノ相談役トシテ毎日宮中ニ參内シ居レリ。

大院君ヨリ依賴ニ付直チニ朴泳孝ヲ渡韓セシメラレタシ。同人ノ家族ハ赦免セラレタリ。又不日ニ大赦ヲ布告スベシ。

露國公使館ヘハ六月二十七日其護衞トシテ三十五名ノ海兵來リ、米國公使館ヘハ四十名來レリ。朝鮮政府ハ清韓條約ヲ皆廢棄セル旨ヲ在京城清國代表者ヘ通知セリ。而シテ公文ヲ以テ其旨本使ヘ通知セリ。

（清韓條約ト云フハ水陸貿易章程、中江貿易章程、吉林貿易章程ナリ）

（明治二十七年七月三十一日午前釜山發）

東京　陸奥大臣　　京城　大鳥公使

清國代表者ハ清國公使館、領事館及ビ臣民ノ保護ヲ英國總領事ニ托シ七月二十七日京城ヲ立チ退キタリ。

京城、釜山間ノ電信線ハ七月二十四日以來不通トナリ、元山線モ亦七月二十七日以來不通トナレリ。就テハ其筋ト御協議ノ上右電線不通中ハ少ナクモ二日ニ一回ヅツ汽船ノ定期航路ヲ開ク樣御取計ヲ願フ。

（明治二十七年七月三十一日釜山發）

東京　陸奥大臣　　仁川　室田總領事

大鳥公使ヨリ左ノ通リ電報アリ。

本使ガ受取リタル報告ニ依レバ、清國ハ已ニ牙山ニ向ケ三千ノ兵ヲ送リ、尙ホ多數ノ兵員ヲ

朝鮮ヘ派遣スル模様ナリ。就テハ日本ニ於テモ朝鮮駐屯ノ兵數ヲ增サレンコトヲ切望ス。

（明治二十七年七月三十一日京城發仁川ヨリ郵送、八月三日午前九時釜山發）

東京　陸奥大臣　　京城　大鳥公使

我兵牙山ニ於テ大捷、不日凱旋スベシトノ報知ニ接セリ。又七月二十五日天津ヨリ出發シタル朝鮮ノ汽船顯益ハ、彼地ニ於テ運送船九艘ヲ見受ケタリト報道ス。

清兵ハ或ハ既ニ太沽ヨリ發程シタルナラント雖モ、彼ノ兵朝鮮ニ上陸シタルコトニ就テハ未ダ報知ニ接セズ。

（明治二十七年七月三十一日發）

東京　陸奥大臣　　上海　大越總領事

本官ヨリ異存ヲ申入レタルニモ拘ハラズ、清國稅關ハ日本ヘ飲食品ヲ輸出スルヲ禁止シ、又棉花及ビ麻ノ輸出モ禁ゼントセリ。

（明治二十七年八月一日午後二時二十五分發）

東京　陸奥大臣　　北京　小村臨時代理公使

本官ハ直チニ北京ヲ出發スベシ。米國公使館ハ帝國公使館記錄保管及ビ帝國臣民保護等ノ事ヲ引受ケタリ。

（明治二十七年八月一日午後六時五十五分倫敦發）

東京　陸奥外務大臣　　倫敦　青木公使

信用スベキ一友人ヨリ本使ニ勸ムルニ歐洲大國ニテ或ハ速カニ干涉ヲ爲スベケレバ、我目的ヲ遂グル爲メ可成早ク斷然タル處置ヲ爲スベキコトヲ以テシタリ。

運送船ヨリ救助シタル歐洲人ノ姓名及ビ其負傷ノ有無ヲ速カニ電答アリタシ。船長及ビ「ハンネケン」（此一語難解）ヨリ我ニ都合能キ事實陳述書ヲ得ルコトヲ試ミラレ、又其運送船ハ英國旗ヲ揭ゲ居リシヤ、船中ノ支那兵ハ我軍ニ向テ發砲セシヤ否ヤ回答ヲ待ツ、總ベテ新聞紙ハ此事アリシ爲メ我國ニ反對ノ說ヲ爲セリ。因テ「シーボルト」ハ輿論ヲ轉ゼシムルコトヲ勉メ居レリ。

（明治二十七年八月二日午後八時四十分發）

東京　陸奥外務大臣　　在露京　西公使

聖彼特堡新報（露國外務省機關新聞名）ハ朝鮮事件ニ關シ始メテ論文ヲ載セ、其結論ニ露國政府ノ意思ヲ述ベテ曰ク、亞洲極東全局ノ宏大ナル利害ニ最モ適合セシムル樣、朝鮮國政治上ノ獨裁權ヲ輔ケ、速カニ平和ノ結末ヲ見ンコトハ露國政府ノ希望スルトコロナリト。

（明治二十七年八月二日午後一時上海發）

東京　參謀本部　　神尾光臣

盛字軍ハ鴨綠江ニ上陸シ義州ヲ經テ進ミ、北塘兵ハ牙山ニ上陸スル確報ヲ得タリ。旅順ノ毅字軍四營及ビ盛京ノ步騎軍數營陸路義州ニ向ヒシハ事實ナルガ如シ。第二次運送ノ盛字軍四營ハ二十五日夜太沽ヲ出帆セリ。殘リ二營ハ二十八九日頃出帆ノ筈、北塘ニ四營、蘆臺ニ一營、直隷ニ於テ新募ス。尙ホ續々新募スル模樣ナリ。支那艦隊ノ敗報二十六日午後ニ達セリ、沈沒セシ運送船ニハ北塘練軍二營親兵前營ノ一中隊及ビ獨逸士官「ハネケン」乘リ込ミアリ、此ノ電信ハ上海ニ送リテ出ス。

（明治二十七年八月七日午後十二時七分發）

東京　陸奥大臣　　上海　大越總領事

宮津ノ風帆船「テンキヨウ」丸八月二日室蘭ヨリ塘沽ニ到着シタル所、支那人ノ爲ニ捕獲セラレ、船長外五名ハ擒ニセラレ、水夫十六名ハ當地ニ到着セリ。

（書　信）

奉天府ヨリ朝鮮ヘ出兵ノ件外一件

昨日帝國名譽領事「バンヂネル」氏ノ接手シタル本月二十三日附奉天府來信ニ據レバ同地ヨリ兵一千人本月二十二日朝鮮ヘ向ケ進發シ、尙ホ七千ノ兵士續發スベキ筈ナリ。又謠言ヲ鎭ムル爲メ其筋ヨリ告示ヲ發セリト有之候。

當地電信局ニテハ今二十八日道臺ノ命ニ依リ戰時ニ於テハ暗號電信其外秘密電信一切不取扱、但シ商用ニ關スル英語電信ハ是レマデ通リ取扱フ旨公示セリ。

明治二十七年七月二十八日　　在牛莊　領事館書記生　天野恭次郎

（書　信）

朝鮮國境ヘ出兵ノ件再報

前キニ當地ヨリ五百名ノ兵士九連城ニ赴キツヽアルコトハ報告申進候通リナルガ、右一昨二十二日マデニ悉皆出發シ了レリ。今信ズベキ筋ヨリ聞ク所ニ據レバ、更ニ旅順口ヨリ宋營ノ（將官ノ名ヲ取リテ兵營ニ名ケタルモノナラン）豫軍（勇兵ノ若干隊ニ冠スル特名ニシテ、其兵多クハ河南人ヲ以テ組成セラルヽモノナラン）一千名ヲ選ビ「飛虎兵」ト名ケ、宋得勝ナル人之ヲ率キ、又大連灣ニ駐紮スル銘軍（曾テ劉銘傳ニ屬セシ勇兵隊ヲ指シテ云フ）騎兵二營、卽チ一千、步兵五營、卽二千五百人ヲ姓馬ナル人統率シ、何レモ九連城ニ向フ筈ナリ、其水陸何レノ道ヲ取ルヤハ聞知スル所ナシ。當地西營口ノ砲臺ハ人ノ知ル如ク遼河ノ左岸ニ在リテ其右岸ノ對地ニモ砲臺ヲ修築シツヽアリ。目下工兵ノ員數ヲ增シ馬占鰲ナル人之レヲ監督シテ切リニ其成功ヲ急グト聞ク。

（明治二十七年十月七日午後一時三十二分發）

鍋島外務書記官　　外務大臣

左ノ通リ伊藤、井上兩伯ニ傳ヘヨ。

大鳥公使ノ電報ニ曰ク、「リインヨヲ」（李允用カ）其位階ヲ奪ハレタル以來、金嘉鎭其他內閣員ハ大イニ恐怖ヲ懷ケリ、是レト同時ニ大院君ノ囑托ヲ受ケタリト思ハル、者ガ國王ニ建白シテ金宏集、金嘉鎭、安駉壽及ビ其他五名ハ、日本ノ兵ヲ招キテ朝鮮國ヲ困難ニ陷ラシムルニ至レリト彈劾セリ。依テ金宏集等ハ辭表ヲ呈シ、其後ハ兩回共內閣會議ヲ開カズ、國王ハ金宏集等ノ辭職ヲ許サズ、右ノ建白ヲ爲シタルモノハ拘留審問中ナリ、本使ハ金宏集等ノ復職ニ付盡力シ居レリ。

（明治二十七年十月十日午前八時五十五分發）

鍋島外務書記官　　陸奥外務大臣

大鳥公使ヨリ左ノ電報アリ。

報聘大使ハ來ル十三日出發ノコトニ確定セリ。然レドモ仁川ヨリ丁度都合ヨキ御用船ナケレバ、何日カ同地ニ逗留スル事ニナルベシ。一行ハ隨員二名、通辯二名、遊覽人（朝使）八名、從僕八名程ナリト云ヘリ。此旨宮內省ニ告ゲラレタシ、右總理大臣及ビ宮內大臣ニ傳ヘヨ。

（明治二十七年十月二十日午前七時十二分發）

鍋島外務書記官　　外務大臣

左ノ電報伊藤伯、西郷伯ニ通ゼヨ。

（十九日晩、杉村代理公使來電）去ル十四日「チウシウシブ」ノ守備兵ハ「タンゲツ」ニテ東學黨ノ首領三名ヲ捕ヘ、十五日夜「セイフウキン」ニテ東學黨ヲ攻擊シ首領ヲ斃シ、四名ヲ捕ヘ、賊ノ卽死凡ソ三十名、彼レノ所持スル小銃二千挺、火藥等皆燒キ捨テタリ。上等兵一名ハ負傷シタリ。十六日「コンチガン」附近ニテ首領ラシキモノ二名ヲ捕ヘ、十八日東學黨首領「ジョソウテツ」ハ「コンチガン」附近ニ來ルヲ探知シ、捕縛ニ着手中ナリト在仁川伊藤兵站監ヨリ電報アリ。

（明治二十七年十月二十八日午後五時三十五分發）

鍋島外務書記官　　陸奥外務大臣

左ノ通リ總理大臣ヘ傳ヘ返事ヲ聞ケ。

井上伯ヨリ直接閣下ニ送リタル長文ノ電信ヲ唯今落手セリ。京城守衛兵ノ必要ハ先刻申上ゲタル如ク是レマデ度々拙者ヨリ陸軍大臣ヘ照會シタル次第ニシテ、井上伯ノ請求ハ尤モノコト存ズ。清國ニ對スル軍事ニノミ注意シ、朝鮮ノ紛亂ヲ凡テ省ミザルコトハ決シテ得策ニアラズ。且ツ他ノ强國ヲシテ朝鮮ノ內政ニ干涉セシムルノ口實ヲ與フルコトハ甚ダ恐ルベキ譯ナレバ、閣下ヨリ大本營ヘ御懸合速カニ兵隊派出ノ都合ニ御取計アリタシ。井上ヘ回答ノ都合モアレバ凡ソ何時頃派兵到來スベキヤ御一報ヲ乞フ。

（明治二十七年十月七日午後十一時四十分發）

陸奥外務大臣　　京城　岡本柳之助

各國公使ノ意向モ變ジ、我ガ處置ニ服スル趣アリ。朝鮮政府ハ一致共同改革ノ實ヲ擧ゲントス。三浦公使ハ今二週間滯在セザレバ成効シ難シ。若シ直チニ出發セバ不時ノ變亂ヲ生ゼン、閣下ニ於テ右ノ取扱ヲ偏ニ願フ所ナリ。

（二十九年一月二十七日午後四時發）

西園寺大臣　　小村公使

原州暴徒ノ情況偵察ノ爲メ當館ヨリ派遣セシ者ノ報告ニ據レバ、暴徒ノ發端ハ砥平ニアリテ、其巨魁モ亦砥平住、李春永ナリ。斷髮令ニ激昂シ、郡下ニアル「ホウ」軍（土兵ヲ謂フ）數百名ヲ糾合シ、原州ニ投ジ觀察使廳、郡守廳ヲ襲ヒ悉ク武器ヲ掠奪シタリ。暴徒ハ原州ニ留マル三四日、本月十八日其一部ハ平昌ヲ經テ慶尙道ニ、其一部ハ提川ヲ經テ慶尙道ニ向ヘリ。之レ

安東ノ暴徒ニ會合セントスル者ナリ。又暴徒ノ揚言スル所ニ據レバ、忠淸、江原、全羅、慶尙ノ同志者糾合シテ京城ニ迫リ、斷髮令ヲ撤回セシムベシト云フニアリ。親衞一中隊ハ去ル二十二日丹陽附近ニ於テ凡ソ二百ノ暴徒ト衝突ス。賊ハ高地ニ據リ頗ル猛烈ナル防禦ヲナセリ。劇戰一時間餘ノ後親衞隊ハ一時退去セリ。賊ハ火ヲ丹陽ノ民家ニ放チ豐基ニ向ケ發セリ。親衞中隊ハ之レヲ尾擊シ、去ル二十四日醴泉ニ着セリ。其暴徒ハ曩キニ原州ヨリ提州ヲ經テ安東ニ向ヒツツアル一部ノ途中ニテ衝突シタルモノト察セラル。

去ル二十四日當地出發原州、提州、等地ノ各地ヲ迂回シテ安東ニ行軍スベキ親衞一中隊ハ最早該地方ヲ遍歷スルノ必要ナキモノト認メラルヽヲ以テ、速カニ安東方面ニ直進シ、目下追擊中ノ親衞一中隊ニ聯絡ヲ通ジ、一擧安東ノ賊窟ヲ掃攘スルコトノ急務タルベキ旨本官ハ其筋ニ勸告セリ。

（明治二十九年二月十二日一時二十五分發）

外務大臣　　京城小村公使

一、本月五日忠淸道リ州ニ於テ暴徒蜂起シ電信線ヲ切斷セリ。故ニ本官ハ高井兵站監ニ向テ此際京城ニアル我守備兵ヲ動カスコトノ不得策ナルヲ以テ、電信守備兵ノミニテ電線ノ保護ヲ完フスル樣取計ヒアリタシト電報ニ及ビタルニ、該守備兵ハ本月十一日ヲ期シ暴徒ヲ擊攘シ電線工事ニ着手スベキ見込ナリ。

一、春州暴徒鎭壓ノ爲メ最初派遣ノ親衞一中隊ハ一時退却セシモ、目下三個中隊ヲ以テ進擊中ニ付キ不日鎭定スルナラン。

露館ニ潛伏スル李範晋等ノ一派ハ暗ニ春川暴徒ニ氣脈ヲ通ジ居ルモノヽ如シ。

本日露國士官五名、水兵五〇七名、砲一門ヲ携ヘ入京スル由、是レマデ同館ニアリシモノト合セテ約百五十人トナル、右ハ此度ノ暴徒ヲ鎭壓スル爲メ我守備兵ノ動カザル樣牽制スルノ目的ニ非ラズヤト推量セラル。

電線全通ニ至ルマデ釜山、仁川間ニ通報船ヲ往復セシムル樣御取計アリタシ。

（明治二十九年二月十二日午後三時三十五分發）

西園寺外務大臣　　加藤領事

仁川ヨリノ通信ニ依レバ、去ル十日午前九時露國士官六、水兵百、大砲一門、附屬彈藥荷物駄馬四十八頭ニテ京城ニ向ヒ出發セリ。佛國軍艦ヨリモ同日カ其翌日位ニ水兵ヲ上陸セシムル筈トアリ。

只今「カコオ」ヨリ其筋ヘノ電報ニ依レバ、「リ」州ノ賊勢ハ益々加ハルモノヽ如シ。又去ル九日偵察ニ出デタル菊池軍曹一行九名ハ今ニ行衛分カラズ。

當地守備兵ノ内一中隊ハ昨十一日午前九時「カコオ」ニ向テ出發セリ。

（明治二十九年二月十三日午前十一時四十分）

外務大臣　小村公使

昨日電報セシ如ク、露國水兵百餘名入京シタル後本朝ニ至リ左ノ出來事アリタリ。國王、世子ハ今朝拂曉宮内官吏ノ隙キヲ窺ヒ露國公使館ニ潛入シ、同時ニ市街各所ニ詔勅ナリト稱シ左ノ掲示ヲ爲シ、並ニ内閣員ノ更迭ヲナセリ。卽チ總理大臣ニハ金ヘイシ、内部大臣ニハ朴定陽軍部大臣兼警務使ニハ李尹用、法部大臣ニハ趙秉稷、學部大臣ニハ李完用、宮内大臣ニハ李載純任ゼラル。其他ハ未定。掲示文ノ大意ハ左ノ如シ、目下我國變亂絶エズ、之レヲ要スルニ亂臣賊士ノ蔓延ニ依ル、朕故ヲ以テ茲ニ露公館ニ移御シ、各國使臣ノ保護ヲ受ク、然レドモ汝有衆決シテ騷亂スルコトナク、各其業ニ安ジ、而シテ禍亂ノ張本者タル禹範善、李斗鎬、李ハンライ、リシンコウ、趙義淵、權泳鎭等ヲ斬首シテ露館ニ來リ朕ノ觀覽ニ供セヨ。

人心稍ヤ不穩、然レドモ何等變動ノ兆候ナシ、日本黨ト稱セラル、モノハ過半追斥セラルベシ。（以下暗號）事已ニ斯ノ如クナル上ハ、最早兵力ヲ用フルノ外手段ナシ。併シ兵力ヲ用フルトキハ必ラズ露國ト衝突ヲ免レザルベシ。此衝突ヲ起スハ目下時機ニ非ラズト信ズルヲ以テ、貴大臣ヨリ何等ノ訓令アルマデハ飽クマデ穩和手段ニ出ヅル覺悟ナリ。依テ露館ニ至リ「スペイヤ」氏ニ面會シ、目下人心恟々ノ際ナレバ御互ヒニ出來得ベキ丈ケ注意ヲ爲シ、彼我軍隊ノ間ニ紛議ヲ生ゼザル樣努メザルヲ得ザル旨申込ミタルニ、「スペイヤ」氏モ本官ト同樣ノ意見ニテ精々注意スベキ旨答ヘ居レリ。至急指揮ヲ乞フ。

（明治二十九年二月十三日午前十一時三十分發）

原次官　仁川萩原

昨十日午前八時半露艦「コルニロフ」ヨリ士官五名、武裝水兵百七名ヲ率キ大砲一門、駄馬三十四頭ヲ俱シ京城ニ向ケ出發セシガ、本日午前十一時頃ヨリ陸續當地ニ達シタル京城發ノ私電ニ依レバ、昨夜露兵ハ國王、世子及ビ二三大臣ヲ擁シ、露公使館ニ入リテ之レヲ拘置セリ。兪内部、趙軍部ハ行衛知ラズ、本日内閣交迭發表アリ。金炳始總理大臣トナレリト、又金總理ハ殺害セラレタルヤノ說アリ。目下露公使館ニ在ル「シウワン」水兵ハ昨年以來追々入京セルモノ七十五名ト此度ノ百十二名トナリ、當港碇泊軍艦ハ露艦「コルニロフボウブル」、佛「イイ

ズリ」、米「マチアス」、英「ポルポイス」ノ五艘ニシテ、外ニ佛艦「フオルフエイ」碇泊セシガ、本日午前十一時何レヘカ出帆セリ。今回事變ニ付、英、米各艦ヨリハ本日中ニ其公使館護衛ノ爲メ水兵ヲ入京セシムル樣子ナリ。

（明治二十九年二月十三日午後三時三分發）

陸奥大臣　西園寺大臣

參謀本部及ビ遞信省ニテ得タル報告ニ依レバ、去ル十日ノ夜朝鮮國王及ビ世子ハ露國公使館ニ潛行セリ、現內閣ハ顚覆セリ。

趙義淵其他數名ヲ斬首シテ露國公使館ニ持來リ叡覽ニ供スベキ旨ヲ公布セリ。

各國使臣ハ露國公使館ニテ會議セリ。

金宏集、鄭秉夏ハ殺サル。

是レマデニ入京シタル露國水兵ハ凡ソ二百餘名ナリ。

（明治二十九年二月十四日午後四時四十分可興發）

外務大臣　可興　三宅陸軍大尉

今朝國王、世子共ニ王宮ヲ逃出テ露西亞公使館ニ潛行セリ。國王ノ詔勅ト稱シ市街各所ニ掲示セル文面ニハ、逆賊趙義淵外數名ヲ斬殺スベシ云々トアリ。並ニ內閣大臣ニハ總更迭アリ。總理大臣ニハ金炳始、內部大臣ニハ朴定陽、外部兼農工商大臣並ニ宮內大臣ニハ李載純、法、學兩部大臣ニハ趙秉稷、軍部及ビ警務使ニハ李允用命ゼラレタリ。前總理金宏集、前農工商大臣鄭秉夏ハ殺サレタリ。

（明治二十九年三月二十二日午後二時十五分京城發）

西園寺外務大臣　小村公使

去ル十二日露公使ヲ訪問シ大體ニ關シ互ニ意見ヲ陳述セリ。翌十三日同公使本官ヲ來訪シタルニ付、前日ノ談話ニ依リ探リタル先方ノ意向ヲ酌量シ、別電ノ覺書ヲ提出シテ開談シタリ。其大體ニ付テハ格別異議ナカリシモ、尙ホ多少修正シタル所アルヲ以テ、熟考ノ上確答スベシトテ該意見書ヲ持チ歸レリ。其後兩三日ヲ經テ尙ホ何等ノ回答ナカリシヲ以テ、本官ハ十六日同公使ヲ訪ヒタルニ、前日來感冒ト「リヨウマチス」ノ爲メ惱ミ居リ、未ダ確答ノ場合ニ至ラズト述ベタルニ付、當日ハ只ダ電信守備ノ件、卽チ覺書第三條ニ對シ全ク異議ナキコトヲ確カメタルノミニテ歸館シタリ。然ルニ爾來今日ニ至ルマデ何等回答ナキヲ以テ考フルニ、同公使ハ

實際病氣ニ相違ナキモ、右遲延ノ重ナル原因ハ覺書第一條ヲ實行スルノ困難ナルコトナラント信ズ。卽チ其困難トハ目下當國官民間ニ李範晋排斥ノ運動盛ナルガ故ニ、國王還御ノ結果トシテ內閣ヲ公使館外ニ出スコトハ其安全ヲ保シ難シト云フ事情アルコトナリ、同公使ハ去ル十八日本國政府ヘ長文ノ電報ヲ發シタル趣ニ付、右ニ關シ請訓シ居ルコトモアランカト察セラル。

（明治二十九年三月二十四日午後零時三十五分釜山發）

西園寺外務大臣　　仁川　萩原領事館事務代理

一昨日鎭南浦ヨリ寄港シタル日本形船乘組員ノ談話ニヨレバ、同地ニ於テ暴徒蜂起シ、勢ヒ甚ダ猖獗ニシテ、コウセイ群守其他皆ナ賊ニ降リ、將ニ平壤ヲ襲ハントスルノ模樣アリ。自己モ漸ク危險ヲ冒シテ逃ゲ歸リタル趣ナリ。就テハ先日派遣シタル警部一行ノ安否モ心許ナク、平壤在留民ノ消息モ知レザルユヱ、右偵察ノ爲メ本日同地行ノ海龍號ニハ巡査五名ヲ派遣セリ。

（明治二十九年三月二十四日午後十二時三十五分發）

原外務次官　　萩原領事官補

先頃ノ模樣ニテハ當國暴徒モ追々鎭定ノ模樣ナリシニ、此頃ハ其勢ヒ再燃シ、各地到ル處猖獗ヲ極メ、爲ニ內地在留民及ビ行商者ハ盡ク引揚ゲザルヲ得ザルニ至リ、右暴徒ハ日本人ヲ敵視スルコト甚ダシク、地方ニ蓄積セル貨物ヲ奪取スルノミナラズ、或ハ之レヲ當港ニ運搬スルヲ禁ズル等ノ所爲アルヲ以テ、當港ノ商業日ニ增シ衰微ノ有樣ナリ。然ルニ之ニ對スル朝鮮政府ノ所爲ハ最モ緩漫ナルノミナラズ、各地ニ向ヒタル官軍ハ到ル處敗績シテ到底鎭壓ノ目的ヲ達スル能ハザルモノヽ如シ。此有樣ニテ經過スルトキハ、當港商況ノ恢復ハ望ミナク、尙ホ後年ニ於テ當國ニ於ケル我商權ヲ失フノ畏レアリ。此事ハ小村公使ヘモ稟議シ置キタルモ、尙ホ閣下ニ於テ大臣ヘモ御協議相成リ、急速ノ御處分ヲ仰ギ度委細郵便ニテ申進ムベキモ一應特ニ電報ヲ以テ上申ス。

（明治二十九年三月二十六日午後零時五十五分仁川發）

西園寺大臣　　仁川　萩原領事館事務代理

去ル十四日平壤ヲ發シ、昨二十五日當地ニ着シタル日本形船乘組員ノ談話ニヨレバ、去ル十二日平壤四五里以內ノ地ニ於テ暴徒蜂起シ、平壤ノ人心穩カナラズ、在留民モ引揚船ノ到着ヲ頻リニ待チ居レリト。同船大同江ヲ下ル途中、京城ヨリ出張ノ平原警部一行ガ暴行ノ爲メ殺サレタル日本人一名ノ死體ヲ持チ歸ルニ逢ヒタリ。尤モ當館ヨリ派遣セル經濟號等ヘハ出逢ハザ

リシ由。

經濟號並ニ鳥龍號ニ付テハ未ダ何等ノ報告ナキモ、今日マデ歸リ來ラザルヲ見レバ目的地ニ達シタルモノト推測セラル。本官ヨリハ平壤鎭衞隊長「リンヘイキ」並ニ同隊教官稻村中尉宛居留民引揚ノ際ハ乘船地マデ充分ナル保護ヲ與ヘラレタキ旨依賴シ置キタルニ付、經濟號等到着ノ上ハ二百名近キ在留民ハ無事引揚ゲ得ルコト疑ヒナシ。

（明治二十九年三月二十五日午後零時五分發）

西園寺大臣　萩原領事官補

廣乙號引揚ゲノ爲メ「カロリン」灣ニ滯在セル日本人七名ハ暴民ノ襲擊ニ逢ヒ、內四名ハ九死ヲ脫シテ當港ヘ逃ゲ來リ、他ノ三名ハ殺害セラレタルコトヲ報告セリ。然ルニ同地ハ淺瀨ノ爲メ御用船廻航シ難ク、又在港中ノモノモ無之ニ付、當館ニ於テ小蒸汽一艘ヲ借リ上ゲテ御用船ト爲シ、死體探索遺留財產保護ノ爲メ昨夜當館附巡査八名、京城領事館出張巡査八名、巡檢二名ヲ出張セシメタリ。

（明治二十九年四月六日午後三時京城發）（仁、釜間風波ノ爲メ延着）

外務大臣　小村公使

三月二十一日ノ覺書ニ對シ昨五日露公使ヨリ意見書ヲ提出セリ。因テ本官ハ之レニ對シ左記ノ修正ヲ加ヘテ更ニ覺書ヲ提出致度シ。

一、目下露公使ガ國王ニ還御ヲ勸告シ居ルコトハ事實ナルニ付、此一項ハ大體先方ノ意見ヲ採用シテ實際差支ナシト考フ。但シ本項ヘ日本公使モ國王ニ還御ヲ勸告スベシトノ一節ヲ加フベシ。

二、二項モ大體先方ノ意見ヲ同意シテ、此際現政府ノ事ニ容喙セザル方得策ト考フ。何ントナレバ今若シ現政府ニ付キ彼是云フ時ハ彼等ヲ恐怖セシムル餘リ、肝心ノ還御ヲ遲延セシムルノ結果トナルベシ。國王一旦還御シタル上ハ他ノ干涉ニ據ラザルモ、朝鮮人ノミニテ內閣ノ組織ヲ變更スルヲ得ベシト考フ。但シ將來內閣ニ變更ヲ生ズル場合ニハ、日、露兩使ハ溫和主義ノ人物ヲ採用スベキコトニ關シ、國王ニ共同ノ勸告ヲスベシトノ一節ヲ本項ニ加フベシ。

三、三項中電線守備ニ關スル一節ハ、先方ノ意見通リニテ差支ナキモ、電線處分ニ關セル一節ハ訓令外ニモアリ、又我ト朝鮮政府ト直接ニ取極ムベキ筋ノモノニモ非ラザレバ